

西部



ペンション村 (岸本町)



弓ヶ浜半島 (米子市・境港市)



- | | | | |
|-----|-----|------|-----|
| 江府町 | 名和町 | 岸本町 | 米子市 |
| 溝口町 | 中山町 | 日吉津村 | 境港市 |
| | 日南町 | 淀江町 | 西伯町 |
| | 日野町 | 大山町 | 会見町 |

中 海

島根県にまたがる県西部の汽水湖で、北は島根半島、東は弓ヶ浜半島によって日本海から隔てられている。周囲八四キロメートル、面積九・八五ヘクタールで、琵琶湖、霞ヶ浦、サロマ湖、猪苗代湖に次いで国内第五位の広さをもつ。平均水深は五〜六メートルで湖底は平坦であるが、北端近くに最大水深一七メートルの凹所がある。弓ヶ浜半島北端の境水道で日本海に通じ、大橋川で西方の宍道湖と繋がっている。

中海の形成は、約十五万年前の最終間氷期にさかのぼる。当時、日本海の一部であった中海付近は、日野川河口から延びてきた砂州によって隔離され、内湾となった。続く最終氷期には海面が下がって陸域となったが、約六千年前の縄文海進時には再び海域となり、砂州も形成されて弓ヶ浜半島となり現在の中海が成立した。湖中の大根島と江島は、最終氷期のはじめ頃に噴出した玄武岩溶岩からなる低平な火山島で、大根島には中央部に位置する大塚山と呼ばれる小さなスコリア丘のほか二カ所

に溶岩トンネルがあつて、火山地形がよく残っている。

昭和三十八年（一九六三）、農水省直轄の中海干拓事業がスタートした。これは埋立てと干拓による農地造成と、中海の淡水化による農業用水の確保を目的としたものであつた。しかし、環境保全や淡水化によって予想される水質汚濁などが問題となり、島根県側の彦名・弓ヶ浜両地区の埋立て、島根県側の揖屋・安来両地区の干拓、淡水化のための中浦水門の建設が完了したところで、事業は現在中断されている。残る本庄地区の干拓のために敷設された堤防は、江島・大根島を経て弓ヶ浜半島と島根県側を結ぶ道路として利用されている。平成十二年（二〇〇〇）十月六日に発生した鳥取県西部地震では、埋め立て地や干拓地に地盤の液状化などの被害が集中した。

中海には、毎年十月頃に飛来するコハクチョウをはじめとして水鳥が多く、彦名地区には野鳥観察のための米子水鳥公園がある。

日野川

鳥取・岡山県境の道後山（一、二

六九メートル）および鳥取・岡山・島根県境の三国山（一、〇〇四メートル）の源流部から、県西部を北流して日本海に注ぐ流長七七・四キロの県内最長の一級河川である。流域面積は、八六〇平方キロメートルで県東部の千代川（一、一九〇平方キロ）より狭い。

本流は、日南町、米子市など県西部の九市町村を流れる。江府町江尾までは北東に流下するが、ここから下流部では大山の西縁に沿って北西の流路をとる。上流部の主な支流には生山から南に分かれる石見川と、このやや下流で北に分かれる印賀川がある。日野川と石見川の合流点付近には名勝の石霞溪があり、印賀川には菅沢ダムとその貯水池である日南湖があり、ともに奥日野県立自然公園の中心となっている。江尾付近から下流部では、溝口町古市で左岸側から野上川が合流するほかは、主として右岸側の大山から多数の支流を集めて流下し、岸本町岸本からは米子平野に入り、法勝寺川を合わせたあと皆生温泉東の河口に至る。

日野川の中流部から上流部は、三郡変成岩および花崗岩が分布している。生山から根雨の間や江尾の下流

美女石付近では、これらの岩盤を浸食する穿入蛇行が見られる。花崗岩は風化によるマサ化が著しく、特に上流部のマサ土地帯では江戸時代にタタラ製鉄が盛んに行われた。カンナ流しによる流砂は、日野川によって運搬され、河口からのびる弓ヶ浜半島の砂州が成長する大きな要因となった。



大山関連

名所 大山

JR米子駅よりバス五〇分 登山道入口下車、徒歩一〇分

県西部に位置する中国地方の最高峰で、主峰弥山の三角点は標高一、七〇九・四メートル。山頂は弥山から東へ切り立った稜線状にのび、最高点の剣ヶ峰（一、七二九メートル）を経て天狗ヶ峰（一、七二〇メートル）に至る。弥山の三角点の標高は一、七二〇・六メートルであったが、平成十二年（二〇〇〇）に発生した鳥取県西部地震の際に崩落し、約八メートル東へ移設されたため現在のように一メートルほど低くなった。南北方向から望む大山は、稜線下に大岩壁がそそりたち荒々しい山岳景観を見せるが、西から望むと穏やかな円錐状の山容を見せ、「伯爵富士」とも呼ばれる。山の北面と東面は、深く刻まれた谷が放射状に発達し、北壁に源を発する佐陀川上流部の元谷は浸食による大小の岩塊で埋め尽くされている。北面を流れる阿弥陀川や甲川には阿弥陀滝・庄司ヶ滝が、東面を流れる加勢蛇川には

大休滝や大山滝、鮎返りの滝などがあり、ハイカーたちの目を楽しませてくれる。

大山は、約百万年前から一万数千年前までの火山活動によって形成された大型の火山で、その噴出物からなる山麓部は南北約三〇キロメートル、東西約三五キロメートルに広がり、北の裾野は日本海の海岸まで達する。

大山は複成火山でその火山活動は、約四十年前までの古期大山火山活動と、約三十万年前以降の新期大山火山活動の二期に分けられる。古期大山の噴出物は大量の溶岩と火砕岩が主で、矢筈ヶ山（一、三五八メートル）から船上山（八六九メートル）へ延びる東大山や烏ヶ山南方の城山の尾根は、この時代の普通輝石斜方輝石デイサイト溶岩で構成されている。火砕岩は溝口凝灰角礫岩と呼ばれ、山麓一帯に広く分布する。また北麓の飯戸山（五一五メートル）や鏝拔山（七〇四メートル）、豪円山（八九一メートル）なども、古期大山活動期に形成された側火山である。

一方、新期大山の活動は何度も繰返されたテフラ（火山灰）の噴出で



特徴づけられる。上空高く放出された火山灰の多くは、偏西風により大山から東方に運ばれ、東山麓では溝口凝灰角礫岩の上に厚く堆積している。これらの火山灰のうち、約五万年前に噴出したDKPと略称される大山倉吉軽石層は、北陸・信州・関東北部まで分布することが知られている。このような火山灰の噴出の間には、火砕流も流出して主に西麓に見られる榎水（高）原や清水原・楨原・水無原・福永原などの平坦地形を形成した。活動末期には溶岩ドームとして弥山・三鈴峰（一、五一六メートル）や烏ヶ山（一、四四八メートル）が出現した。北西部に位置

する孝霊山は側火山で、新期大山活動期の初期にできあがったものと考えられる。これら新期大山活動期の噴出物は、古期のものと同様デイサイト質であるが、黒雲母、角閃石、斜方輝石を含むことで特徴づけられる。

昭和十一年（一九三六）、指定された大山国立公園は大山地域のみを対象とするものであったが、昭和三十八年（一九六三）、岡山県の蒜山高原地域および島根県の島根半島、隠岐諸島、三瓶山地域が加えられ、大山隠岐国立公園として大きく拡充された。

大山寺周辺には旅館や土産物屋が建ち並び、春の新緑、夏の登山、秋の紅葉、そして冬のスキーと、四季折々にさまざまな表情を見せ、訪れる人々で賑わう。

標高七七〇メートルの大山寺からは弥山山頂へ夏山登山道が整備され、登山道の八合目から頂上までは、天然記念物の大山キヤラボクの保護および踏み荒らしによる山頂部の荒廃を避けるため木道が敷かれている。かつては、弥山と天狗ヶ峰の間の山頂稜線は大山縦走路として登山者に親しまれたが、弥山と剣ヶ峰の

間には崩落により特にやせ細った箇所があり、滑落事故が起こるなど危険なため、現在は登山道から除外されている。

大山寺を起点とする大山環状道路は、標高七〇〇〜九〇〇メートルのブナ林帯を通り、榎水（高）原を経て烏ヶ山南東麓の鏡ヶ成まで、山体を西回りにほぼ半周する。新緑の初夏や、紅葉の時期には観光客の車で混み合うが、途中、鍵掛峠から望む大山南壁の景観はことに美しい。環状道路は鏡ヶ成で、蒜山高原に至る蒜山大山スカイラインおよび関金温泉に至る如来原倉吉線に分岐する。

《大山の歴史》

仏教渡来前の大山は、『出雲国風土記』の中で、「国引き」の神話の舞台となっている。

地形的に考えても、出雲・伯耆にまたがり、日本海沿岸に位置するこの山は、例えば航海の目標にしる、陸上交通の拠点にしる何らかのかたちで、この地方の重要なポイントとして崇められていたことが想像できる。

仏教渡来後、山岳仏教が始まり、かつては幾多の名僧学僧が出たが、

明治元年（一八六八）、排仏毀釈によりその勢力が衰えた。奈良朝から平安朝にかけては、神仏習合説により、地藏菩薩の垂迹が大智善神であるとして、大智明権現を祀った。南北朝時代には、後醍醐天皇を擁して、名和長年とともに弟・信濃坊源盛が多くの僧兵を引きつけて船上山で戦った。

明治三十七年（一九〇四）に指定された重要文化財の阿弥陀堂、昭和六十三年（一九八八）に指定された大神山神社奥宮、下山神社をはじめ、大山には文化財が多く残る。

また、大山はもとは山自体を御神体として崇め祀ったものといわれて



いる。しかし、他の山と同様に近代まで一般の登山が制限されていた。明治時代を迎えると登山への道も開かれ、新しい時代の大山の歴史が開かれていった。

《大山の動植物》

植物分布

「高山植物」の名称は、ヨーロッパ・アルプスの植物を高山植物としたのが始まりであるが、実際は寒地植物といふべきで寒い高山に分布するので、高山植物という。植物の熱帯から寒帯までの分布（水平分布）は、高山のふもとから頂上までの分布（垂直分布）と一致する点があり

大山の高山植物の中に樺太・カムチヤツカの平地や海岸の寒い地方に分布するものも見受けられる。

高山植物の分布帯は、山麓帯・高木帯、（下部・落葉広葉高木帯、上部・針葉高木帯）、低木帯、草本帯、地衣帯、雪帯と分けるのが標準であるが、大山では高木帯が山の下部にあつて、すべて落葉広葉高木、上部は低木と草本だけで、その間に針葉高木帯がない。これは日本海側特有の変則的な分布であつて、大山の気象条件に深く関係する。独立峰大山は十二月から三月までの四か月は、北西の季節風が強く吹きつける。丈の高い樹木は広葉を落して対処する

参考

夏には特に多くの登山客が大山を訪れる。登山者のなかには、御来迎を見ようと朝早くに宿を出発し登山する人もいる。しかし、大山の日の出を見るのは、頂上よりはむしろ途中の七合目から八合目まであたりが適当である。

大山では頂上から剣ヶ峰に至る縦走路の途中から、日によっては元谷側に出る雲上に、自分自身の影坊主が写され、その頭部を中心に円形の五色の虹が出現することがしばしばある。これは「ブロッケン」の怪」といって、アルプスなどの山岳ではよく見られる現象である。

本来の御来迎とは、どこでも見られる日の出をさすものではなく実はこの五色の光背を負った自分自身の仏形を、雪中に見ることである。

が、針葉樹はこの強い風の中葉をつけたままでは冬が越せない。よって、針葉高木が生育しないことになる。

大山の山麓帯はアカマツを主とし、マツムシソウの花咲く原野も多い。

大山寺横手付近から一、四〇〇メートルまでは落葉高木帯で、その下層はブナ・ミズナラ・イタヤカエデなどの落葉高木、その上層部はブナとオオカメノキ（落葉低木）を主とした美しい原始林が開ける。ブナの大群落は大山の自慢で日本中部以北のシラカンバにあたる。これらの樹木は雪や寒風をさけて落葉する。

この下層の高木林下には常緑針葉低木のハイヌガヤ、チャボガヤ、常緑広葉低木のエゾユズリハなどが多い。これらは葉を落とさず雪をかぶるので、寒風を避けた最適の形態で冬を過ごす。一、四〇〇メートル以上は高木帯から直ちに低木草本帯になる。この間に緑色の針葉高木帯が存在しない点で、特異性がある。

低木草本帯まで来ると、北海道の高原でも見られる白い花を咲かせるノリウツギ（アイヌ名サピタ）の群落があり、甲ヶ山や蒜山には、千島、樺太の平地や海岸にあるコケモモ

見られる。さらにアカミノイヌツゲ・ダイセンミツバツツジ・ダイセンヒヨウタンボク・ウスゲヤマザクラなどの下にダイセンスゲが目につく。

ダイセンキヤラボク

大山で一番目につくのがダイセンキヤラボクの群落で、北西に向けたなだらかな一面を占める。この中の大群落は世界的にも貴重で特別天然記念物に指定されている。これは東西一〇メートル、南北三二〇・八メートルに広がる、ゆるやかな大斜面を被い、すべてシベリヤ方面に向けて開けている。

この木はいずれも高さ五〇センチから二メートルの低木で、イチイの変種であり材は硬く、根元から多くの枝が分かれて平伏している。葉は針葉で尖端がとがり、常緑でやや広く、長さ十三ミリぐらいで枝の周囲から出ている。雌雄異株で、花は五月に咲く。

大山の頂上は十二月から五月の半年間は雪に覆われ、深さ三メートルに及ぶ。しかも、北西のシベリヤからの冷たい風雪は岩を砕くほど強い。植物はこの雪の下で大きな厚い

毛布を着たような姿勢で寒風を防ぎ雪解けを待つ。

ダイセンキヤラボクの純林をよく見ると、林縁に枝の枯れたものがある。これは北西の季節風によって雪が吹き飛ばされ、枝葉が雪風にさらされたために枯れたものである。これは頂上に生えるハイヌツゲにも見られる。また、枝は、いずれも北西方、すなわち寒いシベリヤの方向で、山の下に向かっている。ダイセンキヤラボクは寒さと雪を好む植物で、雪ずりに適応した高山植物といえる。

高山帯の植物

大山の高山帯では、ミヤマイボタ・ヤブウツギ・ヤマヤナギ（元ダイセンヤナギ……今はつかわない）などの低木、ナンゴククガイソウ・ヒトツバヨモギ・イヨフウロ・コマススキなどの草本の群落がみごとである。このほかにエゾノヨロイグサ・ヤマオダマキ（ミヤマオダマキは産しない）、シュロソウ・アオヤギソウなど美しく、オオバシヨリマ・ヘビノネゴザ・シラネワラビ・ミヤマワラビなどのシダ類も見られる。シモフリゴケのようなコケ類が

生育するダイセンキヤラボクの幹には大型の地衣類ウスバカブトゴケのみごとな着生が見られる。

小さい草本ではオオヤマフスマ・マイゾルソウ・イワカガミ・キユウシユウコゴメグサ（元ダイセンコゴメグサ）など、夏の大山頂上には可憐な花が咲き美しい風景が広がる。

樹水原に降りるいわゆる正面登山道から下山すると、高山帯を上から下へ三十二度の急斜面を下ることになる。上空からの展望はまた格別よい。わずかの岩場にキュウシユウコゴメグサ（元ダイセンコゴメグサ）・ヤマオダマキ・ダイセンオトギリをはじめツツジ科植物に属し常緑低木の小さな高山植物であるツガザクラ・コメバツガザクラ・シラタマノキ・ミヤマホツツジなどが点々と咲き美しい。上方にはキツネヤナギ（元ダイセンヤナギ）の一〇センチ内外の低木で、株の太いものが目立つ。下に降りると次第に丈が高くなって、横手道まで下りると一・五メートルの中低木になる。この斜面にはオオバギボウシの大群落やミヤマコアザミ・チャボゼキシヨウも見られる。

落葉高木帯になると、林内に光が

入らないところがある。この付近には日本中部以北の寒地に分布するオヤマザクラ(別名ベニヤマザクラ・エゾヤマザクラ)が、雪の消えた五月頃に満開となりみごとである。オヤマザクラは大山以南では島根県三瓶山・山口県冠山に生育する。

絶壁帯

岩石の落下が多く、わずかに安定したところにダイセンオトギリ・ミヤマクワガタ(元ダイセンクワガタ)・ヒメアカバナ・カンチコウソリナ・チャボゼキシヨウ・ノウゴイチゴなどが生育する。これらが岩石と落ちて、八〇メートルの横手道の沢などで生長し、お花畑が見られる。

大山の高山お花畑

大山頂上は海拔高度が高く、元谷や地獄谷では夏でも残雪があるほど気温が低い。よって七月、八月に高山植物がいつせいに開花し、お花畑が出現する。

大山の高山植物の由来

高山植物は一般にたけが低く、株が太い。また、根が深く、花の美し

いのが特徴である。高山植物は、夜になり気温が下ってから生長する。昼は空気が清浄で紫外線が多い。これは植物にも有害なため、自衛のための美しいアントチアン(花色素)とフラボンが発育し、紫外線を吸収して植物を保護している。高山植物の花の美しい理由がここにある。

大山が活動した第四紀更新世には、氷期と間氷期が繰り返した。この氷期時代には北方のペーリング海、オホソク海の周辺、アラスカ、アリューシャン群島、カムチャツカ半島、樺太、千島、北海道などの寒地植物が南下し分布した。一方、朝鮮海峡が陸続き時代であったこともあり、この方面から寒地植物が渡来し、温暖になった現世にも高山に取り残されていると考えられる。特殊な自然環境でここに発生したものである。

博労座は豪円山の西下にある谷間で、七〇メートルの低いところであるがブナの生育がよく、ブナやミズナラからなるみごとな原始林である。このように低い所にブナの美林があるのは北西のシベリヤから吹いてくる季節風の影響である。北西の季節風が豪円山にあたってはねかえ

り、長い期間渓谷に雪が残る。谷の気温も低くなりブナの生育に適した環境となっている。いわゆる山陰型渓谷植物景観をつくっている。

標高八九一メートルの豪円山にはみごとなクロマツ林が分布する。通常、クロマツが下位に、ブナが上位に分布するが、ここで見られる逆転分布は、学術上きわめて貴重である。

もともと大山にはクロマツが多い。特に伯耆大山・伯耆溝口あるいは中山町羽田井などから登るいわゆる昔の大山の参道脇には、道標としてのクロマツの巨木が目立つ。樹齢三百年から三百五十年を数えるクロマツは、冬、深雪のため道を見失わないよう目印として植えられたものである。豪円山や中ノ原、上ノ原に生育しているクロマツは、参道脇のクロマツの種子が強い北西の季節風によって吹き飛ばされ生えたものである。

全山の植物は千種を超え、全山大植物園の観がある。しかし採取は禁じられている。

鳥類

大山は鳥の多いことでも有名である。大山寺付近の遊歩道で、多くの

種類の鳥を見聞きできる。とくに五月の六月の新緑の季節には、渡ってきた夏鳥も加わって賑やかなる。林の中では声・姿とともに人気のあるオオルリをはじめ、ウグイス、キビタキ、マミジロ、クロツグミ、センダイムシクイ、ヤブサメ、コサメビタキ、サンコウチョウ、ゴジュウカラ、アオバトなどの特徴ある鳴き声を楽しむことができる。また、アオゲラ、アカゲラ、オオアカゲラと大型のキツキが幹を叩く迫力あるドラミングを聞くこともできる。これらの探鳥には大神山神社や寂静山の辺りあるいは横手道が適当である。

川床や地獄谷などの渓谷部ではヤマセミやアカシヨウビンに出会う。北壁の断崖に営巣するアマツバメは最もスピードが出る鳥だといわれ、ジュリリリと鳴き交わしながら鎌形の翼を張って飛ぶ様は南光河原で見ることができ。六月になると声のブツボウソウといわれるコノハズクや寂しさを感じさせるヨタカが鳴く。ガスや雨の夜は源頼光が退治した鶴の正体とされているトラツグミの声が不気味である。開けた場所ではカツコウやホトトギス、林の中ではツツドリなどの鳴き声を耳にす

る。また、草原ではセツカヤホオア
カが囀り、山頂や稜線近くの低木帯
では、高山性のビンズイ、カヤクゲ
リ、メボソムシクイ、クロジ、コル
リが珍しい。

秋には冬鳥が渡ってくる。マヒワ
やアトリは大群を作って飛行した
り、梢で採を餌つたりする。秋の深
まりとともにツグミなどと同様に平
地に渡ってくる。

年中通して見られるカラ類は、秋
にはエナガを中心に、シジュウカラ、
ヤマガラ、コガラ、ヒガラ、さらに
科のちがうメジロやコゲラなどが入
り混じり、一団となって移動してい
く。

ワシタカ類では中腹の山中でオオ
タカの営巣が発見されているが、ク
マタカ、イヌワシ、ハチクマ、ハイ
タカやハヤブサがそれぞれの時期に
応じて見られる。ヤイロチヨウヤイ
スカのような個体数の少ない稀種も
記録されている。

昆虫類

標高差があり、地形も変化に富ん
でいることから、多様な植生に恵ま
れている。また、自然がよく残って
いるので昆虫類も豊富で、採集地と

して有名である。このため種あるい
は亜種として「ダイセン」の名を冠
するものが多い。

ダイセンコツノゼミ
ダイセンオサムシ

ダイセンナガチビゴミムシ

ダイセンミズギワナガゴミムシ

ダイセンナガゴミムシ

ダイセンツヤゴモクムシ

ダイセンコバナナガハネカクシ

ダイセンピロウドコガネ

ダイセンムツボシタマムシ

ダイセン

セダカコブヤハズカミキリ

ダイセンチビツチゾウムシ

ダイセンホソガガンボ

ダイセンヤマブユ

ダイセンシジミ

ダイセンセダカモクメ

とあげられる。甲虫で約千種、チヨ
ウで約百二十種が記録されている。

大神山神社付近や横手道、二の沢、
三の沢、さらに榊水原や原野に多く
の種が生息していた。チヨウのジヨ
ウザンミドリシジミ、エソミドリシ

ジミ、アイノミドリシジミといった
ゼフィルス類は、横手道で早朝に乱
舞したが、現在はあまり見られない。

中国地方特産のウスイロヒヨウモン

モドキやヒヨウモンモドキ、ヒメヒ
カゲ、オオウラギンヒヨウモンなど
の山地の草原に生息するチヨウモ、
榊水原の開発で見ることができなく
なった。

他の動物にもダイセンヤチグモ、
ダイセンアイノダニ、ダイセンニシ
キマイマイと大山の名が付くものが
あるように、動物相の豊富さがうか
がい知れよう。

《大山自然探勝路》

大山の自然探勝の遊歩道には、大
山寺・切分け（金門）・大神山神社
奥宮まで上がって引き返し、寂静
山さんに上がり、豪円山下ごうえんさんにあたる立の
坂の上で終るものがある。約二キロ
の山道には、樹木、鳥、自然などに
ついて簡単に説明した看板がある。

また、沿道の樹木には名札が設置さ
れていて、一目で何という樹木かわ
かるようにしてある。これらを植物
分類順にあげると次のとおりであ
る。

イヌガヤ科 ハイイヌガヤ
イチイ科
ダイセンキヤラボク・チャボガヤ
イチヨウ科 イチヨウ

マツ科

モミ・カラマツ・ヒメコマツ

クロマツ

スギ科 スギ

カバノキ科

アカシデ・クマシデ・イヌシデ

ブナ科

ブナ・イヌブナ・クリ・ミズナラ

ニレ科 ケヤキ

モクレン科 ホオノキ

クスノキ科

ダンコウバイ・クロモジ

ユキノシタ科 イワガラミ・ウツギ

マンサク科 マルバマンサク

バラ科 コゴメウツギ・ナナカマド

カスミザクラ・キンキマメザクラ

ウワミズザクラ・アズキナシ

マメ科

ヤマフジ・ハネミイヌエンジュ

ウルシ科 ツタウルシ・ヤマハゼ

ヤマウルシ・ヌルデ

モチノキ科 アオハダ・イヌツゲ

クロソヨゴ・ソヨゴ

ニシキギ科 コマユミ・ツルマサキ

ブドウ科 ツタ

カエデ科 ハウチワカエデ

オオモミジ・イロハモミジ

ウリハダカエデ

マタタビ科 サルナシ

キブシ科 キブシ
ウリノキ科 ウリノキ
ミスズキ科 ハナイカダ・アオキ
ミスズキ科 ミズキ・ヤマボウシ
リヨウブ科 リヨウブ
ウゴキ科 コシアブラ
ツツジ科 ヤマトツツジ・アクシバ
ダイセンミツバツツジ
ハイノキ科 サワフタギ
モクセイ科

ミヤマイボタ・ヤマトアオダモ
クマツツラ科
クサギ・ムラサキシキブ
スイカズラ科 ニワトコ・タニウツギ
オオカメノキ・コバノガマズミ
《大山の民俗・芸能》
現在、大山の主要な祭礼は次のよ
うなものがある。

春祭り（五月二十四日）
春祭りは、三所権現（大智明権
現Ⅱ地藏菩薩、靈像権現Ⅱ観音菩薩、
利寿権現Ⅱ文殊菩薩）の御幸行列が
行われ牛馬市が立った。かつては、
百人担ぎの御輿（大智明権現）と五
十人担ぎの御輿（靈像権現）が繰り
出して盛大に行われた。
祭礼の翌日には必ず大雨が降ると

され、市に集められた牛馬の排泄物
を洗い流すことから「大山さんの大
くそ流し」といわれた。

現在は、大山寺に伝わる小振りの
御輿を公募した厄年の青年が担ぎ御
幸する。また、この日の午前中、大
山へ向かう道の一息坂（中山町香取）
では同町束積の小谷家が参拝者を接
待する「一息坂のもてなし」が江戸
時代さながら行われる。

夏山開き（六月第一土・日曜日）
夏山開きは、登山の安全を祈願す
る新しい祭で、多くの登山客で賑わ
う。土曜日の夜、大神山神社奥宮で
祭典が行われた後、たいまつを手に
した参拝者が博労座まで行進する。
翌日は山頂の祭壇で神官・山岳関係
者によって神事が行われる。

もひとり神事（七月十四日）
もひとり神事は、本来「弥山禅定」
と呼ばれ、僧侶がこの日だけ霊水と
薬草を求めて山頂に登ることのでき
る行事であった。
しかし、明治の神仏分離政策以降
は大神山神社奥宮の神宮に引き継が
れ、現在は大山の正式な山開きの儀
式となっている。七月十四日の夜中、



神官と先達に先導された信者一行
は、梵字ヶ池（八合目）へ登る。こ
こで池の水と周囲に生えるヒトツバ
ヨモギを採取し下山する。下山後、
霊水と薬草は参詣者に配布される。
施餓鬼法要（八月十五日）
施餓鬼供養は阿弥陀堂（建造物、
阿弥陀三尊像とともに国の重要文化
財）で行われる。この日は、参詣者
の先祖供養として、流れ灌頂が行わ
れる。

採灯護摩法要（十月二十四日）
秋の採灯護摩は、大山町の観光イ
ベント「紅葉まつり」の中心であり、

稚児と大峯行者が大山寺本堂まで行
列し、採灯護摩が行われる。さまざま
な山伏の作法が続いた後、信者・
参拝者の祈願が書かれた護摩木が加
持されてくべられる。

大山寺

大山寺がいつ創建されたかは不明
である。知積上人・行基菩薩の創立
といわれたり、あるいは養老（奈良
時代）のころ、玉造の俊方（出家し
て金蓮）が開いたなどといわれたり
しているが、伝説の域を出ていない。
平安時代の初期には密教が流行
し、奈良時代の平地仏教が山岳仏教
となった世の風潮につれ、高野山や
比叡山がそうであったように、大山
も開かれ、建立されたものと推察さ
れる。

慈覚大師が唐から帰朝し、引声阿
弥陀経を貞観七年（八六五）にここ
に伝えたとき寺伝にあるが、自ら来山
したということは確かではない。
阿弥陀堂や内部の諸仏によって、
当寺が平安時代に非常に栄えていた
ことが考えられる。その末期の寛治
八年（一〇九四）には、大山僧兵が三
百人も京都に強訴に出かけている（中



右記)。基好のような学僧が出てくることも、その寺が隆盛であり学問が盛んであったことを物語っている。平安時代には、ほとんどの神社で神仏混淆が行われていたが、大山もそれにもれず大智明権現・地藏信仰が盛んとなり、神社と仏寺とが併存した。いまも寺内に多くの神社や鳥居を見ることが出来る。

源平時代には西伯の豪族・紀成盛が厚く尊崇し、承安元年（一一七一）七月に起きた大山大火のときには、金銅地藏尊（たびたびの火災で破損、いまは頭部だけが残る）、鉄製厨子（破損してばらばらになっているが、補修して元の形にした。これに張っ

た鉄板には銘文が鑄出している）を寄進した。この二つは明治三十七年（一九〇四）二月に国の重要文化財に指定されている。南北朝時代には名和長年の弟・信濃坊源盛が僧兵を引き連れ船上山合戦に参加し、天皇方に尽くした。

戦国時代になると信仰と僧兵の武力により、盛んに活動していたことが諸書に散見される。

また、尼子氏も晴久以来数代、大山の信者で、天文二十三年（一五五四）三月の大火の後も、尼子晴久一門の大々的な再興の寄進が行われた。洞明院所蔵の棟札写に詳しく見える。尼子氏が永禄九年（一五六六）、毛利氏に亡ぼされた後は、毛利氏が仏殿、宮殿、仏体などの大規模の奉納をしている。毛利氏は寄進などをして、大山信徒を味方につけようとした。

天正十年（一五八二）には毛利輝元、吉川元春、小早川隆景などが諸堂を建立したり、諸仏の奉納したりしたのもその表れである。

吉川氏は特に崇敬が厚く、文禄の役では、吉川広家が船に大山丸と名づけ、下山善神を祀って戦勝を祈った。

また、尼子氏遺臣・龜井氏の尊敬も厚く、龜井政矩は大坂の役の戦勝を祈り、戦後は社殿を改造している。現存の下山神社は、文化二年（一八〇五）に建築されたものである。八棟造りの社殿は龜井氏の寄進によるもので、社殿の所々に龜井氏の四目結の紋章がある。

慶長年間（一五九六～一六一五）、米子城主・加藤貞泰も、神輿を奉納して崇敬の誠を表わしている。江戸封建制が確立し各領主の所領が定められたが、慶長年間に豪田が幕府に哀願し、慶長十五年（一六一〇）に三千石寺領安堵（寺領確保の証明）の朱印状を得て、長く鳥取藩の治外法権の区域として盛えた。三千石の寺領はいわゆる大山領であって、汗入（西伯郡の一部）日野両郡にまたがる二十三力村である。

また、寺内には、四十四の塔頭の諸院があつたが、現在は理観院、蓮淨院、金剛院、普明院、法雲院、観証院、洞明院、円流院、寿福院、禅智院などが残っているにすぎない。大山寺本堂に登る石畳の左右や南光院川を渡って阿弥陀堂までにある草に埋れた石垣や屋敷跡は、全て廃寺の跡である。寂靜山などにも屋敷跡

が多く、往時の大山がいかに盛んであつたかを物語っている。

宝永七年（一七一〇）までは多く天台座主が兼任して大山を支配したが、これ以後は滋賀法親王（坂本滋賀院・日光法親王の隠退所）の支配となり、いよいよ大山の権勢はあがった。大山の政庁は本坊で西楽院と、現在の大神山神社奥宮社務所の後方にあたり、いまも広い屋敷と壮麗な石垣を残している。坂本から派遣された代官はここにいた。

現存の諸社寺は、大神山神社奥宮、下山神社、大山寺本堂、阿弥陀堂であるが、盛時には金門をはさみ求問持堂、金剛童子、山神護法、釈迦堂、利寿大権現、靈像権現、虚空蔵、八大龍王などがあつた。

隆盛を極めた大山寺も明治の廃仏毀釈により、明治八年（一八七五）に大山寺号が廃止となり、大智明権現は大神山神社奥宮となり、多くの大山に伝えられた文化財も散逸し、寺運も急速に衰えた。明治三十六年（一九〇三）に大山寺号が復活したが、本堂は昭和三年（一九二八）に炎上し、信徒の浄財によって再建された。

なお、大山寺内には、豪田僧正石

像、信濃坊源盛碑、高網等身地藏、僧塔然の碑、三輪平太碑、基好の墓などがある。

年中行事は左のとおりである。

一月 三日 元三会

二月十五日 涅槃会

四月八日 仏生会 春秋彼岸会

六月四日 山家会

六月十五日 孟蘭盆会

十一月二十四日 天台会

五月二十四日・七月十五日、九月二

十四日 祭日

大山寺阿弥陀堂

西伯郡大山町大山寺
JR米子駅よりバス約
五〇分、大山寺下車、
徒歩五分

南光河原の西に位置するブナ林の中にある。大山寺の堂で現存する唯一のものである。五間四方単層宝形造で柿葺きの美しい建物である。寺



伝によると貞観七年（八六五）、慈覚大師によって創建されたというが、明らかではない。明治三十七年（一九〇四）、国の重要文化財に指定されている。

堂内には木造阿弥陀如来、両脇侍像が安置されている。これらは明治三十六年（一九〇三）四月に国の重要文化財に指定された。

大山寺宝物館

西伯郡大山町大山
JR米子駅よりバス約五〇分、大山寺下車、徒歩五分

「靈宝閣」

靈宝閣は、大山寺の宝物館として昭和五十五年（一九八〇）に設置された。

かつて大山寺本堂に安置されていた重要文化財である観音像四体をはじめ、県指定保護文化財の梵鐘や各寺で保管されていた仏像などが展示されている。

開館時間 午前九時～午後四時三〇分

休館日 十二月～三月末

問合せ先 ☎0859・52・2072

大山のカラス天狗

大山では、くちばしのある天狗、「カラス天狗」の姿を絵馬や土鈴に見る。また、平成九年（一九九七）五

月、大山町仁王堂公園には高さ八・八メートル、重さ一〇トンで、翼があり、鳥の頭に山伏姿をした天狗像が設置された。

大山には、「大山伯耆坊」とも「伯耆大山清光坊」ともいわれる天狗が棲んだと伝えられる。前者は日本一の「八大天狗」の一つであり、後者も「四十八天狗」に数えられる。

また、米子市や日南町には大山の天狗が羽根を休めたという木の伝承があり、『陰徳太平記』には、大山大智明権現の神勅を尼子晴久に伝える天狗風の山伏が登場する。たくさん天狗伝承は、大山が日本有数の霊山であったことを伝える証拠である。

大山と文学

大山はさまざまな作品に登場している。

『出雲国風土記』には「大神岳」と記され、「輪郭に張切った強い線を持つ」大山の霊気が表現されている。

志賀直哉（一八八三～一九七二）の代表作『暗夜行路』のクライマックスは、大山が舞台となっている。ここに記された大山寺の風物、頂上からの展望など、みごとな描写は読

者を引きつけて離さない。大正三年（一九一八）、大山寺・蓮浄院に宿泊したときの体験が、鮮烈に生きている。

また、日野郡溝口町生まれの大江賢次（一九〇五～一九八七）は、大山を父と仰いだ。『望郷』（昭和四十四年）の一節は、江府町御机の文学碑に刻まれている。

「おお大山、大山！」

いや、大山さん

おんみは私の親父

永遠に慈愛と威厳をもつ

母なるふるさとの父よ」

プロレタリア作家であった大江は、非合法活動で検挙され、昭和九年（一九三四）に失意の心で帰郷した。そのときの思いを次のように書いている。

「結婚も破れ、死を決してひそかに帰郷した時の、伯耆大山駅のプラットホーム。陽を受けた大山は朱にかがやき、その『親父』の朱をそそいだ沈黙の諫めは、私を現在まで生きのびさせて下さった」

高浜虚子（一八七四～一九五九）

は昭和七年（一九三二）に訪れている。

「秋風の急に寒しや分の茶屋」

大山寺参道には、昭和四十年（一九四五）に建立された句碑が立っている。

虚子句碑に並ぶように米子市生まれの安部東水（一八九九～一九七三）の句碑が立つ。

「笹鳴や春待ちたまふ佛たち」

これは、昭和五年（一九三〇）、東京日日と大阪毎日新聞社が公募した「日本新名勝俳句」に入選した作品。

このほか、大町桂月（一八六九～一九二五）、河東碧梧桐（一八七三～一九三七）、田山花袋（一八七二～一九三〇）、斎藤茂吉（一八八二～一九五三）ら多くの文学者が大山の魅力をもて残している。

県立大山 自然科学館

西伯郡大山町大山
JR米子駅からバス五〇分、大山寺バス停下車すぐ

大山の自然、歴史、文化などを紹介する施設として昭和五十一年（一九七六）三月に開設された。大山の地形、地質、動植物の標本が展示されているほか、平成二年（一九九〇）に設置された映像ホールでは、マル

チスライドにより美しく、迫力のある映像で大山の素顔が紹介されている。自然保護活動の拠点施設としての役割も果たしている。

なお、現在、新たな施設（「大山自然歴史館」（仮称））が計画されている。

開館時間 午前九時～午後四時

休館日 毎週月曜日

問合せ先 ☎0859・52・2327

大神山神社奥宮

西伯郡大山町大山
JR米子駅よりバス五〇分、大山寺下車、徒歩二〇分

大神山神社は「延喜式」に記載され、伯耆国二宮として崇拜を集めた

古社で、本社を米子市尾高に置く。古代・中世には山陰道における修験霊場の中心として大山寺の本地仏三所権現を祀った。初めは大山中腹の現奥宮に鎮座していたが、中古には山麓と山腹に社殿を造営し、それぞれ冬宮と夏宮にと称した。冬宮はのちに二宮大明神と称し、延宝年間には現在の米子市尾高に社殿を移したが、夏宮は社僧によって本地仏が置かれて大山権現となり、明治の神仏分離令により今の大神山神社奥宮となった。

奥宮はかつて、大山寺の諸堂・諸

院が建ち並んでいた地域の最奥に位置した。今も、大山寺本堂前左手に石造明神鳥居が残り、約六〇〇メートルの石畳の参道が伸びている。途中には、銅製鳥居と神門が設けられている。石造明神鳥居には文政三年（一八二〇）の銘が、銅製鳥居には天明二年（一七八二）の銘がある。

奥宮社殿は参道突き当たりの石段上のやや広い平坦地に西面して建つ。社殿は前方に拝殿、後方に本殿を設け、この二棟を弊殿で連結する複合社殿である。現社殿は寛政八年に焼失し、文化二年（一八〇五）に再建されたものである。

本殿は、桁行二間・梁間二間の身舎の周囲に高欄付切目縁を廻し、向



拝三間を弊殿に取り込んでいる。基壇は亀甲形の切石積みで、身舎は石造亀腹上に土台を巡らして円柱を建てる。中備臺股・拳鼻・木鼻などの彫りや装飾は簡素であるが、垂木先の長押釘隠しには飾金具を付けるなど、外観は重厚な造りになっている。

本殿内部は前面を外陣、背面を内陣とし、内陣中央間を一段高い板床にして間仕切り、御神体を安置する。向拝は角柱に虹梁形頭貫を通し、出三斗を組んで身舎柱と虹梁で繋ぐ。向拝中央間に木階を設け、その両脇間は縁と同じ高さの張り出し床板とし、高欄を巡らす。向拝全体は総漆塗に、組物や中備臺股極彩色とし、弊殿内の装飾と合わせているが、外廻りの他の部位並びに本殿内部は素木造りとしている。

弊殿・拝殿は、本殿向拝に接続する桁行八間・梁間三間の建物で、棟は本殿に丁字形に取りつく。向拝八間のうち本殿寄り四間を弊殿とし、前寄り四間が拝殿となる。弊殿の左右には、一間幅の庇を付け、拝殿の左右には各々桁行一〇間・梁間二間の身舎の周囲に切目縁を巡らした長廊が張り出し、長大な建築となっている。

弊殿身舎内の床は畳敷（六十三畳）、天井は格天井である。身舎の柱は本殿より一回り太い円柱で、金箔張り、柱頭、頭貫、組物、桁等を極彩色とし、周囲小壁に奏楽天女を付し、天井格間には花鳥・人物・動物描かれている。深い柱に包まれた外部から拝殿を経て弊殿内部に入ると、壮麗かつ荘厳な空間が間近に迫り、圧巻である。

拝殿は、正面の入母屋屋根と大きな軒唐破風や飛貫、頭貫上の龍の丸彫り、拝殿面脇張り出し小間の半唐破風屋根など、特色ある外観をつくっている。また、拝殿に接続する左右の長廊は八間の各梁間に二重の虹梁を架けて棟を受け、化粧屋根裏を支えている。棟は弊殿・拝殿の棟より一段低くし、拝殿屋根に取りつく。

本殿・弊殿・拝殿からなる複合社殿は、共に他に見られない珍しい形式である。奥宮社殿は、左右の長廊を含む正面間口が五メートル余り、本殿を含む奥行が三メートル余りと長大で、神社建築としては最大級の規模である。内部構成や格部の技法も優れており、全国的に見ても江戸時代末期の神社建築を代表するもので、隣接する下山神社社殿と

共に昭和六十三年（一九八八）十二月に国の重要文化財（建造物）に指定された。

阿弥陀滝

阿弥陀川の源流は、三鉢峰をさきで一つは宝珠尾根との間の剣谷、もう一つは振子山親指ピーク、野田山との間を流れる阿弥陀沢とが合流して川床へと流れている。その合流地点より剣谷の方へしばらくさかのぼると阿弥陀滝がある。水脈の少ない大山地域内では大山滝とともに名のある滝の一つであり、修験の滝ともいえる。滝の水量は少ないがその周辺の景観と相まって神気漂う幽寂の滝である。

博労座

（大山の項参照）

西伯郡大山町大山寺部落の入口、道路に面した東側の広場で、また自動車の駐車場として利用されている。なお、ここで、昭和二十六年（一九五二）十月二十八日、第六回国民体育大会登山の開会式が挙げられたので、道路に面した一隅に国体記念碑が建立されている。それ以来、山

岳・スキーの全国大会などの開閉会式場利用されている。

昭和十二年（一九三七）ごろまでは、有名な大山牛馬市の開催場所として、中国・四国はもとより中部・京阪神地方にまで知られた。大山牛馬市は、七百年前、基好上人が「大山地蔵菩薩は牛馬の守護仏」と唱え牛馬守護の守礼を施与されたことにはじまり、霊場勝区を避けて例年祭礼に合わせて開かれるようになったという。

大山山腹から岡山・広島県方面のいたるところに原野があり、牛馬の放牧が盛んに行われていた。

また、大山は地方信仰的であり、大山詣りを兼ねて祭礼には市がたち、その際ほかの座とともに博労座も開かれ牛馬の売買が行われ、後代まで繁栄した。八代将軍・吉宗の享保十五年（一七三〇）、日野郡大河原村の吉川右平太という者がこれを組織的にして以来、ますます盛んになったといわれている。当時は隠岐・四国・中国の各地から毎年一万頭におよぶ牛馬が集まり、その街道筋も従来の伯楽飼主等によって、数カ所に茶屋までできるといいうぎにぎしさであった。

豪円山

（大山の項参照）

大山の歴史や自然の探索、登山などの出発点である博労座から約五〇メートルという所にあり、大山北壁、日本海などの展望台、歴史散歩の地として親しまれているところである。

標高八九メートル、大山火山群の一つである。この登り道の尾根筋には、見事なクロマツの純林がある。中ノ原、上ノ原低部のクロマツ林とともに、厳しい気象条件のため生息できない赤松にとつかわり、海岸低地の塩風に耐えて林をなしているクロマツが分布している貴重な資料である。

また、付近に叢生するタニウツギの群落は山開きのころ、ピンク色の花をほころばせる。昔は呼滝山といって盆の送り火をこの山頂で焚いて祈ったと伝えられている。今は、豪円山といい、大山寺中興の祖である豪円僧正の御影として、頂上には大きな豪円地蔵があり、伝説を秘めて西方に向っている。途中の登り道には豪円僧正を中興の第一世として、第二世より第八世までの墓碑があ

り、「世代墓」と称して拜まれている。冬季には絶好のスキーゲレンデとなる。

豪円山のクロマツ美林

この四百年近い年月の間、強い北西の季節風下の豪円山（典型的なトロイデ式火山）の標高八九二メートルの頂上に百二十本程のクロマツが生育し、世界最高分布として有名となった。

このクロマツは、下方にある並木マツが母樹となったものである。クロマツ林の下部にはブナ・ミズナラ・カスミザクラなどの落葉広葉樹が逆転分布している。

また、豪円山のクロマツが母樹となり、上ノ原スキー場に更なるクロマツの分布をなしている。

上ノ原・中ノ原

（大山の頂参照）

大山の主稜の東端付近から発してえんえんと続く宝珠尾根末端のピークである宝珠山から北方に位置する豪円山方面に向けて放射状に流れ出し、大谷で分断されている二つの大斜面があるが、この一帯を上ノ原と

いう。中ノ原とは、西端に位置する中ノ原スキー場一帯の通称である。

放射線上の頂点宝珠山山頂付近はブナ林帯である。そこから中ノ原方面に小路をたどって下ると、左側はブナ林、右側にミズナラの純林があり大山でも珍しい林相をしている。

美しい林間の道を行くと、大神山神社奥宮、下山神社につづく。

冬季は、一帯はスキー場エリアとしてよく知られている。大谷を隔てて西側の広大な草原が中ノ原、上の原スキー場、東側の林間の長大なコースが大山国際スキー場である。北向き斜面のため良質の雪に恵まれ、西日本における有数のゲレンデとなっている。

寂静山

（大山の頂参照）

開基金蓮上人寂定の地と伝えられている。山頂にある金蓮塔は、形体は原形を模倣し改修建立されたものである。大神山神社奥宮参道の中途、大山寺裏あたりから左に折れる道を約一五〇メートルほど登ったところにあつて頂上は狭いけれども、展望台としては豪円山と共に大山眺望の好位置で、ことに北壁と元谷を望む

のに適している。参詣道からもっとも近く登るに楽な山であるため多くの人に親しまれているが、ここからさらに林間を登れば中ノ原へ通じている。

金門

（大山の頂参照）

大山寺本堂に向かって左裏にあたる。南光河原の上流いわゆる賽の河原とのあいだにあつて、両側に断崖がそびえたつて数間の幅にせまつていり、今はそこに砂防用の堰堤があり清冽な山水が流れ落ちている。堰堤のできる以前はキリワケともいって、ここから不浄の徒が入ることを許さなかつたとも伝えられている。大山寺草創の頃、今の奥宮、すなわち大智明権現の本殿を造営する際、金剛鳥が舞い降りて来て、

大山多宝仏 開鑰御金門

応化身垂迹 釈迦両足尊

という偈を説いたので、以来ここに「御金門」という額面をかかげて権現本殿の正門としたという。この地点から眺める元谷から北壁の景観は、大山の代表的絶景の一つである。

南光河原

（大山の頂参照）

大山北壁の沢が集中して、元谷となり、これが金門を越えて流れ出ている河原をいう。ここから「風穴」を過ぎ、行基伝説の利生水を経て、もと阿弥陀堂のあつたといわれる常行院谷を通れば、夏路登山道、阿弥陀堂に至る。千石岩の下手を通れば大山七池で一番小さな烏ヶ池を見て大山寺本堂へ続く。昭和三十八年（一九六三）の大洪水によつて流され新しく架けられた大山寺橋（海拔七六二メートル）から山頂の見晴らしは勿論、朝鮮半島との伝説で名高い孝霊山（海拔七五二メートル）ごとに日本海が眺められる。

賽の河原

（大山の頂参照）

無明橋を渡り、木漏れ陽を浴びながら、苔むす石の参道を大神山神社奥宮へ行く途中、右へそれる道を歩くと、北壁を望むことのできる金門の上の河原に出る。この辺りを「賽の河原」ともいう。俗説によると、地藏和讃から名づけたものといわれ、人知れず小石をつみ、冥府の小児を

偲んだ。地藏尊が兩岸に安置されている。この河原の上部を元谷とい北壁につながり、また金門から下を南光河原という。

下流にむかつて左側（左岸）つまり対岸の尾根には、たくさんの屋敷跡があり、これらは天台密教修行の場と考えられ、天狗屋敷の名で呼ばれている。杉の大木があり天狗杉と呼ばれ、そのなかに上田秋声の書に書かれた大納言杉があると伝えられる。また、金門に望む岩を僧兵荒行の岩といって、一騎当千勇猛をもつて知られる僧兵荒行の一つとしてこの岩から飛んだと伝えられる。

右岸の断崖絶壁の上にも、昔、山伏（天狗）がのぞき修行したと伝えられる天狗岩がある。早朝、または人のさざめきの絶えたとき、オオルリ・ケラ・セキレイなどのさえずりがきこえる。

元谷

（大山の頂参照）

本谷とも書く。大神山神社奥宮の右奥から道を南の方に進むと、約三〇〇メートルで賽の河原の上部に出る。さらに護岸に沿って進むと河原に出て「二股」にいたり、ブナ林の

大地が中央を上を走っている。この一帯を元谷とよんで、右は北壁の大景観に接し、左には宝珠尾根の樹海を仰ぐ幽玄閑静な場所である。

北壁

（大山の頂参照）

北壁を見ずに大山の景観を口にすることはできない。西方、米子や島根県の方から眺める大山が伯耆富士、出雲富士といわれるくらい富士に似た優美な山容を見せているのに対し、北壁の山容はわずかに、〇〇メートルに足らない山とは思えないくらい荘厳である。強風や積雪、低温をもたらす季節風の直撃を表わ



している。これを望むのには寂靜山、豪円山、金門、元谷等から最適である。

向かつて右にそびえるのは別山、その右の切れ込みが別山沢、左に切れ込んでいるのが弥山沢で頂上弥山につづく。中央に二本並んで右が滝沢、左が中ノ沢で縦走路の険、らくだの背にいたる。その左横大ガレの右先端が小屏風、その左に黒くそびえているのが大屏風、その左側に絶えず水が流れている岩壁が天狗沢、その左が元谷沢、そして遭難の多い泥壁上宝珠ごえから砂滑りをして降る上宝珠沢とつづく。これらの取り付きには盛夏もなお雪渓が残っている。

融雪期や早霜期には、壁の各所で岩石が崩壊し百雷とどろく音がする。

三鉢峰

（大山の頂参照）

大山の主峰東端の天狗ヶ峰から、北東にはりだした尾根筋の末端をなすピークで、大山寺部落から眺めると、北壁の左方に独立峰のように三角錐の形をしてそびえている。しかもその山肌は灰白色の岩肌を露呈して、大山山群中에서도最もエキゾチックな感じをもつ。標高一、五〇〇

メートル、新期火山の一つである。頂上からは北壁の豪壮なアルプス型山容を一望のうちにおさめることができるが、この附近から天狗ヶ峰にいたる鞍部一帯には、ナンゴククガイソウ・オオバギボウシ・シモツケソウなどをはじめ高山性植物の一大群落がある。盛夏の七月ごろには、この辺り一帯から野田ヶ山側にかけて千紫万紅のお花畑が現れる。この周辺はユートピアと名付けられ、ここにある県営避難小屋はユートピア小屋と呼んでいる。西側の岩骨の崩壊した様相に反して、東西は平凡な草のはえた山肌である。

主稜の東端天狗ヶ峰から尾根は二つにわかれ、一つは前方に向かって槍ヶ峰から烏ヶ山に走り、一つはユートピアの鞍部に落ちて三鉢峰に連なっているが、その槍尾根の真下に沿っていわゆる東壁のしたを流れる谷がこの地獄谷である。加勢蛇川の源流となつて下流に大山滝を控えている。普通ここからはいるためには、大山寺部落から横手道を廻って文殊堂から林間を登り鳥越峠を向こう側

地獄谷

（大山の頂参照）

メートル、新期火山の一つである。頂上からは北壁の豪壮なアルプス型山容を一望のうちにおさめることができるが、この附近から天狗ヶ峰にいたる鞍部一帯には、ナンゴククガイソウ・オオバギボウシ・シモツケソウなどをはじめ高山性植物の一大群落がある。盛夏の七月ごろには、この辺り一帯から野田ヶ山側にかけて千紫万紅のお花畑が現れる。この周辺はユートピアと名付けられ、ここにある県営避難小屋はユートピア小屋と呼んでいる。西側の岩骨の崩壊した様相に反して、東西は平凡な草のはえた山肌である。

にくだれば「駒鳥」の地点に出る。

烏ヶ山（大山の項参照）

大山連峰の一つで、標高一、三八六メートル。主峰から東南に派出した唯一の山峰である。西方から望むと岩稜がそり立って奇型を呈し、ほかの山群とは異なった印象をうける。

トロイデ型火山群の一つで第一期噴火後にできたカルデラ（陥没凹地）を埋めて、新しく噴出した寄生円頂丘（トロイデ）である。黒雲母角閃石

安山岩や両輝石安山岩などの溶岩からなる。主峰の弥山や、三鉢峰などはその後噴出した円頂丘である。

頂上は狭隘であるが、ここから眺める主稜の南壁はすばらしいもので、鏡ヶ成・上・中・下の三赫山、日野郡方面の眺望も大山随一といえる。

赤松の池

西伯郡大山町赤松
JR米子駅より車で二十五分

火山によつて出来た大山には、自然の池が少なく、大山寺中心にある有名な池は昔から「大山七池」といって大切にされていた。山頂にあ

伝説

昔、松江（雲州）に松平頼母という千五百石取りの武士があつた。不足のない生活であつたが、子供がないので大山さんに祈願したところ女子が生まれ、やがて評判の美人に成長した。

やがて十六の春を迎えた頃、藩主の目にとまった。聞き入れれば贈石、ことわれれば追放と言われ、まず大山に参つた。

途中、赤松の池の立寄つたところ、娘は蛇神になり乳母に告げた。

「両親の念願のあまり、人の世に姿を現したが、今、女龍身として務めねばならなくなりました。毎年今月今日きつと家に帰るから、たらいにすぎ水を汲んで出してください。私の姿が見えなくても、その水が濁るのはわたしの来た証拠です。また、私に願いをする人は、供養に山椒の実を池に散じて祈れば、長く幸福を与えます」といって池に入った。

この日を祭日としている。

る地蔵ヶ池を始めとして硯ヶ池・大野池・赤松の池・かんまん池・釜ヶ池である。この中で一番大きく、古期大山と新期大山との境に水を湛えているのが赤松の池である。

赤松の池は、大山参拝の要所であり、農用の水源としていかなる旱魃にもいまだかつて干上がったことのない池で、雨乞いの龍神がおわすとして、今もなお厚い信仰を集めている。その赤松池大明神の祭礼は、旧暦六月一八日に行われている。

『大山寺縁起』には、伯耆国守護職・葦名次郎左衛門という、神仏をばからず、殺生を続ける荒武者が、赤松の池の鳥や魚はもとより、大蛇まで切り殺したところ、大山の三社権現の玉輿が空中に現れ、葦名は目がくらんで落馬して気を失つた。家で病臥していると、西方から龍に乗ってやって来た僧が錫杖を振りかか

けて家に入ったとたん、気を失い狂つた。そこで大山と三徳山の修験者を招いて加持祈祷したところ、「罪を犯した者を戒めねばならぬ者が、罪もなく大権現を崇めている者を殺すとはけしからぬことだ。」と験者が言つたので、葦名一門は大山に帰依し、殺生禁断の札を立て、精進潔

斉し、善行を努めてようやく恢復したという。今でも、魚を取れば腹痛し、池を干そうとする者には、火車や一身に祟りがあると伝えられる。また、大野池とは底が通じていると伝えられている。

龍神お初の伝説もあり（伝説参照）、池の向こう岸、半島の祠に御神体として龍神お初の姿が木彫りにして安置してある。『伯耆民談記』には、同じような話があり、赤松の娘が大山の会式に参加したところ、大山寺の稚児僧を見初め、ついに悶々の情に耐えかねて赤松の池に身を投げた。蛇神となつてかの稚児僧の所へ行き、恋しさのあまり彼も池の中に引き入れて沈んでしまったという話もある。

榎水高原

JR伯耆溝口駅より車で二〇分

伯備線溝口駅に下車して正面登山道を登ると、途中金屋谷の部落をへて、道は正面に秀麗な富士山形の大山の偉容を望みながら広大な原野に出でくる。この雄大な裾野原一帯が榎水高原である。面積三四五ヘクタール。ここは大山の展望地としても最も優れた場所の一つで、前面にシ

ンメトリカルな山稜の全容を見せ、頂上から一気に流れ出た斜面は、雄大である。

西方を望むと、島根半島、弓ヶ浜半島、中海、宍道湖を一望のうちにおさめることができる。夏はキャンプ、冬はスキーに適する。

大山高原ライン

大山高原ラインの愛称は公募の結果、昭和三十八年（一九六三）一月十七日に決定された。延長約六三キロメートル、六つの町にまたがり、大山隠岐国立公園を取り巻く鉢巻道路となっている。

東伯郡赤碓町から西伯郡中山町羽田井を経て香取牧場を通り、川床橋を渡って大山寺部落に行く道路が完成した。香取牧場近くの峠道から、大山山麓の大高原をはじめ島根半島、日本海を眼下に望む景観は、一大パノラマである。さらに進むと深い川床溪流に出る。大山寺部落より榎水高原を通り、横手道を大平原に出て江府町御机に入る。この道では裏大山の男性的な壮観が満喫できる。

蒜山・大山スカイライン

蒜山大山スカイラインは江府町御机から岡山県川上村上村上福田へ通じている。歴史を秘めた大山寺、榎水高原、二ノ沢、鍵掛峠、御机に至る道は雄大な山岳美、平原美、渓谷美、自然林美など、大きな感興をそそる地帯である。御机から鏡ヶ成に至る道は大原野を紆余曲折して鬼女台へと登る。鬼面台に立つて岡山県側に目をやると左手に美しい蒜山三座が悠然とならんでいる。

西側には裏大山の男性的な景観が広がる。その東に奇怪な山容の烏ヶ山（一、三八七メートル）、さらに東には一転して穏やかな擬宝珠山が続く。

これらのすそに広がる鏡ヶ成には、心の安らぎを覚える。鬼面台から道を東に走ると、蒜山国民休暇村に通じ、さらに川上村を縦走し、犬狹峠を経て関金温泉に行くこともできる。

鏡ヶ成

JR江尾駅よりバス四十五分 休暇村大山鏡ヶ成下車すぐ

奇峰烏ヶ山の東南、麓に広がる

標高九〇〇メートルから九五〇メートルに位置する、茫漠としたススキの大原野であった。成と呼ばれるこの原野は烏が山の火山活動にともない噴出した火砕流が流れ下り、もとの裾野にできていた谷々を埋めて平坦な高原状地形を形成したものである。西部に城山の奇観を連ね正面北部に烏ヶ山のピークを仰ぎ、東部に擬宝珠山のなだらかな山容を廃し、さらに蒜山連峰を望む景観は高原として絶景である。

昭和三十一年（一九五六）六月、この鏡ヶ成は約四八ヘクタールが厚生省（現厚生労働省）から大山国立公園集団施設地区として指定された。昭和三十七年（一九六二）十二月十日付には集団施設地区を含む一二九・七ヘクタールがその名称も鏡ヶ成国民休暇村と変更された。

なお、国民休暇村というのは厚生省と国民休暇村協会がタイアップして広く国民の保健休養の場を提供するため、昭和三十六年度から全国のおもな景勝地に各種施設の建設に着手したものである。

大野池

西伯郡大山町

大山の麓、アカマツの林の中に静寂な雰囲気包まれた湖面が広がる。四季折々、ボートや釣り、散策に人々が訪れる。大山を望む湖畔には瀟洒なホテルも建っている。

米子市から大山寺につづく大山道路から一本東側、あけまの森や植原駐車場の向こうに、大山寺から坊領を経て大山町役場さらに国道九号へ直接に通じる道路がある。クロマツの老木が並ぶ参道の一つである。大野池はあけまの森の近くに位置し、この脇道をたどると湖畔に達す



る。

標高四三五メートルの位置にあり、約二百年前に溜池として作られたと伝えられる。堤高五〇メートル、堤長八〇メートル、貯水量十八万立方メートルで、地元の種原から飯戸一帯の農地三〇ヘクタールを潤している。また、飯戸川の水源地でもあり、住民やホテルを含めて生活廃水の流入を防ぎ水質保全に努めている。

蒜山

鳥取県と岡山県の県境をなす稜線を形成する山で、東から西へ下蒜山（一、一〇〇メートル）、中蒜山（一、一三二メートル）、上蒜山（一、一九九メートル）の三つのピークからなり、蒜山三座と呼ばれる。

いずれも、黒雲母、角閃石、斜方輝石をもつデイサイトの溶岩からなる第四紀更新世の火山である。このうち下蒜山が最も古く約八十一〜九十万年前、中蒜山と上蒜山はとも約五十万年前に形成されたといわれている。約百万年前から活動を始めた東隣の大山とはほぼ同じ時代になるが、蒜山の方が活動を早く停止した。上蒜山の西にある二股山（一、〇八

〇メートル）と擬宝珠山（一一〇メートル）も独立の火山と考えられ、蒜山三座とあわせて蒜山火山群と呼ばれている。

鳥取県側の北斜面は急峻で、小鴨川支流の清水川、福原川、小泉川、泉谷川などが深く浸食し、谷頭は稜線近くまでせまっている。これに対して、岡山県側の南山麓は比較的穏やかで、裾野は標高五〇〇メートルほどの蒜山高原に緩やかに移行している。また、北斜面にはブナ林が発達するが、稜線から岡山県側はササを主とする草原である。上蒜山北東の鞍部、標高六六〇メートルの分水界の岡山県側に蛇ヶ川湿原がある。約〇・七ヘクタールほどの小面積であるが、ミスゴケ類やイワシヨウブなどが生育し、浮島や池塘が散在して良好な湿地環境が残されている。蒜山三座の稜線は、大山隠岐国立公園に含まれる。

米子市

〔米子市街地〕

史跡 清洞寺跡

米子市
JR米子駅より徒歩二〇分

湊山公園の北岸に、老松巨岩の群がっている所があり、公園内の景勝地となっている。ここは慶長十五年（一六一〇）、伯耆・会見・汗入郡六万石に封ぜられて米子にきた加藤貞泰が、朝鮮の役で戦死した父光泰の菩提を弔うため曹溪院を建て、その後、境内に五輪塔を建てたところである。

また、池田由之（池田光政時代の米子城の城代）の子、由成が父のために建てた海禅寺があった。しかし、これらの寺は、元禄時代の激浪により壊され、それぞれ移転あるいは廃寺となった。

後に、大亀山清洞寺が建ち、この海岸を「清洞寺灘」ともいうようになった。しかし、明治の廃仏毀釈で建物は壊された。

昭和五十二年（一九七七）、米子市の史跡に指定されている。

現在、ここには光泰の五輪塔と

もに池田由之夫妻の五輪が並ぶのみである。中央が池田由之の塔で、向って左が由之の妻の塔である。また公園の入口には、米子城築城のとき、海岸線に植えたと伝えられる、クロマツの巨木群があり、これは当時の防潮林の名残である。

湊山公園

米子市西町、内町、久米町
JR米子駅より徒歩二〇分

中海に面して設置された公園。

明治四十年（一九〇七）、当時皇太子だった大正天皇の訪問を記念して造られ錦公園と呼ばれた。園内には、山陰随一の名城と言われた米子城跡をはじめ日本庭園、清洞寺跡、汐止め松、児童文化センターなどがあり、市民の憩いの場となっている。

米子市街地や大山、島根半島が一望できる。桜の名所としても知られ、春は多くの人でにぎわう。

米子港

（米子市瀬町）

市街地から米子城跡のある湊山（標高九〇メートル）を巻くように通ると、米子港に出会う。

また、旧加茂川筋を伝統建築の町並みに誘われて下ると、中海に注ぐ

河口に港がある。日本海から来るには、美保関灯台を右にみて、境水道を抜け、中海に入り中浦水門を通ると米子港が見える。波静かな中海を望み、水鳥の姿も多く、夕日が美しい。

弓ヶ浜半島の付け根にあつて、昔は風の影響が少ない良港として、また米子城下に近接した外港として重視されてきた。江戸時代には、港で浮船に積み替えて、問屋が立ち並ぶ加茂川をさかのぼり、米子城下に物資を運んだ。川口番所という藩の役所が設置され、入港する船舶を監視した。今の灘町の位置には「魚鳥座」と呼ぶ魚市場があり、港では日野川奥の鉄や弓ヶ浜の産物である綿製品の取引で境港と競った。しかし、明治後期になって鉄道が境港に通じ、米子港の役割は小さくなる。

防波堤の設置は明治期から始まり岸壁の整備が進んだ。昭和二十七年（一九五二）に地方港に指定され、昭和四十八年（一九七三）から昭和五十六年にかけて、北側の旗ヶ崎地区で四〇ヘクタールが埋め立てられ工場団地が形成された。

漁業では、中海あるいは日本海沿岸での刺し網漁とイカ釣り漁や他に

イワガキなどの採貝が中心に行われている。

米子港は、米子水鳥公園に続くウォーターフロントとして貴重な存在である。旧加茂川筋と結び、自然環境の復元や町並み整備が進めば、西部のすばらしい観光ポイントになると期待される。

米子市立 山陰歴史館

米子市中町
JR米子駅よりバス五分、市役
所前下車

米子町は町役場を昭和元年に焼失したが、昭和二年（一九二七）に市制を施行し、これを機に人口十万人を想定する市庁舎を建設することになった。新庁舎の設計は、第一人者の佐藤功一に任せられた。工事は大阪の鴻池組が請け負い、先本喜一郎、栗林利吉など地元業者も参画した。当時としては山陰随一の鉄筋コンクリート造三階建の新庁舎が誕生した。

この建物の特徴は、正面ファサードがシンメトリー（左右対称）の古典主義的な建築スタイルである。正面玄関を中央に据え、その上部に塔屋を立ち上げる中心性を強調した容姿は、佐藤が手がけた群馬県庁舎など一連の庁舎建築に一貫して用いら

れたデザイン手法である。

外観は一階を人造石でポディウム（基壇）風にして、上部にはレンガ風の硬質タイルを張った壁面に均整のとれたピラスタ（付け柱）を表わし、どっしりした構えになっている。佐藤は庁舎を設計するにあたって「新古典主義」を基調にデザインしながら「現代の建築を過去と未来の線上に置いていながら、できるだけ流転しない建築様式」を求め続けたという。次世紀をにらんでつくられた建物であった。

八十年近くを経た現在、この建物は山陰歴史館として使用され、その機能も変わってきたが、赤褐色のタイルや古典的な半円アーチを備えた



建物自体が米子市発展の歴史をみごとに表現し、今や、米子市のシンボリック存在になっている。夜になるとライトアップされ、建物のシルエットが夜空に浮き上がり、道行く人にロマンチックな風情を与えている。

米子市は昭和五十二年（一九七七）に市制五十周年を記念してこの建物を文化財に指定した。また、平成十年（一九九八）には「全国公共建築一〇〇選」にも選定されている。館内には、米子城の歴史や、明治から昭和にかけての生活用品や民俗資料、原始・古代時代の土器・石器など、約千点が展示されている。

開館時間 午前九時三〇分～午後六時
（入館は午後五時三〇分まで）

休館日 火曜日、祝日の翌日、年末年始
問合せ先 ☎0859・22・7161

米子れいる ろおど館

米子市法勝寺町
JR米子駅から十二分

山陰線（現山陰本線）の開通など、鉄道の歴史を紹介した資料が展示されているほか、山陰最大規模の総延長二〇〇メートルの鉄道ジオラマがある。

開館時間 午前一〇時～午後六時

休館日 水・木曜日 祝日は営業

問合せ先 ☎0859・37・6373

米子市美術館

米子市中町
J R米子駅よりバス五分
市役所前下車

美術館建設を求める市民の声に
え、昭和五十八年（一九八三）六月
に山陰地方初の公立美術館として開
館した。

一、五〇〇点を越える収蔵品には、
前田寛治、濱田台兒、辻智堂、橋本
興家、植田正治、塩谷定好など郷土
ゆかりの芸術家の作品をはじめ内外
の版画や、日本を代表する著名な写
真家などの作品が含まれる。

年一、二回開催される特別展のほ
か収蔵品を紹介する常設展のほか、
美術講演会やワークショップなどの
普及事業が行われている。

開館時間 午前一〇時～午後六時

休館日 水曜日、祝日の翌日、年末年始

問合せ先 ☎0859・34・2424

素鳳館

米子市加茂町一丁目
J R米子駅よりバス五分 市役所前
下車すぐ

この建物は米子税務署として建て
られた。明治二十九年（一八九六）
設置の米子税務署は西町の義方校向
い側の借家を充てていたが、同四十
三年（一九一〇）三月、加茂町一丁

目に新築移転した。前年新築の米子
郵便局とともに、米子最初の木造洋
館建築として人々の話題となった。
米子市内に現存する木造洋風建築中
では最も古い。

古写真を見ると、当初は正面（南
側）両翼をわずかに前面に突出させ
るコ字型の平面を持ち、下見板張り
の比較的小規模な木造洋風建築であ
ったが、地方の行政庁舎としての風
格を十分に備えていた。特に正面中
央部には、ジャイアントオーダーの
付柱があり、ベジメント式とまぐさ
式の窓枠縁が上下を飾るなど凝った
造りであった。現在残るのはコ字型
平面の正面東翼廊部分のみで、他は
すべて昭和三十八年（一九六三）の
改造である。

現在の外観を特徴づける、西面の
切妻破風部分も改造であつて、この
とき南側にも付属屋を増築した。構
造は木造二階建てで壁は下見板張り。
板の張り方は水平方向と斜め方向の
二種類を併用する。新・旧部分とも
よく似たデザインの上げ下げ窓を上
下層につけ、一体感がある。南面の
当初翼廊部分は、楕形ベジメントを
上部に持つ三尊式窓、メダル型装飾、
軒上の五角形の額などが外観を飾

り、旧態を残す。

大きな改造は受けてはいるが、増
築部分も含めて町並みに溶け込み、
市民に愛される存在となっている。

昭和三十五年（一九六〇）頃、税務
署移転に伴い、所有者が変更となり、
昭和三十八年には前面の国道九号拡
幅工事のため大改造された。その後、
オーナーの私設美術館「素鳳館」と
なり、江戸時代の雛人形が数多く収
蔵されている。

なお、平成十二年（二〇〇〇）十
月に発生した鳥取県西部地震で被害
を受け、現在閉じたままになっている。

後藤家住宅

米子市内町
J R米子駅よりバス五分 市役
所前下車、徒歩一〇分

後藤家は、戦国時代末期に石州か
ら移住し、この地に屋敷を構えたと
伝えられている古い家柄である。江
戸時代には鳥取藩の米や鉄などの回
漕について特権を与えられ、廻船問
屋を営む米子屈指の商人であった。
屋敷は米子港に注ぐ加茂川河口に近
い京橋のたもと、立町から米子城に
通じる内町の角地にある。現存する
主屋はもろちん、背後の一番蔵・二
番蔵も寛政期以前の遺構であり、そ

の普請は十八世紀中期以前にさかの
ぼると思われる。しかし、先年の解
体修理では、主屋は奥座敷や玄関廻
りが増設された十八世紀後半の状態
に復元された。

主屋は間口十二間、奥行九間と大
きく、右側の通り土間とミセ部分か
らなる「表構え」、裏側に続く住居
部分の「勝手構え」、左表側の玄
関・式台と奥の庭に面する客座敷な
どからなる「座敷構え」の三つの部
分に分けられる。土間境の板の間と
その上手にならぶ部屋とは二〇セン
チばかりの段差があり、「座敷構え」
「表構え」と「勝手構え」は空間的
にも異質である。京都・大坂（阪）
の「表屋造」にも似ている。

主屋の外観は、道路に面した表側
には格子が並び、つし二階に開かれ
た低いむしこ窓があり、表側の屋根
はこの地方では珍しい本瓦葺となっ
ている。庇は表側だけでなく、加茂
川に面する妻壁にも付いているが、
妻側の庇は加茂川を利用する物資の
搬入のために設けられたものであ
る。京橋のたもとからのぞむ後藤家
住宅のたたずまいは、加茂川沿いの
歴史的景観の中でも異彩をはなつ存
在である。

昭和四十九年（一九七四）二月、国の重要文化財に指定された。（平成五年八月十七日追加指定、平成八年七月九日追加指定）

加茂川土蔵群

米子市瀬町・尾高町
JR米子駅よりバス五分、
市役所前下車

「山陰の大阪」ともいわれる商都米子が、近世城下町として整備されたのは慶長六年（一六〇一）に入封した中村一忠の代といわれる。内海を背にした湊山に大小二基の天守閣を擁した米子城が築かれ、外濠の内側に武家屋敷、外側に町人町が配置された。島根県との県境にある鷺頭山を源流とする加茂川は米子市の南



部の田園地帯を流れて市街地に入り、この地で旧米子城外濠と合流し、中海に注ぐ。江戸時代は水量も豊かで、米子港を拠点とする水運も盛んで、港に近い灘町、立町や内町には、鹿島家、後藤家をはじめとする米問屋、廻船問屋などの豪商の屋敷が構えられ、繁栄した。

加茂川は、昭和戦前までは積み荷を運ぶはしけが上流の鞆町あたりまで往来する姿も見られた。川べりは町屋の裏にあたり、石垣は家ごとにその積み方も異なり、所によつては石に彫り物も見られる。石垣の間には設けられた石段は往時の積み荷場の名残で、この石段を利用して家庭では洗い物もされていた。加茂川は日常生活にあつても多いに活用されていたのである。

今では、水を生活用水に利用されることはなくなつたが、石垣の上に土蔵が立ち並び、水辺と石垣と白い土蔵が交錯する風景は独特である。

また、夏には加茂川祭が、秋には岩倉町を中心にしてうじき村祭が行われる。灘町、立町、岩倉町の外濠沿いには、商家の古い土蔵や離れ座敷が点在し、情緒ある風景を今も伝えており、米子市における歴史的な

景観形成地域として位置付けられる。

米子盆踊り

米子市富士見町

毎年八月十四日、に米子市公会堂（同市角盤町）前広場で踊られる。

起源として、「母思いの木蓮尊者は、地獄に落ちた母を極楽に住みかえさせる願いが叶い、喜んで連日連夜踊り続けた」という独特の盂蘭盆経の異型話を伝える。

踊りは輪踊りで、「こだいぢ踊」「さいご踊り」「たいしょう踊り」の種類がある。豪快な太鼓を打つのが特徴である。県の無形民俗文化財に指定されている。

米子市公会堂

米子市角盤町
JR米子駅よりバス八分、
公会堂前下車すく

昭和三十三年（一九五八）、市制三十周年の記念として建設されたものである。

敷地は、将来の米子の中心的存在となるべく国道九号と国道一八一号が分岐する一角に決められた。当時は、この一角が米子市の中心と位置付けられており、都市改造によって街路を整備し、周辺をオフィス街にし、公会堂を市民のオアシスにする

構想だった。

その建設資金は、「一世帯が毎日一円を貯えて公会堂を」との運動から始まった。この運動は全市的な盛り上がりをもたせ、総建設費一億七千五百万円のうち三千万円余りは募金で賄われた。

設計は当時の日本建築界の重鎮村野藤吾である。村野は昭和三十二年（一九五七）にアメリカ大陸を旅するが、それは米子公会堂の最終イメージを固める旅でもあったようである。ブラジルの教会にピアノのイメージを重ね合わせて今の公会堂の形ができ上がったと言われている。

前庭には芝生を敷きつめて市民広場とし、一角には噴水の池を穿ち、平和の泉と命名された。池の中には郷土出身の彫刻家・辻晉堂が制作したブロンズ像が置かれた。

市民の憩いの場であり、平成十年（一九九八）には「日本の公共建築一〇〇選」に選定され、シンボリックな存在は不動のものとなった。

近年、米子駅周辺には米子市文化ホール、ビッグシップが造られ、文化施設が充足されてきたが米子市公会堂が記念碑的な建造物であることに変わりはない。今後もこの記念碑

的施設に対して米子市民が変わらぬ愛着を注ぐであろう。より一層の充実した活用が期待される。

加茂神社天満宮

米子市加茂町
JR米子駅より徒歩
十五分

賀茂神社天満宮は、別雷命や品陀和気命、菅原道真公などを祭神とし、旧米子町の産土神として崇められていた。かつては、米子を「加茂の里」といい、この神社のある町の名を加茂(町)といった。神社の勧請は慶長三年(一五九八)と伝えられる。また、境内の井戸水は、「宮水」といわれ名水として知られていた。

昔、子を授けたい老人が宮水を頂き神社に祈ったところ、八十八歳にして子を得たので、加茂の里を米子というようになったという伝説もある。神社西隣の八幡宮は、中村氏が米子城御門下の八幡丸に、城の鎮守として勧請したと伝えられている。軍陣八幡宮とも呼ばれた。延宝八年(一六八〇)賀茂神社へ移され、明治元年(一八六八)に賀茂神社に合祀された。

昭和三十七年(一九六二)、かつて天神町にあった天満宮(合祀され

稲荷神社)も賀茂神社に合祀し、現社名となった。

『米府神社由来記』によると、近世の天満宮の祭礼は六月二十五日に行われた。前夜には町中の寺子屋の献灯や幟が境内を埋め、当日は町中を神輿が巡幸した後、深浦から錦海に出て船渡御が夜半まで行われた。町民は御輿を守ってそれぞれに舟に海に浮かべ歌舞や酒宴を楽しみ、その間を商い舟が行き来したという。このにぎやかな祭礼の夜は、「天満の涼み」といわれた。

勝田神社

米子市勝田町
JR米子駅よりバス二〇分、勝田神社前下車すぐ

米子地方の氏神として、維新後の改正には郷社になっていた。伝説に応仁の乱後、浜の目(弓ヶ浜地方)に賊徒の一団があつて近隣を荒したので、住民たちが津和野(鳥根県)から勝田上総介一党を迎えてこれを討伐したが、この戦いで郎党浜田五郎丸のほかは上総介以下おもだった家士を失ったので、五郎丸はこの地に主従を葬り、勝田明神として祀った。のちにこれが勝田神社となつて、慶長年間(一五九六〜一六一五)には米子に移され、今日に至つたとい

う。しかし、神社の由緒書はこれを否定し、祭神は正哉吾勝速日天忍穂耳命で、昔、外江に鎮座していたがのち新屋村に移され、その後、元勝田山から現在の地に移されたという。加茂神社天満宮などとともに米子市における最も古い神社の一つであるが、現社殿は最近の造営になるものである。祭日は四月・十月のいずれも十五日で、古くからの氏子である弓ヶ浜方面をはじめ、遠近からの参詣者でにぎわつた。

生田春月

生田春月は、大正後期から昭和初期にかけて活躍した詩人である。

明治二十五年(一八九二)、米子の道笑町に生まれた。本名は清平。家業の酒造業が破産したため高等小学校を二年で中退し、家計を助ける苦しい生活の中で、文学に心を寄せていった。

明治四十一年(一九〇八)、十七歳で上京し、日野町出身の評論家・生田長江宅に寄宿した。ここで佐藤春夫と知り合う。

二十六歳で出版した第一詩集『靈魂の秋』、翌年の第二詩集『感傷の

春』で詩人としての地位を固めた。その後、数十冊の詩集や訳詩集、感想集を出版している。唯一の長篇小説『相寄る魂』は米子地方を舞台とした自伝的色彩の濃い小説である。昭和五年(一九三〇)、瀬戸内海を航行中の客船から身を投げ自死した。三十九歳であつた。

昭和四十年(一九六五)、米子市の皆生海浜公園に文学碑が建てられた。碑文には『相寄る魂』冒頭の詩が、春月直筆の色紙から写し取られている。

「生きとし生ける人の胸に
限りも知らぬ寂しさが
雲のごとくに湧くときは
離れ離れし 人も相寄る」

また母校である米子市東町の明道小学校前に昭和四十年に建立された碑にも、『相寄る魂』の一節が彫られている。

父の生地である西伯郡淀江町には、昭和四十九年(一九七四)、中央公民館前に詩碑が建立された。「恋しなつかしわがふるさととは海のほとりの田舎町
その町なみの柳でさへも
昔ながらのなつかしさ」

米子市水道記念館

米子市車尾
JR米子駅よりバス10分 国
立病院前下車、徒歩10分

米子に上水道が通ったのは鳥取市に遅れること十一年、市制施行を翌年に控える大正十五年（一九二六）であった。現在、水道記念館になっているポンプ場は大正十五年に建てられたもので、消火用水にもできるように、五十五馬力のタービンポンプが二基据え付けられた。建物は約百五十平方メートルの鉄筋コンクリート造平屋建で、五基のポンプを並べるだけの広さがあつた。屋根は赤瓦、外観は白壁、一部に半円アーチの窓を設け、ロマネスク風のモダンな建物で、新生米子（市）への期待がにじみ出ている。敷地の一角には水道事業の大成を記念する高さ四メートル程の碑が建つ。

現在水道記念館として市民に公開されている。
平成十三年（二〇〇一）八月、国の登録文化財として登録された。

名勝 深田氏庭園

米子市車尾
米子駅よりバス十四分
国立病院前下車、徒歩
十五分

深田氏は、中世に米子に来て沼沢地を開拓したと伝えられる。その後、居を構え、深田姓を称し現在に至っている。

庭園は、南西隅に築山を設け、ここ以後醍醐天皇を祀る小社がある。その前に三尊石組の巨石の立石が庭園の焦点で、枯滝を表現し池泉中に右手より鶴島・亀島を配し、さらに北東隅に集団石組がある。植栽も二十数種類に達する。石組の主要材料は島根半島の美保関と大根島から運ばれたと伝えられている。

作庭時期は、庭園の地割りが鎌倉あるいは吉野時代の特徴を示している。庭園の立石手法が南禅寺と同じく三尊組である。元弘二年四月頃、隠岐に配流となる経路で後醍醐天皇がこの深田家屋を訪れている。などの理由から、山陰地方に現存する庭園のなかで最古のものと考えられ、昭和二十八年（一九五三）

には県の名勝に指定されていた。そのうち平成十年（一九九八）の調査によつて「現在見る庭園は江戸時代に構築されたものと考えるのが自然であり、治水に貢献した十八代以降のことでであると考察される」と新たな見解が発表されており、現在、作庭年代については再考が求められている。

ともあれ、中世文化に大きな位置をしめる蓬莱思想からくる鶴亀が、この庭には極めて写實的に表現されている。庭園からは、深田家の繁栄のみならず、歴史の一端をうかがい知ることができる。

平成十二年（二〇〇〇）十二月、国の名勝に指定された。

慈眼庵

米子市車尾観音寺
JR米子駅よりバス10分 終点下車すぐ

観音院にある小庵である。ほぼ室町時代の作と推定される木彫漆箔（漆のうえに金がぬつてあるもの）の十一面観音坐像は、昭和二十八年（一九五三）八月、県の保護文化財に指定された。ただし、台座と頭上の化仏はのちに補つたものと考えられる。伝来の事情はよくわかっていない。

了春寺

米子市博勢町
JR博勢町駅より徒歩一分

江戸時代には荒尾氏の菩提寺として栄えていた。黄檗宗に属し、祥光院荒尾成直と了春院荒尾成重の法号をとつて祥光山了春寺といった。

もとの境内である勝田山麓には、荒尾家の墓があり、荒尾家歴代の城主の墓が並ぶ。鳥取藩の首席家老であつた荒尾家は、ほとんど鳥取の邸に居て藩政を司つていたが、米子城代として城を預り、死後は米子に帰葬された。

村川与一右衛門

村川家は鳥取藩の家老・荒尾の重臣で、代々与一右衛門を通称とした。九代目村川与一右衛門は、嘉永元年（一八四八）正月に家職を継ぎ、荒尾を助け藍座、蠟座、木綿座等を盛んにし、新たにニンジンの耕作を始め、大いに理材に努めた。勤王の志が厚く、諸国の志士との交友も広く、大和五条の天誅組が破れたときは、その一人三枝真洞がここに逃れ、身を寄せたこともある。与一右衛門も米子で討幕の拳兵を企て、当時、日

野郡黒坂に幽閉されていた因幡二十士と図り、長州と計画を進め、土佐の中岡慎太郎も加わって密議した。

拳兵の地として大山を選び、慶応三年（一八六七）には着々と計画を進行していた。しかし、露見し一族は、主家並びに鳥取藩に禍がおよぶことを恐れ、自殺させようとしたが、与一右衛門は聞き入れなかった。

慶応三年（一八六七）十月十一日に親族により暗殺された。四十四歳であった。

墓は、了春寺裏の荒尾家の墓地に続き、道に面したところにある。

大谷甚吉

江戸前期に米子で活躍した海運業者の一人として知られる大谷（大屋）甚吉の墓が、米子市愛宕町の総泉寺境内にある。大谷家墓地の奥に、大型の五輪塔が祀られている。

米子城下の灘町に住み、海運業を営んでいた大谷甚吉は、元和三年（一六一七）に、越後（新潟県）からの帰途、強風に吹き流され無人島に漂着した。上陸してみると、そこは海陸の産物が豊かであった。帰国して、米子の村川市兵衛と相談し、

この島への渡海を幕府に願い出て、翌四年に許可された。（その島は朝鮮国のウツリヨウ島であり、当時は無人島であった。）

島には大竹が茂っており、日本では竹島と呼んだ。以後、元禄九年に至るまで約七十八年間、大谷家と村川家は一年交代に渡航し、アワビなど海の幸を持ち帰った。

しかし、年々朝鮮国からの移住者が増加し、幕府の渡海禁止令によって、両家の渡航も中止された。

総泉寺

米子市愛宕町
JR米子駅より徒歩一〇分

総泉寺は、山号を大龍山といい、曹洞宗に属し、本尊は釈迦如来である。

『総泉寺縁起』によると、この寺は今も市内尾高にある観音寺から分かれた寺といわれる。戦国末期、荒廃した作州青蓮寺から諸仏が観音寺に移されていた。

慶長年間（一五九六～一六一五）青蓮寺・八代棟室賢梁が、この諸仏を米子城下に移し青蓮寺の再興を図っていたところ、両親供養のため寺を作るうとしていた中村氏に寺域を提供され僧として迎えられた。中村氏の父の法名から山号を、母の法名

から寺号をとって、大龍山総泉寺を開いた。中村氏は寺領として百石を寄進している。

近世には能登総持寺の直属の末寺として威勢があった。元禄九年（一六九六）には西伯耆三郡（汗入・会見・日野）の曹洞宗寺院を管轄する僧録所となった。現在も末寺二十か寺を持つ曹洞宗の大寺である。

寺の裏山には西国三十三か所観音を巡る小型巡拝路があり、墓域には米子組士の山内氏、因幡二十士の清水千万人、現ウツリヨウ島へ渡り海産業で財を成した大谷甚吉、小説家村雨退二郎などが眠る。

感応寺

米子市祇園町
JR米子駅より徒歩十五分

日蓮宗身延山久遠寺の直末寺で、日本三感応寺の一つとして知られている。

米子城主・中村一忠の菩提寺で、一忠と殉死した小姓・垂井勘解由延正、服部若狭邦友の彩色による木像三体と墓所がある。

中村一忠は、慶長六年（一六〇一）十二才で駿河（静岡県）から入国して十七万五千国の領主となった。はじめは尾高城にいたが、慶長七年

（一六〇二）に米子城を完成してこれに移った。老臣・横田内膳村詮は後見として内政に尽くしたが、一忠は内膳を専横であるとして、慶長八年（一六〇三）二月十四日、賀儀の日に暗殺した。一忠は、慶長十四年（一六〇九）に病気で亡くなり、以後、中村家は断絶した。暗殺された横田内膳は当寺の日長上人によって屍をここに葬られたが、その後、内膳の墓は米子市寺町妙興寺に移された。

大神山神社

米子市尾高
JR伯耆大山駅よりバス三〇分
神社前下車

大己貴命、大山祇命、須佐之男命、少彦名命などを祭神とする。本殿、幣殿、拜殿神、楽殿そのほかを備え、昔から有名な神社であった。

『出雲国風土記』によると、大山が古くは「大神岳」といわれているところから、大神山神社は大山を神格化して祀ったものと考えられる。

また、古記録に伯耆国大山神にたびたび神階が贈られており、千年前の『延喜式』に載っている神社が西伯耆ではこの社と宗形神社のみであることから、西伯郡第一の古社であり、大社であったことがわかる。

古くは、日野都丸山、福万原（岸

本町)などに社殿があり、江戸時代に、現在の地に移ったといわれる。境内にある菖蒲園は六月上旬になると、数万本の菖蒲に彩られる。

なお、大山にある旧大智明権現の宮(現大神山神社)は、この神社の奥宮であり、毎年六月上旬の夏山開きの前夜祭には約五千人の人が集まる。山の安泰の祈願の後に行われるタイムツ行列は壮観である。

尾高浅山遺跡

米子市尾高
JR米子駅よりバス約三〇分、米子ハイツ下車すぐ

米子平野を一望できる標高六〇メートルの丘陵にある弥生時代後期の環壕集落と古墳群からなる一大遺跡である。周辺には「尾高城跡」「大神山神社(里宮)」などの史跡をはじめ古代遺跡も数多く分布している。この遺跡は、二つの丘陵尾根に分布するが、北側の尾根では三重の「環壕」によって区画された弥生時代後期の集落遺構、南側の尾根からは「四隅突出型墳丘墓」、南東側に円形墳丘墓、北西尾根上に三基の方形墓が存在する。

環壕は、第一環壕が長軸一〇メートル、短軸五〇メートル、断面逆台形で幅三・五メートル、深さ一・

五メートルある。第二環壕が、長軸一三〇メートル、短軸六〇メートル、断面逆台形で幅二・五メートル、深さ一・八メートル。第三環壕は丘陵西端を半弧状に巡り、断面逆台形で幅二・五メートル、深さ一メートルある。環壕の内側に竪穴住居跡十棟、集石遺構一基、貯蔵穴二基が確認された。これらは、いずれも弥生時代後期前葉〜中葉のものである。西伯耆では、十か所の環壕集落が知られているが、その中でも規模の大きさ、環壕内部の居住の状況、時期などの明確さで注目される。

古墳群は、環壕集落が遺棄された後の五世紀末から六世紀後半に造られたもので、三基の古墳がある。一号墳は帆立貝古墳で、全長三四メートル、高さ五メートルあり、墓石、埴輪が巡らされている。二号墳は円墳で径一〇メートル、三号墳は前方後円墳で、六世紀の築造と考えられる。

史跡 尾高城跡

米子市尾高
JR米子駅よりバス約三〇分、米子ハイツ下車すぐ

米子市と岡山県落合とを結ぶ「米子自動車道」の入口近くにある。城は泉山城とも呼ばれた。標高四〇メートルの段丘上に、二の丸・本丸・

中の丸・天神丸・館跡等々と呼ばれる、空堀と土塁に囲まれた曲輪が連続し、中世の西伯耆の城跡を代表する姿をよく残している。昭和五十二年(一九七七)四月一日、米子市の史跡に指定された。

城の歴史は古く、江戸初期に米子城が完成するまでは、この城が米子地方の行政・交通上の要所として重要な存在であった。戦国以前は山名氏ゆかりの行松氏が居城した。

戦国時代には出雲の尼子氏の城となり、後には毛利氏の家臣・杉原盛重が城を守った。山中鹿之介が捕らわれて一時この城に幽閉されたこともある。戦国時代の古戦場である。

現在の城跡には、米子勤労総合福祉センター米子ハイツがある。アジサイと梅の名所としても知られる。

鷺見三郎

鷺見三郎は偉大なバイオリン奏者であり、日本のバイオリン音楽を世界的レベルに引き上げた指導者でもある。

明治三十五年(一九〇二)、米子市尾高町に生まれた。幼いころ、教会でオルガンや讃美歌に触れ、西洋

音楽に強くひかれていった。

大正十三年(一九二四)、バイオリンで身を立てることを決意し上京、多久寅の指導を受けた。

大正十五年「新交響楽団」(現在のNHK交響楽団)に入団し、第二バイオリンを担当した。昭和十年(一九三五)からは自由学園でバイオリンを指導し始めた。また、昭和二十一年(一九四六)には国立音楽大学に招かれている。

鷺見は早期教育、一对一の個人レッスン、合奏演奏を重視した。鷺見が指導した者のなかから、国際的なコンクールの上位入賞者や、国内外で活躍しているバイオリニストが多く誕生している。

昭和五十九年(一九八四)、八十二歳で死去。米子市長砂町の聖公会墓地に眠っている。

〔福市周辺〕

宗形神社

米子市宗像
JR米子駅よりバス約一〇分、宗像下車徒歩一分

宗形神社は、田心姫命、湍津姫命、市杵島姫命の宗形三女神と経津主命、武甕槌命を祀っている。これらは、古代、九州の宗像あたりから当

地に移住した人々が奉じてきた神々と思われる。『延喜式神名帳』に記載され伯耆五ノ宮ともいわれた。

古くは、現在地より北に位置する宮谷の本宮という所にあつたが、弘治二年（一五五六）に、尼子晴久によつて現在地に移されたと古棟札にある。

尼子氏は三百石、吉川氏は百二十石の社領を寄進したが、中村氏によつて全て没収された。近世になり藩主池田氏によつて再び保護され藩主祈願所に指定された。

小児のカンの虫封じの神社として親しまれた。

また、吉川元春寄進と伝えられる桃形兜一領が所蔵されている。また、近くには宗形神が渡来時に使用した船という舟形石が近年まであった。

安養寺

米子市福市
JR米子駅よりバス二〇分 安養寺
入口下車、徒歩三分

後醍醐天皇皇女・瓊子内親王の廟所としてよく知られる。また、境内はサクラの名所としても名高い。

元弘二年（一一三三二）、後醍醐天皇が隠岐に流されたとき、瓊子内親王は十六歳であつたが、父天皇を慕いともに伯耆に入った。ところが、



隠岐に渡ることが許されず、ここで出家し、名を安養尼と称して隠遁し、二十四歳で世を終えた。このことは『新葉集』に、兄の尊良親王と贈答された歌があることから、伯耆の学者、門脇重綾が考証したが、史実としては不明である。寺宝として、天皇の肖像と内親王の所持したと伝えられる鏡が所蔵されている。

また、当寺に保管されている資料は、平成二年（一九九〇）に米子市の有形文化財に指定されている。

また、寺内には歯の跡が残つていたので「歯形栗」といわれる内親王ゆかりの栗の木がある。

史跡 福市遺跡

米子市福市
JR米子駅よりバス二〇分
安養寺入口下車すぐ

標高二〇〇〜四〇メートルの丘陵地帯に広がる弥生時代後期から古墳時代の集落跡と墳墓群。周辺には青木遺跡をはじめとして、数多くの古代遺跡があり、市内でも有数の遺跡密集地帯である。

この遺跡は、集落跡（吉塚地区）と墳墓群（日焼山地区）が明確に区分し配置されている点で特徴がある。「住居の構造」「集落の変遷」を考える上で重要な遺跡である。

遺構は、遺跡全体で二百四十一基確認されている。「史跡指定地」内では、住居跡九十、土壇墓二十六、古墳一、横穴墓一、柱穴群六、溝二、合計百三十三基ある。遺跡からは、約三万五千点の土師器をはじめ、弥生土器、須恵器、鉄器、石器（たたき石、台石、砥石）、玉類（勾玉、小玉）、ペンダント、碧玉（めのうの原石）、紡錘車、鏡片、獣首、子持勾玉、土製鏡、ミニチュア土器など、当時の生活を物語る遺物が大量に出土している。これらは、史跡公園内の福市考古資料館に展示されている。



本遺跡は昭和四十一年（一九六六）の住宅団地造成を機に発掘調査が行われ、山陰で初めて調査された集落遺跡として、昭和四十五年（一九七〇）に国の史跡に指定された。もともと、「福市遺跡」は、東西五〇〇メートル、南北四〇〇メートルの範囲で確認され、保存された「吉塚」「日焼山」地区を含めて、七つの地区・支群からなつていた。ところが、昭和四十二年（一九六七）ごろから宅地などの開発が盛んになり、遺跡の大部分は破壊され、消滅した。

七地区のうち、「吉塚」「日焼山」二地区が、米子市民による文化財保護運動の成果として「国史跡」の指定を受けた。保存されている面積は、

三九、四一四平方メートルである。現在は「史跡公園」として整備され、またツツジなどの名所として一般市民に開放されている。

福市考古資料館

JR米子駅よりバス
二〇分、安養寺入口下車すく

米子市福市の国道一八一号沿いにある考古資料館。昭和五十五年（一九八〇）に、福市遺跡の史跡公園内に開館した。当初は、徒歩一分の所にある「福市遺跡」や徒歩十分の所にある「青木遺跡」、この二つの国指定史跡の出土品を中心に展示していたが、最近では、米子市内の発掘資料を含めて展示している。また資料館脇には、竪穴住居が復元してある。

開館時間

午前九時三〇分～午後四時三〇分

休館日 火曜日、祝日の翌日、年末年始

問合せ先 ☎0859・26・3784

史跡 青木遺跡

米子市永江
JR米子駅よりバス二〇分、青木団地入口下車

長者原台地の北端部、標高四〇メートル前後のなだらかな丘陵上に広がる縄文時代晩期から平安時代に至る遺跡。発掘調査の時の地名から、この名称で呼ぶ。この地域の住宅団

地造成計画にともない、昭和四十六年（一九七二）から五十二年（一九七七）にかけて事前の発掘調査が行われ、四〇ヘクタールの広大な規模の遺跡の存在が明らかになった。

遺構は、縄文時代から平安時代までの九百九十五基を数えるが、中心的な遺構は、弥生時代中期から奈良時代にかけての住居跡と古墳である。各時代の遺跡の存在する丘陵は、その地形によって十の地区に分けられ、遺構が確認された地区の一部（四ヘクタール）が昭和五十四年（一九七九）に国の史跡に指定された。

この保存地区は五か所からなり（一号～五号地区）「史跡公園」として親しまれている。この公園内には、竪穴住居跡二十二棟、掘立柱建物総数九棟、土掘十基、古墳十九基、周溝墓二基、その他二基の計六十二基などの遺構が保存・整備されている。その中には青木遺跡で最大の「青木一号墳」（全長三三メートル、後円部径一八メートル、後円部高さ三五メートル、前方部幅一六メートル、高さ三メートルの前方後円墳）も含まれる。

この遺跡の北には小谷を隔てて、福市遺跡がある。この二つの遺跡が

ある丘陵は、西方の安養寺辺りから北東に延び、米子市から会見町に及ぶ。この丘陵には点々と土器や住居跡が確認されていて、この丘陵の下には大規模な集落がねむっている。

史跡 目久美遺跡

米子市目久美
JR米子駅より徒歩五分

米子駅の南側にある、縄文時代から弥生時代の低湿地（地下約一メートルから四メートル）の複合遺跡。足尾山付近を中心に東西五〇〇メートル、南北四〇〇メートルの範囲に確認される。

昭和八年（一九三三）、新加茂川の開削工事の折に地元の清水安造によって発見され、翌年、京都大学教授・梅原末治の調査によって、原始農耕を物語る貴重な遺跡として世に知られるようになった。

その後、昭和五十七年（一九八二）、新加茂川の川幅改修工事にもなう大規模な調査で、弥生時代中期の水田跡などの遺構と大量の遺物が発見され、具体的な姿が明らかになった。その後も数次にわたり発掘調査が継続され、全体像が解明されつつある。

縄文時代には、この地は照葉樹の森と湖に囲まれた中海の入り江の奥

に位置し、居住に適していたと考えられる。発掘によって縄文前期（六千年前）から晩期（三千年前）の貯蔵穴や土器、石器、骨角器、獣魚骨が出土している。

弥生時代になると、水辺が退き湿地帯が広がっていたと考えられる。稲作文化（水稲耕作）が「目久美」にも早くから伝えられた。発掘された水田跡は、一枚の区画は小さめだが、水路、入排水路、畦、水口などの施設が整っている。水田には、多数の弥生人の「足跡」が残され、鍬、鋤、田下駄などの農耕具も発見されている。

主な遺物では、弥生各期を通じた土器、土製品、木製農耕具、稲作文化とともに伝わった石器などが確認されている。

この遺跡の内、「美吉橋」付近二二五平方メートルが、昭和五十二年（一九七七）に米子市の史跡に指定された。

「三ヶ浜周辺」

名所 栗嶋神社と社叢

米子市彦名
JR河崎駅より、徒歩二〇分

栗嶋神社は『伯耆国風土記』逸文

に少彦名命が粟の穂にはじかれて常世の国に渡られたので粟嶋と名付けられたと伝えられていて、古くから神の宿る山として信迎された長い歴史と伝承をもつ神社である。古樹老木に覆われた小山全体が境内で、山頂の本殿には『古事記』に登場する少彦名命が祀られている。

社叢になっっているこの山は標高三八メートル、長砂流紋岩の隆起によって形成されたもので、周囲は傾斜三十五度ほどの崖地が多く、全山ほとんど手つかずの自然林となっている。主にスタジイが占め、ヤブツバ

伝説

漁師の集まりで出た料理を誰も気味悪がって食べなかつたが、漁師の娘一人が食べた。それは、食べると寿命が尽きないといわれる人魚の肉で、娘はいつまで経っても十八歳のままだった。

そこで娘は尼となり（八百比丘尼）洞窟にもり何も食べないまますごした。八百歳で息絶えたという洞窟（静の岩屋）が粟嶋にある。

キ、シャシャンボ、タブノキ、クロキ、カクレミノ、コナラ、アオキなどが生育する典型的な照葉樹林である。これほどまとまった森は県下でも数少なく、海浜型のスタジイ林として昭和五十七年（一九八二）四月に県の天然記念物に指定された。特にシャシャンボの生育がよく、トベラ、ツワブキ、モチノキなども多く見られ、昭和五十二年（一九七七）米子市の名勝に指定されている。

米子水鳥公園

米子市彦名新田
JR米子駅からバス十三分、米子水鳥公園入口下車、徒歩一〇分

米子水鳥公園は、コハクチヨウの集団越冬地としては南限の中海に位置し、眼前に大山を望む。彦名干拓地の一部を、野鳥生育地の保護と市民が自然と触れ合う公園として整備し、平成七年（一九九五）十月にオープンした。

約二八ヘクタールの公園では、毎年約百種類、最大一萬羽以上の野鳥が観察されており、西日本屈指の野鳥飛来地となっている。

ネイチャーセンター内の観察ホールでは、四季を通じていろいろな野鳥を観察することができる。そのほかにも、野鳥に関するパネルや標本、

バードカービングなどの展示や映像でコハクチヨウの生活を紹介している。また、ロシアなど海外の研究者と鳥に関する国際交流や自然観察会などの普及活動を進めている。

開館時間 四〜十月午前九時〜午後五時三〇分 十一〜三月午前八時三〇分〜午後五時三〇分

土・日曜日及び祝日は午前七時〜

休館日 火曜日（祝日の場合はその翌日）、祝日の翌日、年末年始

問合せ先 ☎0859・24・6139



弓ヶ浜公園

米子市西三柳
JR米子駅からバス二十五分、三柳団地下車、徒歩一分

九九八）十月にオープンした。

日本海に面した約一四ヘクタールの敷地内には、公設ゴルフ場をはじめ、「芝生の広場」、海と船をイメージして遊具が整備された「みんなの遊具広場」などがある。これらは小さな子どもからお年寄り、そして体の不自由な方も利用しやすく楽しめるものとなっている。

また、高さ四〇メートルの観覧車やメリーゴーランドなどが設置された「弓ヶ浜わくわくランド」もあり、市民の憩いの場となっている。

開園時間 午前九時〜午後六時

九月〜十一月は午前九時〜午後五時

休園日 水曜日（祝日の場合は翌日）、

十二月〜二月

問合せ先 ☎0859・48・1515

アジア博物館・井上靖記念館

米子市大篠津町五七
JR米子駅からバス二十五分、大篠津下車

中国、ペルシャなどアジアの国や地域の文化が、陶磁器や書・画などを通して紹介されている。モンゴル館には「ゲル」が展示されている。

また、染色工房棟では、古くから弓ヶ浜地方で行われてきた弓ヶ浜緋の染めと織りの工程を見学したり、体験（要予約）したりすることがで

きる。

鳥取県にゆかりの文豪・井上靖の資料を多数展示した「井上靖記念館」も併設されている。

開館時間 午前九時～午後五時

休館日 無休

問合せ先 ☎0859・25・1251

温泉 皆生温泉

米子市皆生
JR米子駅よりバス十七分、
米子市観光センター前下車

ゆるやかなカーブを描いて伸びる弓ヶ浜半島の東端に位置する。美保湾に面し白砂青松が美しい。遠くに大山を眺めることもできる。

昔から地元の漁師たちの間では皆生の沖合に白い泡が出ているといわれ、潜ると泡が大きくなり暖かい湯が沸いていたという。砂浜にも湯徴があり、明治三十三年（一九〇〇）自噴泉が発見され、大正十年（一九二一）、有本松太郎が掘削に成功し皆生温泉土地株式会社を設立した。一時期、電気鉄道が走っていた。

二十三の泉源のうち五つは未利用泉である。そのほかは集中管理されている。平均温度は六十六・五度、毎分四、一〇一・七リットルの湧出量は鳥取県一である。

温泉は新第三紀層の火砕岩中の割

れ目（断層）を通過して上昇する裂か泉と、更新世の堆積岩中の層状泉とからなっている。断層は東西に走るものと南北のものが伏在している。地下五百メートル前後以下にある花崗岩がマグマ溜から伝導して熱源となり、深層水となつた南方山地からの地下水流を熱し温泉となり、割れ目に沿って上昇したと考えられている。

泉質はナトリウム、カルシウム、塩化物を含むいわゆる食塩泉である。海岸近くに湧出する温泉であるにもかかわらず成分上は海水と直接関係がない。神経痛、皮膚病、貧血などに効果があるという。



皆生海岸は海水浴場としても有名で、夏には多くの海水浴客でにぎわう。また、皆生は鉄人レースとして知られるトライアスロンの日本の発祥地でもあり、毎年、多くのアスリートたちが街のなかを駆け抜ける。米子空港、JR米子駅にも近く、四季を通じて大山やとつとり花回廊などへの観光客の休養の拠点である。

有本松太郎

ありもとまつたろう

有本松太郎は、皆生温泉を一大温泉郷に整備しようとそのまちづくり尽力した。

文久三年（一八六三）、兵庫県美方郡浜坂町に生まれた。明治十四年（一八八一）、鳥取で土木工業に従事して以来、各地を転々としている。日露戦争に際し中国大陸に渡って鉄道工事を請け負い多くの財産を得たという。

米子に定住した有本松太郎は、荒廃していた皆生温泉を一大温泉郷に整備しようとして決意し、大正十年（一九二一）、皆生温泉土地株式会社を起こした。新しい技術を導入して温度七十二度、湧出量毎時百五十石の

温泉を掘りあて、各旅館に配湯することを可能にした。また、京都になり整然とした街路をつくり、公衆浴場や料亭などの建設を進めた。

さらに米子電気軌道株式会社を設立し、大正十四年（一九二五）には米子駅と皆生を結ぶ電車を通した。その間、大正七年（一九一八）に県会議員、同十年（一九二二）十二月には米子商工会議所会頭を務めている。

昭和十六年（一九四一）、七十八歳で死去。

笹鹿 彪

ささか ひょう

笹鹿彪は画家として活躍する一方、日展審査員・評議員などを歴任し、日本の美術界にあって中心的な役割を担った。

明治三十四年（一九〇一）、西伯郡米子四日市町（現在の米子市四日市町）に生まれた。幼いころから絵を描くことが好きで画家になることを決めていたという。

大正九年、十九歳のときに勤めていた銀行を辞めて上京し、岡田三郎助が主宰する本郷絵画研究所に入り、本格的に絵を勉強し始めた。翌

年には第三回展に『少女』が初入選している。

太平洋戦争の激化に伴い、昭和二十年、西伯町に疎開した。そのとき香田勝太、辻晋堂らと文化団体「麓人会」を立ち上げ、郷土の美術、文化の向上に努めた。

戦後まもなく大阪駅構内に掲げた五〇〇号の大作『フラナガン神父と子供達』は、全国的に話題となった。昭和五十二年（一九七七）に七十六歳で亡くなった。

白井喬二

白井喬二は一般庶民に愛される文学作品を多数残し、「大衆文学」の開拓、普及に努めた。

明治二十二年（一八八九）、横浜市で生まれた。本名は井上義道。両親とともに鳥取県人である。明治三十五年、米子市に移り住んでいる。

星蔭というペンネームでさかんに新聞などに投稿、文芸誌『水脈』の創刊にも関わった。大正九年（一九二〇）『怪建築十二段返し』を発表し、本格的な文学活動に入った。同十三年（一九二四）、『新撰組』『富士に立つ影』の連載を開始、大衆文

学作家としての地位を固めた。なかでも『富士に立つ影』は「報知新聞」に三年間連載され、広く読者の支持を得て白井の代表作となった。

雑誌『大衆文芸』を創刊し、大衆文学の普及に努めた。これがベースになり、昭和二年（一九二七）に刊行を開始した『現代大衆文学全集』（平凡社）全六十巻は大成功を収めた。

主な作品に『神変呉越草紙』『兵法大講義』『祖国は何処へ』『盤嶽の一生』『金欄戦』などがある。

昭和五十五年（一九八〇）、九十一歳で死去。

岩宮武二

岩宮は、対象に肉薄する力強さで知られる写真家である。

大正九年（一九二〇）、米子市に生まれた。大阪に出て百貨店などに勤め、そのかたわら写真倶楽部で撮影活動を続けた。昭和十四年（一九三九）、全日本写真連盟西日本部展で特選にはいった。

戦後、カメラ雑誌を舞台に、積極的に活動を開始した。昭和二十七年（一九五二）、自宅裏の工場で見たマ

ネキンを撮影した作品が、第二回富士フォトコンテストで金賞を受賞し、プロへのデビューを果たした。

昭和四十四年（一九六九）から四年間にわたって、青森県から山口県までの日本海を撮影した『日本海』は叙情的作品である。これとは対照的な『かたち 日本伝承』は、徹底した客観の視点で表現された作品群であるといわれる。

平成元年（一九八九）、六十九歳で死去。

境港市

弓ヶ浜半島

米子市と境港市の両市域に含まれ、美保湾と中海を仕切っている半島で、長さが二〇キロメートル、幅四キロメートルの大砂州である。大町桂月はこれを評して「大天橋」と呼んだ。

『出雲国風土記』には、弓ヶ浜半島を綱とし、大山を杭にして国を引き寄せたという国引き神話がある。

弓ヶ浜は西北へ環流する美保湾流



と東北へ環流する中海湖岸流が合流し、流速の弱まった地点に日野川河口からの土砂が堆積してできた浅い砂州が、その後相次ぐ海面低下によって海面上に姿を見せたものである。奈良時代までは島状の砂州であったが、半島状になった。

半島に平行する三列の砂州列がある。中海側から順に内浜、中浜、外浜とできた。外浜は砂州の粒子に砂鉄精錬の際の鉱滓が含まれていることから、形成は中世以降のものと考えられている。江戸時代以降、開拓が進められ、米川用水も完成し、後に綿と木綿の大産地となった。

米子空港やFAZの指定を受けて産業基盤整備が進められたほか、内浜沿岸と外浜の竹ノ内に埋め立てが行われ、商工業地として活用されている。

皆生海岸付近は、海岸浸食が進んだことから、離岸堤を設置し保全されている。

境港

境港市

弓ヶ浜半島の先端に広がる国際貿易港。漁港としても、水産業上特に重要な港として特定第三種漁港に指

定（全国十三漁港）されている。平成四年（一九九二）年から平成八年（一九九六）までの五か年間、漁獲の水揚量が全国一であった。西は中海、東は美保湾から日本海、北は境水道を隔てて島根県的美保関である。

有料の境水道大橋は、橋の長さ七〇メートル、幅員八メートルで歩道付きである。橋の高さは四〇メートルあり、一万トクラスの船舶の出入りが可能である。架橋には昭和四十三年（一九六八）から四年の歳月がかけられた。

半島先端をぐるりと取り巻く港湾地域に包まれるように、境港市の市街地がある。港湾地域は、境水道に面した内港と美保湾に面した外港に大別される。外港には沿岸の埋め立てにより造成された昭和町の埠頭や竹内工業団地が広がる。団地には公共マリーナが付設されている。漁港は内港にある。中海へ廻ると、木材工業団地を中心とした外江町地区があり、貯木場もここにある。

境港については、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に夜見島あるいは外江の関の記載がある。中世から近世にかけて、既に日本海の重

要な港として知られていた。江戸時代の北前船の往来では、最大級の和船「千石船」が出入りした。船積みされた物資は、藩米、鉄、綿の三品が代表的なものである。陸揚げされたものは、綿作の肥料となったニシン粕が多い。

明治に入ると、改めて北海道、大阪、隠岐、舞鶴と汽船航路が開かれ、明治二十九年（一八九六）には大陸との航路も開かれた。鉄道敷設の起点も境港であり、明治三十三年（一九〇〇）に始まり、明治三十五年（一九〇二）には米子を通り御来屋まで開通している。山陰線（現山陰本線）として最初の開通区間となった。鉄道が延びるに従って海路は廃れたが、大陸貿易が拡大した結果、境港は息を吹き返した。

昭和四十年代以後、埋め立ての一方、大型船の接岸を可能にするために一万トン岸壁や四万トン岸壁が次々築造された。

境港の港湾区域は漁港区域を除いても一、七七六ヘクタールあり、平成十二年（二〇〇〇）の貨物取扱量は魚の水揚げを除いて四八〇万トン、その内の外国貿易は二二三万トンである。ただし、貿易の八割は木

材、チップなど木材関連である。米子市内には、王子製紙の紙パルプ工場が立地している。

漁業では、大型まき網によるアジ、サバ、イワシ、マグロが漁獲高の大半を占めている。とくに、イワシの漁獲高が境漁港全体の活気に影響を与える。次いで、沿岸イカ釣り漁によるスルメイカ、他にかご網漁によるベニズワイガニが多い。なお、水産加工団地があり、全国の漁港の船団が水揚げに立ち寄る。松葉がにの水揚げ港の一つでもある。毎年開催される「境港水産まつり」は八万人近い人出でにぎわう。

みなとさかい交流館 （マリンプラザ21）

境港市大正町
J R 境港駅
から徒歩一分

境港駅に隣接して平成九年（一九九七）に建設された。「マリンプラザ21」は、境港はもとより、世界の船や港のしくみ、歴史について、ゲームなどを通して体験しながら、遊びながら学べる施設である。また、バーチャルリアリティを使用した「プレジャー号」では仮想航海を体験できる。

四階建ての施設内には、海を眺めながら入浴できる施設のほか、隠岐

汽船のチケット売場などもある。

また、平成十三年（二〇〇一）七月には、みなとさかい交流館の近くに境港重要港湾指定五〇周年を記念し、「海の交流」をテーマにした記念碑が建設された。

開館時間 午前九時～午後四時三〇分
休館日 水曜日、年末年始
問合せ先 ☎ 0859・42・3730

水木しげるロード

境港市大正町、松ケ枝町、本町、JR境港駅よりすぐ

境港市出身の漫画家・水木しげるの漫画「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する妖怪のブロンズ像が、駅前からのメインストリートに設置された彫刻



ロードで、新しい観光スポットである。

平成六年（一九九四）七月に開設された。まず鬼太郎・ねずみ男などのブロンズ像四十体を黒御影石の台座にのせて歩道に並べたところ全国的にも注目を集め、同八年度にはブロンズ像四十体、レリーフ五基がさらに加えられ、ブロンズ像は、現在、八十三体ある。その他の関連整備も進み妖怪神社も創建され、現在、駅前には水木しげる記念館の建設が行っている。

訪れる人々は妖怪たちに親しく話しかけ、一緒に記念写真を撮るとるなど、ほほえましい光景が見られる。

境港市は、「鬼太郎に逢えるまち、境港市」をキャッチフレーズにしている。地域おこし、まちづくりに境港ならではの話題性のある素材を使ったアイデアが呼び水となり波及効果が出ている。妖怪たちがまちの顔の一つになっている。

妖怪神社

境港市大正町、JR境港駅よりすぐ

境港出身の漫画家・水木しげるにちなみ平成十二年（二〇〇〇）一月に開設された。

鳥居の横木には、ゲゲゲの鬼太郎」のキャラクターで知られる一反木綿がかたどられている。

水木しげるロードと並んでまちの人気スポットになっている。

海とくらしの史料館

境港市花町、JR境港駅から徒歩二〇分

海とくらしの史料館は使われなくなった酒蔵を改造し、漁業の町・境港に現われた新しい博物館である。館内のいたるところに木造の小屋組が見えるのがこの博物館の特徴である。玄関ホールに入ってまず目に入るのは、大きな円形の水槽や、ビデオシアターである。はく製展示コーナーはその数日本一、カニやマグロやタイなどの剥製が所狭しと並べられている。メインホールに置かれている漁船「みなと丸」に乗れば日本海も体感できる。二階には人びとのからしをテーマに、農具・民具・漁具などの民俗資料も展示されており、境港周辺の歴史もわかるようになっていいる。外観は酒蔵当時の姿を留めており、町並みとも溶け込み、周辺を歩けば境港の歴史的な景観を楽しむこともできる。



史跡 台場公園

境港市花町、JR境港駅よりバス七分、上道下車、徒歩二〇分

文久三年（一八六三）、鳥取藩が築いた砲台場跡を中心に整備された公園。県内にはこのような砲台場が八か所設けられたが、その一つである。園内には山陰最古といわれる木造の白垂で六角形の灯台が復元されている。

春は三百五十本植えられた桜の花

が咲き誇り、花見客で賑わう。市民の憩いの場である。

昭和六十三年（一九八八）七月、国の史跡に指定されている。

光祐寺

境港市馬場崎町
J R馬場崎駅よりすぐ

浄土宗に属し、本尊は阿弥陀如来である。米子心光寺の末寺である。昭和三十一年（一九五六）までは市内栄町の大港神社近くにあった。

昔、当寺域には延盛山薬師寺という大寺があったが、文安四年（一四四七）に焼失したといわれる。しかし、仏像は焼失を免かれ、この寺に安置された。寛永十二年（一六三五）、総本山知恩院から現在の寺号を受け、報普上人が開き、寛文八年（一六六八）に寺は完成した。

当寺では正月三日に、「投げ杓子」という珍しい仏事が行われる。これは薬師寺当時の遺習の伝承といわれている。また、文政の頃（一八一八〜三〇）から、春彼岸に「調誦あげ」という新仏に調誦文を回向・供養する仏教行事が盛んに行なわれ始めた。

大港神社

境港市米町
J R境港駅より徒歩一〇分

大港神社は、誉田別命・武内宿弥命などを祭神とし、正八幡宮とあった。また、明和五年（一七六八）の「御社帳・会見郡」には、当社の末社には航海安全の神である高良神が祀られていることが記載されている。そのことからこの神社は古くから航海安全の神社として祀られていたと考えられる。その信仰は厚く、境港に入港した全国の回船船頭たちは航海安全を祈って、当社の波切り御幣を受けるのを常とした。中でも若狭や丹後の船頭は、例祭には代参者を派遣するほどだったという。境内には各地から寄進された手水鉢、石鳥居、燈明台などが残っている。

社殿背後に代台寺（現正福寺の前身）という神宮寺があったが、慶長年間（一五九六〜一六一五）の大洪水により廃寺となった。明治初年（一八六八）に今の神社名に改められた。また、大港神社の隣に稲田姫命、手摩乳命、足摩乳命を主祭神とする餘子神社があった。この社は戦国期には尼子氏の祈願所として社領五十四石を寄進され、近世には境・上

道・中野・福定・竹内五か村の産土神であった。

うっそうとした社叢に囲まれ、本殿・拜殿・神楽殿随神門を有したが、第二次大戦末期に起った境水道での玉栄丸爆発事故によって類焼し、祭神は大港神社に合祀され廃社となった。

大港神社東側には、新八幡宮と称してこの地で非業の死を遂げたという、尼子氏の武将・亀井能登守安綱などを祀る神社もあった。明治元年（一八六八）に亀井神社と改称され、大正四年（一九一五）に大港神社に合祀された。

境港市文化ホール「シンフォニーガーデン」

境港市中野町
J R上道駅より徒歩五分

境港市郊外、山陰の空の玄関である米子空港に程近い所に、平成六年（一九九六）に造られた文化ホールである。ホールに重なり合う高さ九メートルの空中に浮遊する円環（上部には花壇が設けられている）は、花壇のイメージを超えて天空に誘うファンタジックな空中回廊となっている。また、この施設をより印象的に演出するのがこの円環に取り囲まれた中庭である。中庭にある広場は、



池があり、噴水、人工滝、照明によってドラマティックに演出されるウォーターミュージアムである。

ホールは客席数四百と小規模であるが、音響効果もよく本格的なクラシックコンサートも楽しめる。また、ホールの内部は舞台と客席が一体となっており、会議・映画など各種イベントにも対応できる。このコンサートホールは「シンフォニーガーデン」と称され市民に親しまれ、市民の貴重な文化的オアシスとなっている。

上道神社

境港市上道町
J R米子駅よりバス三十五分 境高校前下車すぐ

上道神社は、祭神、事代主命、市杵島姫命など四神を祀る。慶安

二年（一六四九）恵美須神社として創られたものといわれる。「おえびすさん」「いづきさん」といつて氏子から親しまれ、豊漁を願って祀られた神社と考えられる。

また、寛文十二年（一六七二）の棟札（神社の棟上げの時、工事の由緒、建築の年月、建築者などを記して棟木に置く木札）には「…五個村氏子…」とあるところから、当社は上道・境・中野・福定・竹内五か村の氏神であったことがわかる。

明治元年（一八六八）、近隣小社を合祀し、上道神社と改名された。

社前の樹齢三百年を超える黒松の巨木は「おえびすさんの松」と呼ばれ、沖で漁をする漁師の目印になっていたという。この巨松を中心に緑濃い社叢が形成されている。この社叢は昭和六十二年（一九八七）に境港市の天然記念物に指定されている。

正福寺

境港市 中野町
JRR上道駅より徒歩五分

山号を巨嶽山といい、曹洞宗に属する。本尊は釈迦如来である。正福寺の『縁起』によると、この寺は、昔は境村にあり、正八幡宮（現大港神社）と餘子神社の別当寺（神仏習

合説によって神社に付属して作られた寺、神宮寺ともいう）で、真言宗・代台寺といった。

慶長年間（一五九六～一六一五）の大洪水により寺は流された。その後、吉祥寺として再興されたが、火災により焼失している。文禄末年（一五九五）に現在地に移され、曹洞宗に改められた。併せて山号・寺号も現在の名に改められ、米子総泉寺の末寺となった。本堂南に二世祖淳和尚（寛保元年・一七四一）が本山の越前永平寺より移植したと伝えられる力ヤの大木があった。この力ヤは昭和六十二年に市の天然記念物に指定されたが、平成三年（一九九一）の台風によって倒れた。

境内には地元の俳人一仙堂蘭石（文化十四年・一八一七没）の建立した芭蕉句碑がある。『伯耆志』の編者である景山肅はここに眠る。

また、正福寺には「地獄極楽絵図」がある。この絵は、境港出身の漫画家・水木しげる氏を妖怪の世界へ導いたともいわれる。

平成十四年三月、境内に水木しげる氏の銅像が設置された。

渡町・西東のゴヨウマツ

境港市 渡町
JRR境港駅より車で十五分

渡部家の邸内には、ゴヨウマツの巨木がある。樹高五・五メートル、胸高直径約一メートル、枝張りの周囲は四二メートルで富士山の姿に似せて樹形が作られており、樹冠面積が一五〇平方メートルもあり、その姿は壮観である。家伝によると、この木は文政年間（一八一八～一八二九）に北前船の乗組員から求めたといわれている。ゴヨウマツにはヒメコマツ（ゴヨウマツ）とキタゴヨウの二種類があり、中国地方にはヒメコマツは分布しているが、キタゴヨウはない。このマツは種子の翼の形態から北方系のキタゴヨウである。昭和四十五年（一九七〇）二月に県の天然記念物に指定された。なお、西東というのは所有者の屋号であり、渡町に渡部姓が多くあるので、混乱を避けるためにこの名称を用いている。

白尾神社

境港市 外江町
JRR外江駅より車で一〇分

白尾神社は、天照大神を主祭神とし他六神を祀る。創社年代は不明で

ある。

『鳥取県神社誌』によると、正応年間（一二八八～九二）に石州津和野の浪士・勝田上総介四郎（五郎とも）という者が当地にやって来て、市内鬼ヶ沢に住んで農耕を妨害する悪賊を亡ぼし、土地を開拓して勝田庄を作った。勝田四郎の死後、地元の人々は、その功績を讃え、勝田明神として新屋村に神社を創り祀ったといわれる。後に外江の現在地に神社は移されたが、米子城が築城されたとき（天文二十二年・一五五三）、城の鬼門鎮護の神として、祭神は再び米子に遷された。これが現在の勝田神社である。祭神勝田四郎を失った当社は、その後伊勢神宮を勧請し、近世になると、「伊勢の宮」と呼ばれていたという。

明治五年（一八七二）、現在の社名となった。白尾とはかつての祭神、勝田四郎の名前の転化といわれている。

補岩寺

境港市 外江町
JRR余子駅より車で五分

曹洞宗に属し、米子総泉寺の末寺である。本尊は聖観音である。元永二年（一一一九）に創建当時は、真言律宗に属し、長福寺といひ東寄り

の場所にあった。

文明五年（一四七三）に、海岸愚禅という曹洞宗の僧が来住し、荒廃していた長福寺を再興し、宗旨も曹洞宗に改めた。その後も焼失・再建を繰り返した。元禄二年（一六八九）、米子総泉寺の竺法梅園和尚が寺に来て、当時、荒地で妖怪の七尋女房が出る噂されていた現境内に寺を移し、同十三年（一七〇〇）に再建し、寺の名も補岩寺に改めた。

境内の阿弥陀堂には、仁安三年（一一六八）に海中より出現したといわれる阿弥陀如来像と、平安時代の作と思われる毘沙門像が祀られている。阿弥陀如来像は昭和六十二年（一九八七）三月、市の有形文化財に指定されている。両仏共に年二回（正月三日・旧暦三月十日）開帳される。当日は福木も出て、多くの信者でにぎわう。また、当寺は失せ物・盗難物などに霊験があると伝えられている。

寺の外には芋代官碑や、天保六年（一八三五）に刻み煙草機械を発明した浜田与一の碑などがある。

夢みなと公園

境港市竹内団地内
JR境港駅よりはまるーぶバス三〇分、夢みなとタワー下車

平成九年（一九九七）に開催されたジャパンエキスポ山陰夢みなと博覧会の会場および施設をリニューアルした施設。

大山や日本海を見渡すことのできる夢みなとタワー、夢みなと温泉館などがある。

水産物販売所

日本有数の漁獲量を誇る境港から水揚げされた、日本海の旬の魚介類が並ぶ。新鮮な旬の魚介類、塩干物、乾物などが販売されている。

境港さかなセンター 境港市竹内団地
JR境港駅から車で一〇分
問合せ先 ☎0859・45・1111

なかうら大魚市場 境港市竹内団地
JR境港駅から車で一〇分
問合せ先 ☎0859・45・1600

境港水産物直売センター 境港市昭和町
JR境港駅より車で五分
問合せ先 ☎0859・44・6668

夢みなとタワー

境港市竹内団地
JR境港駅よりはまるーぶバス三〇分、夢みなとタワー下車

夢みなと公園内にガラス張りの円柱形の建物がそびえる。

平成九年（一九九七）夏に開催されたジャパンエキスポ「山陰夢みなと博覧会」のシンボルタワーだったこの施設は、平成十年（一九九八）五月にリニューアルオープンした。

一階には、鳥取県の名産や特産品が並ぶ大正・昭和初期のみなとまちを再現した「みなとまち商店街」、三階には大型で迫力満点の映像と音響を用いた鳥取県を紹介した「夢みなとシアター」、四階には対岸諸国六



地域について紹介する「夢みなと交流村」がある。また、地上四三メートルに位置する展望台は、三六〇度見渡せる。

開館時間 午前九時～午後六時（一〇月～三月午前九時～午後五時）

休館日 第二水曜日

問合せ先 ☎0859・47・3800

温泉 夢みなと温泉館

境港市竹之内団地内、JR境港駅より車で十五分

平成九年（一九九七）に開催されたジャパンエキスポ「山陰夢みなと博覧会」の跡地の一部に整備された夢みなと公園内にある。博覧会開催期間中は、地下一、五〇〇メートルから湧き出る天然温泉を利用した施設として多くの入場者に利用された。

その後、より利用しやすい温泉施設として整備され、平成十年（一九九八）五月にリニューアルオープンした。館内には、三〇人程入浴できる浴室のほか、サウナや大山と日本海を望む露天風呂が備えられている。

開館時間 正午～午後八時（入館は午後七時三〇分まで）

休館日 第二水曜日

問合せ先 ☎0859・47・3870

大同寺

境港市竹内町
JR余子駅より徒歩五分

大同寺は、山号を瑠璃光山といい曹洞宗に属する。本尊は薬師如来である。近世には大堂といった。現在でも堂とか薬師堂といわれることがある。

寺の略縁起によると、もとは大同元年（八〇六）に、飛驒の匠が建立した七堂伽藍のある真言宗の寺院だった。幾度も火災に遭ったが、幸い本尊は難から免かれたという。いったん理由で曹洞宗に転宗したかはわからない。

この寺には毎年一月九日に行なわれる「おこない」と称する行事が継承されている。これは密教寺院で行なわれる豊饒祈願の修正会・修二会の名残りと考えられる。当寺の前身、真言寺院時代の遺習と推定される。

町内の旧家十五戸が輪番で当屋になり、祭りの前日までに餅米二斗で直径八〇センチの大餅四個などをつき、その餅に薬師如来の尊号を墨書き、割木を十文字にして餅を結び、当屋から寺に運ぶ。それを仏前の柱四本に懸け供え、大般若経を転読する。また、参詣する際に、二歳児の

男児は護摩木を背負い、女兒は白紙を懐中に入れ、これらを供物として供え、後に木は大火鉢で焚き、白紙は薬師如来の尊号を書いて、十五等分された大餅に付けて十五戸に配られる。以前は花の木とつぎも添えていたという。十五戸に配られた餅は、それぞれの組内・分家筋に細分される。

境内には戦国期にこの地で非業の死を遂げたという亀井能登守の若君と乳母や家臣小磯氏にまつわる話とともに「乳母が松」（若君松もあつたが焼失した）「乳母が池」「小磯の社」「亀井六地藏」がある。また、近世の地元俳人一仙堂蘭石の句碑もある。本尊は、特に眼病に靈験があるといわれ、信仰されていた。

門脇重稜

かどわきしげあや

門脇重稜は国学者である。文政九年（一八二六）に会見郡渡村（現在の境港市渡町）の日御碕神社神官の家に生まれた。国学を修めるかたわら、儒学者で医師の景山肅に学び、歴史、地誌の研究に目を向けるようになった。

数年かけて研究した『名和氏紀事』

は建武の政権に重用された名和長年の事蹟を調べた労作である。これが藩主・池田慶徳に認められ、文久三年（一八六三）、鳥取藩士となった。元治元年（一八六四）、伯耆の地誌編さんを命じられ現地に入って調査を始めた。この調査は維新まで続いた。

明治改元にもなう大嘗会では鳥取藩から飯田年平ら三人とともに選ばれ、歌を奉つている。これは当時、歌人として最高の名誉とされていた。明治新政府では教部省の高官となった。

明治五年（一八七二）、在職中に四十七歳で亡くなった。郷里の渡町に墓と顕彰碑がある。

杉谷代水

すぎたにだすい

杉谷代水は、近代文学創成期の一人であり、特に児童文学の担い手として活躍した。

明治七年（一八七四）、現在の境港市に生まれた。父の仕事の関係でしばしば転居し、代水は二歳で松江、九歳で鳥取市に移り住んでいる。本名は虎蔵という。代水の号は鳥取市内を流れる千代川にちなんだ。

東京専門学校現在の早稲田大学）に進学、創作力や研究態度が坪内逍遙に認められたが病気のため中退した。逍遙の力添えにより富山房に入社し、小・中学校用の『国語読本』を編集した。この教科書は画期的な教科書であるとして評判になり、のちの国定教科書に大きな影響を与えたといわれる。

このころ、早稲田派の詩人としても活躍している。島崎藤村に似た七五調のなだらかな作品が多い。小説や脚本、狂言も書いている。同郷の作曲家、田村虎蔵に頼まれて唱歌の作詞もした。六十余編書いた作品の中には、よく知られる『星の界』もある。

「月なきみ空にきらめく光
嗚呼その星影希望のすがた
人智は果なし無窮の遠に

いざ其の星影きはめも行かん」

明治四十四年（一九一）から雑誌『新日本』の編集に参画するなど活動の幅を広げていったが、病気が再発し大正四年（一九一五）、四十歳で死去。

著書には『学童日誌』『希臘神話』『作文講話及文範』などがある。また、『クオレ』（母を訪ねて三千里）

を翻訳している。

植田正治

植田正治は、独自の写真表現を確立し、日本の写真史に大きな功績を残した。

大正二年（一九一三）、西伯郡境町（現在の境港市）に生まれた。昭和六年（一九三一）、米子写真友会に入会し、アマチュア写真家として活動を始めた。同十二年（一九三七）中国地方の写真家たちと中国写真家集団を結成し、ローカル色を強く打ち出す。

昭和十四年（一九三九）の『少女四態』は、砂浜で遊んでいる四人姉妹をオブジェ風に配置した「UEDACHO」（植田調）の原点となる作品であり、植田正治はこの演出写真で一気に名声を高めた。平成七年（一九九五）、大山のふもとに植田正治写真美術館がオープンした。翌年、日本人写真家としては初めて、フランス政府から芸術文化勲章を受賞している。

平成十二年（二〇〇〇）、八十七歳で亡くなった。

西伯町

史跡 法勝寺城跡

西伯郡西伯町鴨部
JR米子駅よりバス
二十五分、法勝寺下車、
徒歩七分

中世の古城跡である。現西伯町役場（法勝寺）に川を隔てて隣接する。突き出た丘端を三段に削り、空堀や土塁の遺構が残っている。尾崎城の別名がある。昭和五十四年（一九七九）四月一日、西伯町の史跡に指定された。

この地は、西方は出雲国に接し、南方は五輪峠を越して日野・備中・備後へと通じる。交通の要衝であり、



城の歴史も古い。南北朝末期の「明德の乱」のとき山名満幸が一時在城したといわれる。戦国時代に入ると、

山名氏から尼子氏の領となり、戦国末期には毛利氏の支配下となり、幾度か攻防戦が繰り返された城跡である。城跡には古城砦の外郭を示す「戸構」の地名が残る。

城跡や川岸には桜並木が続き、春の開花期には例年、法勝寺「一式飾り」（町指定民俗文化財）が家々に飾られ、人出でにぎわう。

長田神社社叢

西伯郡西伯町馬場
JR米子駅よりバス二十五分、法勝寺下車、徒歩十五分

スタジイ、タブノキ、サカキ、クロキ、ウラジロガシにクログアネモチが混じった常緑広葉樹を主とする社叢で、みことな原始林である。クログアネモチは暖地の植物で、県下では米子、福成、法勝寺をつなぐ線が東限にあたるようである。

昭和三十六年（一九六一）、県の天然記念物に指定された。

一式飾り

西伯郡西伯町法勝寺で四月第二土・日曜日に公開される伝統行事で

ある。陶器・塗物・竹細工などの素材一式（一種類）を使用し、班ごとに

干支や芝居の名場面、その年に流行したものを組み立てる。組み立て作業は各班ごとに内密に行われ、かつては、そのできればその年の農業の豊作などを占ったともいう。小正月行事であったが、長田神社の春の祭礼に合わせて行われるようになった。



一般的には「つくりもの」と呼ばれるもので、起源・由来とも正確なものは伝わっていないが、江戸時代後期に上方を中心に流行した「見立て」の文化が地方に流入したものと考えられる。宿場町であった法勝寺にふさわしい行事である。

西伯町「祐生 出会いの館」

西伯郡西伯町下中谷
JR米子駅よりバス二〇
分、緑水園前下車すぐ

「祐生出会いの館」は、西伯町にある緑水湖畔に建つ郷土玩具と孔版画の博物館である。地元で教員などを務めながら独自の技法で孔版を創作した板祐生の作品をはじめ祐生が集めた郷土玩具やポスター、浮世絵など、三万点余りの時代を語る品々や祐生の生涯を展示している。

また、棟方志功や武井武雄など戦中、戦後活躍した活躍した版画家たちが参加した「樁の会」のアルバムが全て収蔵されている。

開館時間 午前九時～午後五時



休館日 火曜日、年末年始

問合せ先 ☎0859・66・4755

板祐生

板祐生はすぐれた孔版芸術家として、また郷土玩具収集家として知られる。

本名は愈良。明治二十二年（一八九九）、鳥取県会見郡東長田村（現在の西伯郡西伯町）に生まれた。地元の法勝寺高等小学校を卒業したあと十五歳で落合小学校の代用教員を務めた。以来、五十六歳までほとんど山間の学校で教員生活を送った。

そんな生活の中で、身の回りにある切手、包装紙、うちわ、手拭いなど、庶民の日常生活のなかにある雑多なものに心を躍らせ、収集を始めた。特に郷土玩具には力を入れた。

学校で教材をつくるうちにガリ版（孔版）に興味をもった。これをきつかけに、版画にひきつけられ制作するようになった。ろう引きの原紙に鉄筆で文字や絵を書き、これに印刷インクをにじみ出させて刷る軽便な印刷機を用い、昭和十五年ごろ、「切り抜き孔版」という独自の技法を開発した。昭和三十一年（一九五

六）、六十八歳で死去。

平成七年（一九九五）、祐生の作品や収集品を集めた「祐生出会いの館」が西伯町下中谷に開設された。約千五百点の作品をはじめ、生涯にわたって板が集めた郷土玩具やポスター、うちわなど、約四万点が展示されている。

名所 南さいはく 自然休養村

西伯郡西伯町下中谷
JR米子駅よりバス二〇
分、緑水園前下車すぐ

緑と水に親しむ総合的なレクリエーションサイト。平成元年（一九八九）、日野川水系法勝寺川をせき止めて賀祥ダムが完成した。ダムの高さ四六メートル、堤長一七四メートル、貯水容量七四五万立方メートル、周囲八キロメートルのダム湖が誕生し、ダム湖は緑水湖と名付けられた。湖岸には、花木園やスポーツ広場が九ヶ所設けられ、その後、各種のレクリエーション施設が整備され、農林水産省の自然休養村の指定を受けている。

下中谷地区には、自然休養村の中心的な施設として、宿泊、食事、会議室を備えた「緑水園」が整備された。国道一八〇号を挟んで西側にはバンガロー七棟と研修センター棟を

備えた「虹の村」がある。

さらに緑水湖の周辺に、森林公園、フィールドアスレチック、キャンプ場など自然に親しみながら楽しむ施設のほか、バンガローなどの宿泊施設やレストラン、テニスコートや野球場などのスポーツ施設が整備されていて、多目的に利用できる。年間約二〇万人以上の人々が訪れている。



平成十三年（二〇〇一）四月には、森林公園内の小高い丘の上に木工や草木染めなどが体験できる体験実習館も設置された。地元出身の孔版画家・板祐生の作品を収蔵展示している「祐生出会いの館」があり、一見の価値がある。

また、涼風そよぐ緑水湖ではボートに乗ったり釣りができるほか、その湖畔でも一年を通じさまざまなイベントが行われている。

問合せ先 ☎0859・66・5111

賀茂神社

西伯郡西伯町優
J R 米子駅よりバス二十五分 富前
下車

賀茂神社は、別雷命など七神を祀る。京都賀茂神社を勧請し大平山に祀ったと伝えられている。創社され

伝説

江戸の昔、賀茂神社の石の鳥居を石工屋から運ぶ時のこと。力自慢の石工が相方を神主に頼んだところ、村から出て来た相方は頼りなさそうな男だったので石工はばかにしていた。

二人ははだしで石柱を運び、途中の休けいも杖を立てたままで石を降さずに煙草を吸って休んだ。

運び終わった後にキセルを見ると、石工のキセルには歯型ががつちり付いていたが、村の男のキセルには何も付いてなかったという。

た年代は不明である。後に大平山中腹に移され、更に、万治三年（一六六〇）、現在地に再び移された。

戦国期には尼子氏に崇拜され、社領百石の寄進を受けたが、同氏滅亡後は衰えた。

近世になり享保十八年（一七三三）に藩主・池田氏が社領十石を寄進している。

明治、大正時代にかけて近郷小社を合祀した。その中には、かつて猪小路村渡田峠に鎮座し、疱瘡除けの神として藩主も信仰した鷲神社があり、今も境内に祀られている。

賀祥の鉄仏

「賀祥の鉄仏」は、白山神社に祀られる鉄造聖観音立像、鉄造十一面観音立像の二体と、鉄製光背一面を称し、昭和十七年（一九四二）十二月に国の重要美術品に認定された。

国道一八〇号を米子市から西伯町へ向かい、法勝寺を過ぎて約三キロメートル進むと、鳥取県賀祥ダム管理事務所へ至る。その近くの山麓に、白山神社の社がある。神社といっても本尊は木造十一面観音座像（昭和五十四年四月一日、西伯町指定文化

財）を祭り、平安時代の神仏習合の姿を今に伝えている。

この「賀祥」の地名は、平安時代の古い年号「嘉祥」（八四八〜八五一）とも書かれた。

また、白山神社裏からは経塚や藤原鏡などが出土していることから、ここは伯耆国の平安仏教の一拠点であったであろうと推察されている。

仏像の背後には、大壇那藤原泰親、大願主藤原氏女、院主宗賢、大工道覚、元応二庚申四月廿一日」の銘文が書かれている。

元応二年（一三二〇）といえは後醍醐天皇の時代で、泰親はこの地方を支配していた領主であろう。この地方で盛んであった「たたら製鉄」の歴史を伝える仏像である。現在、鉄仏は西伯町歴史民俗資料館で拝観できる。

金花山

西伯郡西伯町八金

標高三六〇メートルの孤立峰で、金華山ともいう。山腹の斜面は急で、南北に延びた円錐状の山形をもつ。山の主な部分は流紋岩質凝灰角礫岩からなり、南側の山麓は安山岩質凝灰角礫岩からなる。これらは、白亜

紀末期の花崗岩を不整合に覆う火山噴出物で、米子市南部に広く分布する新第三紀中新世の石見層群に含まれる。金花山は石見層群の分布南端にあたる。

山頂付近では、巨岩や絶壁など凝灰角礫岩に特有な荒々しい浸食地形が見られ、この景観から金華山全体が町の天然記念物に指定されている。

金花山熊野神社社叢

西伯郡西伯町八金
J R 米子駅より車で三十五分
徒歩二〇分

金華山は、凝灰角礫岩の孤立した標高三五七メートルの岩山で、山頂部に熊野神社が祭られている。

社叢は自然性のヒノキやスタジイが疎密な群落をつくり、ネジキ、ナキンナナカマド、アセビ、ソヨゴ、シャンシャンポなどが生育している。粗悪な土壌環境に加え孤立峰であるため風衝が厳しく、樹木の樹高が低く歪曲した樹形のものが多い。

岩上には希少植物であるムギランが生育し、スタジイ林内には暖地性のクロバイやヤマモモなどが見られる。植物分布上貴重であることから、昭和五十七年（一九八二）四月、金華山熊野神社社叢として県の天然記念物に指定された。また、県の自然

環境保全地域にも指定され、保護されている。

馬佐良の申し上げ

西伯町馬佐良

申し上げは、西伯耆地方に広く分布する、荒神に一年の収穫を感謝申し上げる祭である。なかでも、馬佐良の申し上げは神饌献上や年占など、祭の古い形態を伝えていることから、平成二年（一九九〇）に県の無形民俗文化財に指定されている。

毎年十二月四日、馬佐良集落の各戸は、新稲藁三束と女竹二十数本を持参し、竹には神官の切った荒神幣を差して幣串を作り、藁で注連縄しめなわを作り大蛇を作る。十数メートルに達する蛇体は、一年（十二か月）を意味する十二回のとぐるを巻かせ、神官を先頭に行列を仕立て、荒神さんに運ばれる。神事では、新米で作った甘酒を玉垣内の埋め瓶に入れるが、その際残っていた量で作物の豊凶を占う。

長寿寺・落合神社社叢

西伯町西伯法勝寺
JR米子駅よりバス二十五分、地蔵前下車、徒歩二分

長寿寺、落合神社社叢は、西伯町西伯町を南北に貫く国道一八〇号を

中心にして、東方の法勝寺城跡の城山と対比する位置にある。

社叢は尾根の最北端部の、標高五〇〇九五メートル付近にスタジイが優占するつつそうと茂る照葉樹林である。

特に、社殿の北側には樹高約二〇メートルに及ぶ近郷にあまり例をみないスタジイがあるほか、尾根の東側斜面全体は里部には珍しい典型的な照葉樹林として昭和六十年（一九八五）六月に県天然記念物に指定された。

なお、社殿後方の尾根北側に、低地での生育が珍しいアカガシの巨木が三本見られ、過去の植生を現在に伝えるものとして貴重である。

金山の三肢エノキ

西伯町西伯町東上

生田氏宅の裏にある。エノキは二レ科、古名は工という。従来、榎という字を使うがこれは和字で、夏には木蔭が好まれるので、木に夏を付けたという。漢字の榎は別物である。

このエノキは胸高周囲が三・九〇メートルで、高さ一・五メートルのところから三肢に分れている。東方の枝の周囲は二・二メートル、南

方は二・五メートル、西方は一・八メートルある。枝は東西に二五・五メートル、南北に二四メートル広がる。

東上集落には古くから「地しめうた」という民謡がある。

こちらのよどめ三肢榎
榎実ならいで金がる

とある。実際には榎の実はなる。

有数の名木で、「とつとりの名木一〇〇選」に選ばれた。

佐伯氏のクログネモチ

西伯町西伯町福成
JR米子駅よりバス十五分、谷川作業所前下車、徒歩二分

佐伯氏の庭には、クログネモチの巨木がある。クログネモチは、モチノキ科の暖地性常緑高木で、主に中部地方以南の太平洋側が分布の中心で、日本海側では本県の米子市、西伯町会見町、西伯町を結ぶ線が分布の限界であると考えられる。

この木が自生か植栽されたものか定かではないが、胸高直径九〇センチ、枝張りは東西約一四メートル、南北一六メートル、樹高約一三メートルに達し、これだけに成長した大木は非常に珍しく、昭和三十六年（一九六一）に県の天然記念物に指定された。また、「とつとりの名木

一〇〇選」にも選ばれている。

なお、クログネモチは雌雄別株で、雌株は秋に赤い実をつけ美しいので、街路樹や庭園木に植えられる。この木は残念なことに雄株であるため六月に開花はするが実はできない。

会見町

雲光寺

西伯郡会見町御内谷
J R米子駅よりバス三〇分 御内谷
下車

雲光寺は、山号を金龍山といい、曹洞宗に属し、本尊は聖観世音である。越前龍泉寺（現福井県武生市）や丹波永沢寺（現兵庫県三田市）を開いた通幻寂霊の弟子・天真自性によって、明徳年間（一三九〇）九四に開かれた。当初は丹波永沢寺の末寺であったと伝えられる。その後、定光寺（現倉吉市）の俊鷹道青和尚を迎えて中興開山し（『伯耆志』）、以後、定光寺の末寺となった。戦国期、尼子氏や南条氏が当寺に帰依した。

当寺には、足利義満（「鹿苑院殿天山義公大禅定門」と）、小野小町（「誠清院殿靈妙照大禅尼」）のもと伝えられている位牌がある。本堂横にある観音堂は、伯耆札の一番で、堂の縁日（八月十七日）には、ここで盆踊・小松谷踊が踊られる。

小松谷盆踊

西伯郡会見町の中央を流れる小松谷川沿いの市山・御内谷・井上・高姫ほかの集落で踊られる盆踊り。

江戸時代末頃から各集落の辻などで踊られていた。踊りには「小松谷盆踊」と「パンバ踊り」の二種類ある。踊りの起源は、金田集落にあった小松谷城で盆の十七夜に城内あげて無礼講の盆踊りが催されたという説と、御内谷集落にある雲光寺で本尊聖観音の縁日の十七夜に念仏踊りをしたのが始まり、という二説ある。平成七年（一九九五）に県の無形民俗文化財に指定されている。

赤猪岩神社

会見町寺内
J R米子駅より車で二〇分

『古事記』によると、因幡の八上姫を大國主命に奪われた兄の八十神が、弟・大國主命に「赤い猪がこの山（手間山）にいる。そのため、我々は上から追って下るので、おまえは下で待っていて討ち取れ。もし討ち取らなかつた場合はおまえを殺す。」と言って、赤い猪に似せて大石を焼き、転落させた。そして、大國主命



はその石を抱えて死んだとある。

赤猪岩神社はその大國主命受難の地にあり、神社名もこの神話に由来する。古くは手間山（標高三二九メートル）山頂にあった。赤磐権現（赤猪とも）といい、大國主命他三神を祭神とする。明治元年（一八六八）に赤猪神社となり、大正十一年（一九二二）に現在地に移された。その際に、以前から遷座地にあった久清神社と合祀されて赤猪岩神社となった。境内には八十神が赤猪と偽って落としたという大岩（赤猪岩）が残っている。

なお、近くの西伯町清水川には、この焼石によって死んだ大國主命を

蘇生させたという清水井がある。また、米子市大袋は大國主命が肩にかけていた大きな袋を置いた所と伝えられている。

史跡 三崎殿山古墳

西伯郡会見町三崎
J R米子駅よりバス
十五分、丘陵上まで
徒歩一〇分

通称「殿山」（標高八三メートル）と呼ばれる独立丘陵の頂部に築かれた前方後円墳。この丘陵はさほど大きいものではないが、本古墳の他にも小円墳などが二十基あり、これらを一括して「三崎古墳群」と呼ぶ。そのうちの十号墳が「殿山古墳」である。全体の長さが約一〇八メートル、後円部が約五八メートル、高さ約八メートル、前方部の幅約三五メートル、高さ約六メートルあり、西伯耆では最大の大きさである。

古墳時代中期（五世紀）の築造と考えられており、この時期に当地が有力豪族の拠点となっていたことを物語っている。この付近には、安来市の大成古墳出土の鏡と同型の「三角縁神獸鏡」が出た普段寺三号墳や、『古事記』の大國主命が兄神たちによって大火傷を負わされたという伝説を伝える赤猪岩神社など、古代に係わる遺跡が多い。

県立フラワーパーク とっとり花回廊

西伯都会見町鶴田
JR伯耆溝口駅
より車で五分

平成十一年（一九九九）四月にオープンした国内最大級のフラワーパーク。総面積八〇ヘクタールという広大な園内には直径五〇メートル、高さ二メートルの円形ガラスのフラワードームをはじめ、一周一キロメートルの展望回廊、五大陸展示花壇などがある。

四季折々にさまざまな花に彩られるワイルドフラワーの丘の背後には、秀峰大山の美しい姿を望むことができる。



開館時間

四〜十一月 午前九時〜午後五時

十二〜三月 午前九時〜午後四時三〇分

休園日 四〜十一月 無休

十二月〜三月 毎週火曜日、年末

祝日の場合は翌日

問合せ先 ☎ 0859・48・3030

物産 「野の花」 特産センター

西伯都会見町鶴田
JR米子駅よりバス
二十五分、花回廊下
車

県立フラワーパークとっとり花回廊の中にある物産館。花回廊がまたがる会見町、溝口町、岸本町が出資し第三セクターによって運営されている。三町の特産品や民芸品をはじめ新鮮な農産物などが販売されている。

開館時間 午前九時三〇分〜午後五時

休館日 四月〜十一月無休、それ以外

の期間は毎週火曜日

問合せ先 ☎ 0859・48・3087

みなづき 水無月さん

水無月晦日に近い日に、各地の神社・神道系教会では鳥居にチガヤで編んだ輪を取り付ける。この茅の輪をくぐると厄を避け、無病息災で暮らせるといわれる。事前に流しびな

と同義の人形（ひとがた）を配り、氏子が身体をなでたものを茅の輪とともに川や海に流してしまつところもある。「輪くぐりさん」とも呼ばれる。

八幡神社（米子市八幡）、天萬神社（会見町天万）などでは、境内に露店が並び、花火や余興も盛りだくさんに行われる、にぎやかな夏祭りである。

岸本町

史跡 大寺廃寺

西伯郡岸本町大殿
JR岸本駅より徒歩十五分

白鳳時代創建の寺院跡。この地は、『和名抄』に記された会見郡巨勢郷に当たると推定される。この寺跡は、大正十八年（一九一八）足立正による「石製鳴尾」の発見をきっかけに、塔の心礎を調査する課程で明らかとなった。

この寺の伽藍配置は、北に塔、南に金堂を並列させ、その背後に講堂を建て、回廊が塔・金堂を囲み、講堂につながる形態をとっている。寺跡からは、この寺院が平安時代（九世紀）まで存続していたことを示す各種瓦・軒丸瓦・軒平瓦（一般の瓦）類や塑像残欠（粘土を焼いて作った像）などが出土した。また塔跡は、町の史跡に指定され、心礎が国道一八一号の道路脇に保存・公開されている。この寺院の屋根を飾っていた石製鳴尾は、高さ約一メートル、幅四五センチで鱗が十段表現されている。白鳳時代のものと考えられる。鳴尾とは海中の魚で水を吹いて火

を消すという伝説から、寺院などの屋根に取り付けたという。瓦製のもの一般的な、石製のは群馬県の山王廃寺のものが知られているのみである。

昭和三十四年（一九五九）に国の重要文化財に指定された。現在は、国道一八一号から五〇メートルほど入った福樹寺境内に保存されていて、いつでも見学できる。

福樹寺

西伯郡岸本町大塚
JR岸本駅より徒歩一〇分

大寺廃寺で発見された石製鴟尾が境内にある。鴟尾は瓦製がほとんどで石製は珍しい。国の重要文化財に指定されている。

越敷山

西伯郡会見町・岸本町
米子駅より車で三〇分

日野川左岸の西伯郡会見町と岸本町の境界に位置する標高二二六メートルの山。越敷山は、越敷野あるいは越敷原と呼ばれる、玄武岩溶岩流のつくる台地の上にある。台地面からの比高は三〇メートルほどで、かなり風化が進んでいるが、本来は丸いドーム状の山容であったと考えられる。台地上には越敷山と、越敷山

によく似た高塚山（三〇一メートル）、その二つに挟まれた二七〇・五メートルの三角点を持つ山がある。これらは、最近の調査・研究により、いずれもかつての噴火口の周囲にスコリアが降り積もってきたスコリア丘であることが明らかになった。台地をつくる玄武岩もこれらの噴火口から流出したもので、その時代は約百万年前である。越敷山の山頂部や台地の表面は、日野川をはさんだ東隣の大山火山から飛来した約十三万年前の降下軽石層によって覆われている。

平成十一年（一九九九）、高塚山の北に国内最大級といわれるフラワーパーク「とっとり花回廊」がオープンし、多くの観光客が集まるようになった。

伝説

平安時代の女流歌人で、絶世の美女と言われた小野小町の墓といわれる五輪塔がある。この五輪塔の一番目と二番目の石をこすりあわせてできた白い石粉を顔に塗れば美人になるといって言い伝えがある。

植田正治 写真美術館

西伯郡岸本町須村
JR岸本駅下車よりバス〇分
美術館前下車すぐ

国内はもちろん海外でも情景写真家として高い評価を受けている植田正治の作品を展示する美術館として平成七年（一九九五）に造られた。

植田正治が独自の視点と感性で七十余年にわたり制作した膨大な遺作が収蔵されている。

建物外観は打ち放しコンクリートの斬新なデザインに特色がある。植田正治の代表的な写真「少女四態」をイメージして造られたとも言われている美術館の姿が印象的である。また、大山の雄大な姿によく溶け込みながら、新たな風景を作り出し、平成八年（一九九六）に鳥取県景観大賞に選定された。

また、大山山麓にある福岡堤は「逆さ大山」が映る池として多くの写真家・画家から親しまれているが、福岡堤の縁にあるこの美術館でも、各展示棟の間から望む水面には逆さ大山がみごとに再現されている。

開館時間 午前九時～午後五時

入館は午後四時三〇分まで

休館日 毎週火曜日（祝日の場合は翌日）

問合せ先 ☎ 0859・39・8000



植田正治美術館より大山を望む

大山ペンション村

西伯郡岸本町小林・真野

昭和四十五年（一九七〇）、群馬県草津に登場したペンションは全国に広がり、ペンション村も各地造られた。大山ペンション村は西日本で最初のペンション村として昭和五十一年（一九七六）に誕生した。オーナーの中には、大山の豊かな自然に魅せられて県外からやってきた人も少なくない。

開発当初、なかなか増えなかったペンションも、今ではレタス通り、トマト通り、ポテト通りと三つのブ

ロックが整い、併せて三十軒近くが林の中に点在している。また、建物も洋風のものから和風のものまで多様である。

ここでは、自動販売器の設置や看板などが自粛され、住民の景観づくりへ相互協調が図られている。四季の花が庭先を美しく彩り、個性的でメルヘンチックな景観を演出している。

物産 大山ガイド ンプレイス

西伯郡岸本町丸山
J R岸本駅より車で五分

日本海と大山を一望できる絶好の場所に位置する。観光案内所、特産品販売店、生鮮野菜等直販店、レストランなどが揃い、旅する人に便利な施設である。

お土産コーナーでは山陰の土産が取り扱われているほか、「マルシエ岸本」には、地元岸本町の特産品や、近隣の農家から採れたての新鮮な野菜や加工品が並ぶ。

また、アグリスペースでは、もち、ジャム、ソース、おこわなど地元の豊かな食材を活かした食品の加工・販売を行っている。このほか鳥取和牛を味わうことのできるバーベキューハウスもある。

開館時間（売店） 午前九時～午後六時
休館日 水曜・祝日の場合はその翌日（問合せ先 ☎0859・39・8111

物産 大山まきば みるくの里

西伯郡岸本町小林水無原
J R岸本駅より車で二〇分

背後に大山がそびえ、前方には緑の牧草地が広がる。牧歌的な景色の中に、平成十年（一九九八）四月にオープンした。

四ヘクタールの敷地内には、アイスクリームづくりなどが体験できるミルク工房や搾乳体験のできる牛舎がある。地元の乳業協同組合が運営するこの施設では、乳製品や牛肉をふんだんに味わえるレストハウスや物産販売所がある。

開館時間 午前一〇時～午後五時
夏休み期間中は午後九時まで
休館日 十二月上旬～三月下旬の間
問合せ先 ☎0859・52・3698

あかいわ 赤岩神社

西伯郡岸本町上細見
J R岸本駅よりバス一〇分、上細見下車、徒歩一〇分

赤岩神社は、岸本町上細見集落北方百メートルの山腹にある赤色の大岩の下に鎮座する。『伯耆志』によるとこの岩が社名の由来といわれ、この大岩は、古代の磐座信仰に関わる

ものと考えられる。天津彦火瓊々杵命、大山祇命などを祭神とする。

その昔は町内吉定の字天津社（数多社とも）にあったが、いつの頃から現在地に移されたという。

江戸時代には赤岩権現といって信仰された。また、昔から大神山神社（現米子市尾高）の摂社であった（『鳥取県神社誌』）。明治元年（一八六八）に赤岩神社に改称された。

昭和十六年（一九四一）頃までは祭日（十月十五日）に、境内で宮相撲が開かれた。今は七月十五日に子ども花相撲が行なわれている。

ぜんぶく 善福寺

岸本町久古
J R岸本駅よりバス五分、久古下車

山号を松寿山（その昔は満滝山）といい、曹洞宗に属し本尊は聖観音である。かつては天台宗であったが、慶長年間（一五九六～一六一五）に米子総泉寺九世玄龍和尚を招き開山とし、同時に曹洞宗に宗旨を改めた。

宝永五年（一七〇八）に現在地に寺を移した。旧寺跡がどこであったかは不明である。寛政五年（一七九三）に伯耆一國を勧化して寄附を集め寺は修復された。そのとき寄進された大般若経二百軸が今も残っている。

る。

寺には、宝永五年（一七〇八）に鳥取藩絵師・狩野清信が描いた「涅槃図」や、寛政六年（一七九四）制作の「拾六善神画像」、文化十二年（一八一五）制作の「羅漢図」が所蔵されている。

また、境内にある観音堂は日野郡札所の第二十番札所になっている。

日吉津村

蚊屋島神社

日吉津村日吉津
JR米子駅よりバス約二〇分
富吉入口下車、徒歩一〇分

天照皇大神、高比売命などを祭神とする。ここには三野御厨があつたことから伊勢神宮を勧請した神社ともいわれ、近世には伊勢大神宮・天照皇大神などと呼ばれた。祭神高比売命が出雲系の神であるところから、かつて出雲系の神を祀る神社と伊勢神宮の勧請社が、この地で別々に祀られていたのを合祀してできたとの説もある。中世から近世にかけてここを治めた武将・藩主にも深く信奉されている。

明治元年（一八六八）に現社名に改められ、大正期、近郷の諸社を合祀した。

社家は、弓を射ること、雉肉を食べることが禁じられていた。これは祭神高比売命の夫・天稚彦が、天の神の使いである雉を弓で射落して殺し、自らもその矢に当たって死んだ（『日本書紀』）という神話によるといわれる。

また、氏子は鹿肉を食べることを

禁じられていた。それは鹿が害虫から社や人々を守っているという言い伝えに起因する。昔から、鹿がどこからともなく神社にやって来ては、参詣する前に海に入つて垢離をとつていた。参拝した鹿は宮司から供物をいただいで途中まで送られて帰つた。その甲斐あつてか、神社にも人にも害虫の害がなかつたと、『伯耆民談記』には記されている。春と秋に盛大に例祭が行われる。



淀江町

淀江港

西伯郡淀江町淀江

国道九号沿いの家並み一筋北に漁港がある。上淀廃寺や妻木晩田遺跡で著名な淀江町であるが、元は伯耆街道の宿場として、また隠岐の島との往来で重要な港町だった。現在も、今津地区から淀江地区にかけて、町中の旧道に街道の面影が残る。

江戸時代から藩米の廻送を受け持った港の一つであり、日本海沿岸の港との行き来も盛んであつた。とくに、大山の博労市（牛馬市）へ送る隠岐牛の陸揚げ港として知られていた。

文久三年（一八六三）には、松波徹翁父子の尽力により農兵百名が組織され、淀江台場が築かれた。砲三門に始まり、後に八門に増やされた。今も淀江港の東側、今津地区に台場跡が残り国の指定史跡である。公園となつている。

明治期以後、漁港としての役割が大きくなった。「夫婦船」といわれる小舟の漁が中心であり、そのため

防波堤が本格的に築かれたのは、昭和に入ってからである。昭和七年（一九三二）に始まる築堤は「沖一文字防波堤」と呼ばれ、その後、昭和五十二年（一九七七）まで続けられ、今の港の形が出来上がった。刺し網漁が主で、ブリ、カタクチイワシ、アジ、タイさらにメバルの水揚げが多い。

伯耆古代の丘公園

西伯郡淀江町福岡
JR淀江駅より徒歩一〇分

国内最大級の彩色仏教壁画が出土した上淀廃寺跡や、多くの古墳に囲まれた所に位置する公園。約九・八ヘクタールの敷地内には、推定二千年前といわれる大賀ハスなど約四十種類の古代ハスが美しく咲きそろう。「古代ハスの園」をはじめ、火おこしや土器、埴輪、土笛づくりが体験できる「古代体験の館」などがあり、古代人の生活や文化を知ることができ

る。また、古墳や竪穴住居、高床建物が復元され、高さ一五メートルの高床建物からは日本海や淀江平野が一望できる。

開園時間 午前九時三〇分～午後五時

入園は午後四時三〇分まで

休園日 第二・四水曜日（祝日の場合はその翌日）

問合せ先 ☎ 08559・56・6817

物産館
西伯郡淀江町福岡
JR淀江駅から徒歩十五分

「白鳳の里」は、平成七年（一九九五）四月に開設された。名水百選にも選ばれた「天の真名井」を用いて作られた豆腐や特産物となったどんぐりを用いた製品などを販売を行う物産館とこれらの食材を用いた食事処からなる「どんぐり館」がある。周辺には妻木晩田遺跡などもあり、弥生の里にふさわしく、古代米（黒米）を用いた「古代食」と呼ばれる珍しい料理も供されている。また、平成十二年（二〇〇〇）八月には、アルカリ性単純泉の温泉「ゆめ温泉」が併設された。

開館時間

どんぐり館：午前一〇時～午後六時

ゆめ温泉：午前九時～午後一〇時

入館は午後九時まで

休館日 どんぐり館 無休

ゆめ温泉 第四水曜日（祝日）

の場合はその翌日）

問合せ先 ☎ 08559・56・6798

ゆめ温泉 ☎ 08559・56・6801

史跡
西伯郡淀江町福岡
JR淀江駅より徒歩二〇分

「向山丘陵」とよばれる小高い丘と、それに接する丘陵にある古墳群。ここには、前方後円墳九、円墳四、方墳二のほか計十七基の古墳があり、山陰一の古墳密集地となっている。これらの古墳は、五世紀後半から六世紀後半に至る百年という短期間に築かれた首長墓（有力者の墓）である。五世紀代に中型の古墳が築造されていたが、六世紀代には大型化している。それは、小首長から、一躍郡領域程度の地域を統括する首長へと発展したことを示している。

「岩屋古墳」が昭和七年（一九三二）に国の史跡として指定され、「石馬」が昭和十年（一九三五）に国の重要美術品、ついで昭和三十四年（一九五九）には重要文化財に指定された。近年の調査、研究によって向山古墳群全体（向山古墳群、瓶山古墳群、石馬谷古墳）をまとめて、「向山古墳群」として平成十一年（一九九九）に国の史跡に指定された。

岩屋古墳（向山一号墳）

古墳群の最も北に位置する。六世紀の終わりごろに築かれた全長五二メートルの前方後円墳。後円部南側に切石造りの横穴式石室が開いており、外から内部を見ることができ。石棺式石室といわれる石室の内部は、天井と三方向の壁面が、それぞれ一枚の板石で造られ、赤色顔料が塗ってあった。

長者ヶ平古墳（向山五号墳）

古墳群の最も南に位置し、六世紀の中頃に作られた全長四八メートルの前方後円墳。後円部東側には、全長約一〇メートルの県内最大の横穴式石室が開口している。石室は岩屋古墳のような切石造りではなく、多数の石を組み合わせてある。この石室の東側にかつて箱式石棺があり、中から金銅製の冠、装飾付太刀、須恵器、鉄鏃などの副葬品が出土した。これらは大陸との交流をうかがわせる貴重な資料で、現在、東京大学の資料館に収蔵され公開されている。

石馬谷古墳

向山丘陵から道路を隔てた小枝山丘麓に位置し、小枝山五号墳とも呼ばれる。全長約六一メートルの前方

後円墳。墳丘は二段になっており、墳丘全体に石が敷き詰められていた。六世紀の中頃に築かれたと考えられる。有名な「石馬」は、この古墳に立てられていたという。

石馬

角閃石安山岩を彫って作られた体長約一五〇センチ、高さ約九〇センチの石製の馬。前足を欠いているが、馬の特徴をよくとらえており、手綱や鞍などの馬具も細かく表現されている優品である。石馬は北部九州には数例あるが、本州では唯一の出土品である。淀江町立歴史民俗資料館に常設展示されている。



淀江町歴史 民俗資料館

西伯郡淀江町福岡
JR 淀江駅より徒歩二〇分

淀江町歴史民俗資料館は、上淀廃寺や妻木晩田遺跡など豊富な遺跡に囲まれた所に、昭和六〇年（一九八五）九月に開館した。国指定の重要文化財「石馬」や上淀廃寺から出土した白鳳時代の日本最古の壁画などが展示されている。また、角田遺跡から出土した弥生時代の壺形土器には絵画が線刻されており、佐賀県の吉野ヶ里遺跡の物見櫓復元のものになった。当時のくらしや大陸との交流を追うかがわせる貴重な資料が、時代を追いつながりわかりやすく展示されている。

開館時間 午前九時～午後五時（入館は午後四時三〇分まで）

休館日 水曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始

問合せ先 ☎0859・56・3316

上淀廃寺跡

西伯郡淀江町福岡
JR 淀江駅より徒歩二〇分

白鳳時代の寺院跡。平成三年（一九九一）の発掘調査によって、彩色壁画が発見され一躍全国的な注目を浴びた。

この寺院が創建されたのは、「癸

未年」という文字を刻んだ瓦が出土したこと、白鳳時代（六八三年）天武十二年（頃）と考えられている。伽藍配置は、西に金堂、東に南北三塔を配する、他に例のないものである。北塔は基壇が確認できず、計画だけで実際には建てなかつた可能性もある。中塔の心礎を根石の位置へ戻すと、三塔の心礎が一直線に等間隔で並ぶことから、計画があつたと考えられる。このように三塔を建立する例は奈良時代以前の国内には例がなく、南北に並ぶ例は朝鮮半島にもない。講堂跡は確認されなかつたが、残っている礎石の位置から金堂の南西に立地していたと推定される。中心となる金堂・中塔・南塔の基壇は二重に作られ、瓦積の周囲には石列が築かれている。このような方法は、三国時代（新羅・高句麗・百済）にも見られ、寺の建築に百済の影響を受けていることがわかる。この中心伽藍は南側が回廊、東側が築地によって区画され中門跡も発見されている。

また金堂周辺を中心に、寺院壁画片が五千三百九十四点など出土した。壁画片には、「菩薩」や「天衣」「神将」「遠景樹木」などが描かれて



おり、彩色が施されていた。国内で白鳳期の寺院壁画は唯一、法隆寺金堂壁画（火災で焼失し現存しない）が知られているのみで、考古学、美術史において極めて重要な発見となつた。

現在、壁画は淀江町立歴史民俗資料館に展示されている。上淀廃寺跡は平成八年三月、国の史跡に指定されている。

八朔祭

西伯郡淀江町福岡

八朔とは八月朔日のことで、農村では田の水を落とす、案山子を作つて立てる、この日から昼寝がなくなつて夜なべが始まるなど、農繁期の

始まりであった。

儀礼的なものとして、滝の祭り、鳥追いや虫送り、綱引きや相撲、早稲の初穂や粟もちや桃の実を神に供えることなどが行われる。鳥追いや虫送りは、稲が無事に成熟することを祈る儀礼であり、綱引きや相撲は、作物の豊凶を占うものと考えられる。初穂を供えるのは実りを神に感謝する行為であり、粟もちは節句に作られるお供えもち、桃はその形から豊かさの象徴であるとか、神話にあるように邪気を払う力があると考えられる。豊作を祈つたり、食べるこつとによって力を得ようとする行為と考えられる。

淀江町福岡では、毎年の八朔に、集落の荒神さんに収穫を感謝する儀礼がある。長さ五〇メートル以上の藁蛇を作り、荒神の周りを回した後、蛇の胴体にあたる部分を使って集落内の小路で綱引きをする。また、亥の年には遷宮とどぶろくの奉納が行なわれる。

史跡 妻木晩田遺跡

西伯郡淀江・大山町
JR 淀江駅から車で五分

妻木晩田遺跡は、西伯郡大山町と淀江町にまたがる。弥生時代の中期

末から古墳時代まで継続した、総面積約一五二ヘクタールの大規模な遺跡である。

この遺跡は七地区からなり、各地区はそれぞれ特色がある。

居住区域とされるのは、「松尾頭地区」「妻木山地区」「妻木新山地区」、首長墓区域は、大・中・小のさまざまな四隅突出型墳丘墓が出土して注目された「洞ノ原地区」「仙谷地区」「松尾頭地区」、環壕区域である「洞ノ原地区」は丘陵先端部にある。調査によって確認された遺構の総数は、縄文時代の落とし穴七百十二、弥生時代各期の竪穴住居跡三百八十四棟、同じく掘立柱建物跡五百二棟、



貯蔵穴四百四十一、弥生時代後期の墳丘墓三十二基、四世紀〜七世紀の古墳三十二基である。

これらは、弥生時代後期を中心に造られ、中期まで丘陵下に居を構えていた弥生人が、まとまって丘陵上に、「クニ」ともいえる大規模な集落を形成したのである。ちなみに、同じ弥生時代の大集落「吉野ヶ里遺跡」（佐賀県所在）と比べると、面積は約一・三倍で、国内最大規模の弥生遺跡である。

そして、まるで「都市計画」のように、「墳丘墓」「首長の居住区域」「防護施設（環壕）」などの各区域がそれぞれの役割をもち、かつ有機的につながって一つの拠点集落クニを形成していた。この標高一〇〇メートル前後の高地に、弥生時代後期の約三百年間にわたって、拠点集落（クニ）が存続していたことは大変重要である。山陰のこの時期の歴史、ひいては全国的な社会のあり方を知る上で貴重な存在であるといえよう。

また、この遺跡から出土した遺物は、各種土器、石包丁、石斧、石錘などの石器、鉄鏃、鉄斧、ヤリガンナ、鋤先、鍬の刃、紡錘車など約二百点の鉄器が出土した。とくに鉄器

が大量に出土している点では、同じ弥生時代の「青谷上寺地遺跡」出土品とともに多くの注目を集めている。

この遺跡周辺は、鳥取県のリゾート開発計画の中で、「ゴルフ場」の対象に選ばれていた。開発に先立つ発掘調査によって大規模な遺跡であることが判明し、市民を巻き込んだ保存運動が起こり、遺跡の保存が開発かで、全国的な注目を浴びた。最終的に保存が決まり、平成十一年（一九九九）に国の史跡に指定された。現在、遺跡には展示室や体験学習室、広場、復元建物（住居、倉庫）などが整備されている。

伝説

淀江町と大山町との境にある孝霊（高麗）山には、大山との山比べの伝説がある。

昔、韓の国の神様が日本の山と山比べをしようと韓山を船に乗せてやってきたところ、大山の姿が見えた。神様は大山にはかなわないと思い、山を置いて帰ってしまった。

この山は韓の国にちなみ高麗山と呼ばれた。

天の真名井

西伯郡淀江町高井谷
JR 淀江駅より車で二〇分

大山の北西麓にある湧水。昭和六十一年（一九八六）、環境庁により国の「名水百選」として選定された。新生代鮮新世の安山岩の亀裂から湧出し、古来より清浄で水質も優れていることから、この名が付けられた。

代表的な大山山麓の湧水として、多くの人々に知られている。幅一五メートル、奥行き五メートルの湧出池は、古くから地域の人に利用され、大切に管理されている。湧水量は一日に二、五〇〇立方メートルである。



本宮の泉

西伯郡淀江町本宮
JR 米子駅より大山寺行バス二〇分、徒歩一〇分

天の真名井と同様に、大山北西麓の新生代鮮新世の安山岩に生じた亀

裂から湧水する。湧水量は一日に三〇、〇〇〇立方メートルで、水質も優れ、古くから生活用水、灌漑用水として利用されてきた。

昭和六十年（一九八五）六月、「因伯の名水」として県の指定を受けた。水源一帯は、珍しい亜熱帯性のクリハラン等が群生し、ニジマスやアマゴの養殖に利用されている。

物産 どんぐり村

西伯郡淀江町本宮
J R 淀江駅より車で十五分

山小屋風の外観の建物には、レストランと特産物販売所が設置されている。また、すぐそばに「因伯の名水」の一つと知られる「本宮の泉」がある。レストランでは、淀江町の特産物であるどんぐりを使ったうどんやそばなどが味わえる。

また、午前一〇時から午後四時まで、地元の取れたて野菜や果物などが並ぶ「ときめき市」が開かれ、利用者は町内外を問わず多い。

開館時間 午前一〇時～午後四時

休館日 木曜日

問合せ先 ☎ 0859・27・6098

小波城跡

西伯郡淀江町小波
J R 淀江駅より車で十五分

三輪神社の南方にあつた城跡と伝えられる。小波城は、鎌倉時代に幕府の西伯耆の行政上の重要な位置を占めた城であつた。壺瓶山の南につづく丘陵三輪山の西にあり、字名「大名屋敷」の地であつたと伝えられている。

小波城の名は、鎌倉末期の元弘三年（一一三三）、隠岐国を脱出した後醍醐天皇を奉じて、名和長年が船上で挙兵したときの古戦場として知られている。

幕府の將佐々木清高は大軍をもつて船上山を攻めたが敗れ、ここ小波城へ退いた。しかし、追撃してきた名和勢のために城を焼打ちにされ、近くの港から船で脱出したといわれている。

三輪神社の横には、周辺から出土したその時代の様式を伝える古式の五輪塔・宝篋印塔等が多く保存されている。訪れる人に、鎌倉時代の歴史を動かした激動の出来事を語りかけてくる。

伝説

昔、淀江山にオサンという狐がいた。そして、上万（大山町）にはオサイ、戸上（米子市）には藤内という狐がいて当地三狐として有名だつた。

ある時オサン狐が人に憑いて「オサイも藤内も祠に祀られていない。自分も祠に祀ってもらいたい」と言つた。そこで、精明寺が管理する津野橋畔に小祠を造り祀つた。後にまたお告げがあり、精明寺の裏に一尺四方の祠を建てて祀つたという。

日吉神社

西伯郡淀江町西原
J R 淀江駅より車で五分

日吉神社は、大己貴命・天乃佐奈咩神など十三神を祭神とする古社である。創建年代は不明である。

『日本三代実録』の貞観十六年（八七四）の条に、「伯耆国天乃佐奈咩神正六位上から従五位下に進階」と記載されているのは当社のことと思われ、かつては天乃佐奈咩神の神社であつたと考えられる。その後、宇多河庄の鎮守として山王権現を勧

請したといわれる。戦国期、神社は兵火で焼失した。しかし、この神社の縁起には、その頃、京からここに来ていた足利義政の庶子、谷若狭守成安によつて再建されたと記されている。藩政期には、藩主・池田光政が参拝し、多くの物を奉納したと伝えられる。現在の精明寺が、かつてこの神の神宮寺であつたといわれる。

明治五年（一八七二）、現社名に改称された。

祭日（五月三日）には山車・神輿を中心に氏子二百余人が参加する御幸行列「よいとまかせ」が行われる。この行列道具が頭に触れた氏子は長命になるとか、賢くなるといわれており、ご利益にあずかるうと行列に頭をさし出す者が絶えない。伝承ではこの御幸は寛永年間（一六二四～一六四四）から始まつたといわれ、町の無形民俗文化財に指定されている。

神社境内にある佐奈咩池の水で心汚れた者が口をすすぐと、たちまち濁水に変わるといわれる。また、冬、この池に張る氷の状態をみて、その年の気候や五穀の豊凶を占つたといわれる。

三輪神社

西伯郡淀江町小波
JR 淀江駅より車で二〇分

大物主命ほか二神を祭神とし、崇神天皇の時に国家鎮護の神として、大和国大神神社（現奈良県桜井市）から勧請したと伝承されている。かつては三輪山東方にあり、広さは東西八町、南北六町余りといわれる。東を「神社のある宮広峰」、中を「大鳥居のある鳥居峰」、西を「薬師寺と称する神宮寺のある堂の峰」と称したという。貞観十五年（八七三）に、正六位上から従五位下に進階した「伯耆国三輪神」（『日本三代実録』）は当社のことと想像される。

社殿は、元弘三年（一一三三）の小波城落城のときと大永四年（一一五二）の五月崩れの時などに焼かれ、その度に衰退していったが、近世に入り藩主・池田氏より社領二石六斗を安堵された。正保二年（一六四五）に現在地に遷座、新築され、地元福田庄大社（後には中間庄大社）と称せられた。

当社では古来から、春祭りに狼神事、秋祭りに大注連神事、御酒献上神事が継承されているといわれる。

淀江さんこ節

さんこ節は、安来節の原形ともいわれ、鳥取、淀江、境港など県内の港町に点在する。由来については、境港に住んでいた「さん子」という女性が船乗りから習った佐渡おけさを改良して作ったとか、江戸で流行った「三鼓節」が出雲地方に移入して「出雲節」となり、以後山陰地方に広まったという説がある。

淀江さんこ節には、踊り手が左官に扮し、さんこ節と三味線の伴奏に合わせて土練りと壁付けの所作を演じるユーモラスな仕草踊りもある。昭和五十三年（一九七八）、町の無形民俗文化財に指定されている。

サイノカミ信仰

サイノカミ（道祖神）信仰は、因幡・伯耆両国とも存在するが、因幡では境界の神、旅の安全を祈る神であるのに対し、伯耆地方、特に大山の北西方向の裾野では、縁結びの神としての信仰が顕著である。

御神体は、因幡地方で樹木や祠、五輪塔などであるのに対し、西伯耆

地方では、集落ごとに石造物がほぼ存在する。いずれも江戸時代後半から明治・大正期に作られたもので、「道祖神」・「妻神」などと刻字されたものから、男女二柱の神像が彫られているものまで多数見られる。淀江町亀甲や大山町末吉には、十基近くのサイノカミ像があるが、これはかつて青年団で互いに盗み合う習慣があつたためである。

現在でも「サイノカミさん」と呼ばれる祭が、十二月十五日に、中山町、名和町、大山町、淀江町で行われる。御神体の注連縄を掛け替え、長草鞋や大足半、藁馬を供えるのは各地域共通であるが、中山町では、男女の性器を象つた藁細工を供えるという特色がある。

松原岩五郎

松原岩五郎は、日本最初のルポルタージュ作家である。

慶応二年（一八六六）、現在の西伯郡淀江町に生まれた。十五歳のとき大阪へ出、二年後に上京した。いろいろな職業につきながら、夜塾で勉強した。

明治二十五年（一八九二）、徳富

蘇峰の国民新聞社に入社し、下層社会で生きる人たちの姿を克明に記した探訪記事を連載した。翌年『最暗黒之東京』を出版、明治三十年（一八九七）には足尾銅山探訪記などをふくむ『社会百方面』を出版し日本の暗部を探った。昭和十年（一九三五）、六十九歳で亡くなった。

東京都文京区千駄木の養源寺に墓がある。

なお、北海道の最高峰「大雪山」の名付け親としても知られる。この名前は大山に姿が似ていたからといわれる。

大山町

高杉神社

西伯郡大山町宮内
JR大山口駅よりバス二〇分 坊領
下車、徒歩二〇分

高杉神社の うわなり神事

西伯郡大山町宮内
JR大山口駅よりバス二〇分
坊領下車、徒歩二〇分

景行天皇（大帯孫神）、孝霊天皇、などを祭神とする。『大山寺縁起』に記載された大山金門の笠木を提供した神社であるといわれる古社である。当社には、平安時代作と思われる古神像が二躯所蔵されている。

当神社では、本媛之命、松媛之命、千代媛命の三女神も祭神としている。これらの女神に係る「うわなり神事」という奇祭が伝えられている。毎年旧暦九月十五日の夜半に行なわれる。

高杉神社に伝えられる奇祭である。神社祭礼は毎年旧暦九月十五日に行なわれるが「うわなり神事」が行われるのはうるう年の旧暦九月十五日の夜半である。月のはじめに氏子の中から三人の霊代（三女神の霊がのりうつるもので、打神ともい）が選ばれる。

祭礼の前夜は社務所に泊り、心身を清め、祭礼当日の朝は所子海岸で身を清める。祭礼が夕刻から始まり、うわなり神事は夜半から始まる。まず霊代が、白装束で神前に並び、神官が祝詞を奉上し秘法を修する。そうしているうちにしだいに異

伝説

第七代孝霊天皇の御代に、さる高貴な方がこの地に滞在された。地方ではまれなことなので、この土地で美しい松姫、千代姫の二人を近くに侍らせた。しかし、都から正妻である細姫（こしよひめ）がやって来たため、三人の女性の間に嫉妬による闘いが始まった。

遂に松姫、千代姫は恨をのんで亡くなった。その後、雄略天皇の御代、近郷に悪いことが続き、神のお告げにより、正妻に対する二人の姫のたたりであると知れた。そこで一の宮（本殿・細姫）、二の宮（中殿・松姫命）、三の宮（末殿・千代姫命）の三殿を建立して祀ることになった。

常心理状態に入り霊代にうつった三女神は、お互に嫉妬の情にかきたてられ争い始める。そのままにしておくと死ぬまで闘うので、左右に護丁が付き、時々争いを制している。

一度近くの小川で、みそぎをし神苑の所定の位置に帰り、「投げ盃」の式が行われる。社殿に供えた酒をいただいで順次に渡す。渡すときには右足の指に挟んで渡す。

これが終了すると「打杖渡し」の儀がある。ススキの束で三人がそれぞれ地面を突きたく行事である。終了後、神主は古例の賀詞を述べる。

これよりしばらく三神が、日頃抑えていた嫉妬の情を発散させるように打合いをするが、つねに左右から抑えて自由にさせないようにする。そうしないと本当に、つかみあつて怪我をする（やがて神主が「本殿の勝」と宣して、本妻に花をもたせ、後妻の負けとしてこの場の終末をつける。うわなりとは後妻のことである。

やがて三霊代は神主の神事により神懸状態から脱する。昔は、この霊代は女性が仕えたという。なお、この神事には、帽子をかぶったものを非常に嫌う。

吉宮神社

西伯郡大山町大字上方
JR大山口駅よりバス五分、一ノ宮
神社前下車

天忍穂耳命・豊秋津師姫命・瓊々杵命をはじめその他合併社の十三神を祭神とする。創立年代は不明であるが、西伯郡の旧社で、古くから一宮大明神と崇敬の厚い大社である。

『伯耆民談記』『朝妻縁起』によると、昔、妻木の長者老夫婦には子供がなく、当社に毎日お祈りしたところ、祈願が叶い、玉のような女子に恵まれたという。

本殿の右には老夫婦が休息したという平たい石が二個ならび、安産石とよばれ縁起のよい石とされている。古くは遠近からの参拝者があつて、信仰を集めていた。西部地方に多い塞の神も祀られ、二体は線彫り、二体は浮刻の貴重な石造物がある。

門脇家住宅

西伯郡大山町所子
JR大山口駅より車で五分

大山の裾野が日本海に緩く広がり、海の内側に島根半島や弓ヶ浜半島を見渡せるところに所子の家々は散在している。

門脇家はこの村の中でもまとまった集落をなしている地区の中心部に

屋敷を構えている。東側の道路に沿って透塀が延び、中ほどに薬医門が設けられている。門脇家は、「門脇殿」ともいわれた中納言・平教盛の末裔と伝えられ、古くからこの地方の名門で江戸時代には代々大庄屋を勤めた家柄である。

外観は江戸中期の尾崎家や河本家と似ているが、平面構成や構造形式は江戸末期の高田家と同じである。

主屋の間取りは伯耆地方独特のもので「整型九間取」と称され、その基本形式を今に伝える遺構である。客座敷は鍵型に配置されているが、奥の客座敷は呼び名そのままに「カギノマ」と呼称され、表側の次の間を「オクノマ」と称している。小屋組は梁を四段に重ね、最上段の上屋梁は扱首さすを受けるとともに中央で棟束を支えているが、さす組とうだち造を兼ね備えた「半小屋造」になっている。主屋の北東、道路に面して木屋・水車小屋・大工小屋・供部屋を備えた長屋があり、南東には検査場が道路に面して建ち、主屋の奥の西側には米蔵・新蔵などの土蔵が立ち並ぶ。なお、門脇家住宅前の道沿いには、南に接して南門脇家、東側に道路を挟んで東門脇家がある。こ

これらの屋敷構えは門脇家同様で、長屋門を備わっており、そのたたずまいは周辺の民家を取り込んで、まとまりのある集落景観となっている。

当家に所蔵されている明和六年（一七六九）の文書「居宅棟上一式」は建築年が明らかになるだけでなく、棟上げの時の行事や普請の時の「ゆい」の状況も細かく記載されており貴重である。

昭和四十九（一九七四）年二月、国の重要文化財に指定された。（平成五年八月十七日追加指定）



上 万原

西伯郡大山町上万
JR大山口より徒歩三〇分

西伯郡大山町の日本海沿岸に、

「上万」の地名がある。ここには古社吉宮神社があり、境内には「すくね塚」と呼ばれる古代信仰に関わる聖地がある。

ここから南東の孝霊山を仰ぎ見ると、不思議なことに山の姿全体が美しい「山」の文字を描き、大山はすっぽりと後方に隠れてしまう。

また、ここ上万には「東上万原」「西上万原」の小字名があり、この神社周辺の広い原野が「上万原」と呼ばれたであろうことが推察される。さらに、この「上万原」については、一説によると『雲陽軍実記』などの諸本で「浄満原」と記される場所と推定される。

戦国末期の尼子あまご回復戦の際に尼子勢平野加兵衛の三百余騎が、毛利方の尾高城主・杉原盛重の一千余騎に攻められ、大将・平野加兵衛は討たれ、尼子勢は敗退した。元龜二年（一五七二）二月の古戦場であると伝えられている。

荒岩亀之助

荒岩亀之助は、明治の末期、名力士としてその名をうたわれた。明治五年（一八七二）、現在の鳥取県西

伯郡大山町に生まれた。幼い頃から木こりであった父に連れられて山に入り、体重の倍もある材木を背負って山道を歩いていったという。

相撲取りをめざし、十歳のとき、大阪で稽古に励んだ。やがて上京し、鳥取市湖山出身の尾車文五郎おんぐるまぶんごろうに弟子入りした。明治三十年（一八九七）の春場所はるばに西前頭の八枚目やちで入幕、横綱・小錦をけたぐりけたぐりでやぶり評判になった。

明治三十八年（一九〇五）には西の大関となり、同四十二年（一九〇九）に引退するまで大関の地位を保った。身長一・六九メートル、体重九三キログラムと力士としてはあまり体格は大きくなかったが、幼いころに鍛えた足腰や腕に支えられた。大正九年（一九二〇）、五十歳で亡くなった。

昭和三十三年（一九五八）五月、大山寺だいせんじ、博労座はくろうざに顕彰碑が建てられた。碑文は時津風定次（第三十五代横綱・双葉山）が書いた。

名和町

大雀海岸

西伯郡名和町直長
JR名和駅より車で五分

日本海に面し、礫の密集した礫浜である。大山の阿弥陀川水系が作る河口扇状地の礫質堆積物や火山性礫岩が波浪の影響で遊離、淘汰されて、一〇センチ〜二〇センチの卵状ないしは楕円状の円礫だけとなった海岸である。大雀から小雀間の約五〇〇メートルの海岸一帯には、細粒の砂や小礫をほとんど含まないで、中礫のみが集積している。礫は波浪によってゴロゴロと音を発しながら揺れ動く。

岩質は大部分が大山系の火山岩で、黒雲母角閃石安山岩と両輝石安山岩である。

扁平なこれらの円礫を大小二つ重ねて石こけしとして利用するため採集されたこともある。この付近は眺望がよく、美保湾、島根半島、そして好天時には隠岐島も見る事ができる。

御来屋御着船所

山陰線名和駅・御来屋駅より徒歩約十五分

安政五年（一八五八）に、名和長年を祀った氏殿権現（現在名和神社）のそばに建碑の音が再燃した。

藩では大窪友尚に建立を命じた。大窪は森尚謙が選んだ碑文によって、正壇薫に建立を命じ、薫は御来屋にやってきて碑を完成した。

また、正壇薫は、滞在中に戸屋に残る言い伝えにより「元弘帝御着船之碑」も建立している。

名和長年

元弘の乱に敗れた後醍醐天皇が、鎌倉幕府によって日本海の孤島隠岐島へ移されたことは歴史上有名な出来事である。

元弘三年（一一三三）天皇は自分に味方するものたちが諸国で立ち上がったのをきいて隠岐島を脱出し、伯耆（鳥取県西部）へ遷幸した。このとき天皇を守護して船上山に立て籠もったのが名和庄（御来屋付近一帯）の豪族・名和長年である。『新葉集』に「忘れめやよるべも波のあら磯をみ船の上にとめし心は」とあ

るように、天皇は長年の忠誠を称えている。

名和氏は承久の変に宮方として働いた村上行秋の曾孫であるといわれ、その郷国但馬（兵庫県北部）から元弘三年二月以来、幕府方の佐々木清高らと戦い、これに勝って近国の武士たちの協力を得て伯耆一帯を平定した。

のち建武の中興がなると長年は伯耆守となり、中央政府の重職に就いた。しかし、天皇政治も長く続かず建武二年（一一三五）には足利尊氏によって京都を占領され、天皇は吉野（奈良県南部）に逃れて南朝をたてる悲運に見舞われた。長年は楠木正成・新田義貞等とともに天皇を守護して一度は尊氏を九州へ追い払ったが、尊氏が西国の大兵をひきつれ京都を目指して進軍すると、楠木正成は兵庫湊川の戦いに死に、義貞も敗れた。長年も京都で足利軍を防いだ。六月三〇日京都一条大宮で壮烈な戦死をとげた。

後醍醐天皇が京都から吉野に退去されると、名和長年の孫・顕興らの一族は征西將軍宮・懐良親王に従って九州へくだった。長年の弟で大山

寺の僧であった信濃坊源盛も行動をともしている。以来、名和一族は、九州で後醍醐天皇方として奮闘する菊池氏らに協力している。

長年は明治時代になると、従三位を追贈されその後従一位になり一族とともに名和神社にまつられた。

名和神社

西伯郡名和町御来屋
JR名和駅より徒歩五分

名和駅の上方に位置する。名和長年を祀り、長重など四十二人の一族も祭られている。

名和長年を祭った延宝五年（一六七七）十月、鳥取藩主・池田光仲は名和町に氏殿権現を祀る一社を建てた。

これは、明治十一年（一八七八）一月に別格官弊社となり、名和神社と改められた。明治十六年（一八八三）には、社殿が現在地に造営された。

ここは地名を長者原といい社殿の裏手からは焼米が発見されている。これは、長年が後醍醐天皇を擁護して船上山に立てこもった際に、倉庫を焼いたためであるという説があり、この地が倉跡と示す碑も建っている。

この社地は御来屋の南の高台に位置し、眺望がよく、日本海や隠岐島

を眼前に望む景勝地である。また、
県下屈指のサクラの名所でもある。

名和町には坪田に名和氏の邸跡と
伝える所があり、箕浦徳胤の筆によ
る名和神君の碑がある。近くに長年
の首塚と伝える三人五輪という五輪
塔もある。長綱寺は名和氏の菩提寺
であると言い伝えられている。長綱
寺に近い門前集落の田畑の中には古
い礎石群が残っている。また小学校
門前には天正二年（一九一三）の銘
のある真島氏逆修塔もあり一見の価
値がある。

名和氏については、門脇重綾の著
書が二冊あり、これらは文久二年
（一八六二）に完成した。名和氏一



族の事跡を明らかにし、公の忠誠を
表彰しようとしたものである。上巻
には名和長年が義兵を挙げた事跡、
下巻には系譜・繪旨感状・碑文等を
掲載する刊本もある。

長綱寺

西伯郡名和町名和
J R名和駅より徒歩二〇分

山号を万歳山という。『長綱寺縁
起』によると、元徳二年（一三三〇）
に名和長年が開いた寺で、本尊は長
年の念持仏であった阿弥陀三尊であ
るといわれる。

この寺はもとは万歳山の中腹にあ
り、天台宗に属し、長高庵といった。
しかし、足利高氏をはばかり「高」
を「綱」に改め、長年の父の名と同
じ「長綱」としたといわれる。
文明十一年（一四七九）に、退休
寺（中山町）山内の達恵道光和尚を
迎え、曹洞宗に改宗した。

周辺には名和氏屋敷跡、氏殿権現
の石などがあり、建武の中興で名を
挙げた名和長年ゆかりの地に位置す
る。また、裏山には名和氏一党の墓
と称する三百余の五輪塔がある。こ
れは元弘三年（一三三三）、長年が
天皇を奉じて船上山に登った後に、
敵に襲われた名和の館を死守して果

てた妻女たちの墳墓ともいわれてい
る（『王身世家文書』）。

富長城跡

西伯郡名和町富長
J R名和駅より車で五分

日本海に面した海岸に残る中世の
古城跡である。富長館跡とも呼ばれ
る。

城跡は、江戸前期の万治四年（一
六六一）に富長神社の境内となった。
国道九号からも土塁上に茂る巨木の
社叢を望むことができる。約一町四
方の土塁に囲まれた城跡は、北は日
本海に面して断崖をなし、三方は深
い堀と高い土塁に守られていた旧状
をしのばせる。昭和五十七年（一九
八二）五月、名和町の史跡に指定さ
れた。

この城跡には、東口に深い溪流の
堀があり、曲輪の西隅に海を見渡す
物見台の遺構が残されており、注目
される。鎌倉時代の文永・弘安には
二度にわたる蒙古襲来があり、海か
らの敵に備えた伯耆沿岸防衛の一城
であったと考えられる。

住雲寺のフジ

西伯郡名和町御古堂
J R名和駅より車で五分

住雲寺のフジは、穂の長さが二メ

ートル近くにもなり、通称六尺藤の
名で親しまれている。また、寺もふ
じ寺と呼ばれる。

樹齢は五十年で、山野に自生する
ノダフジの園芸品種で、親木は天然
記念物に指定されている埼玉県春日
部市の牛島の古藤という。

境内いっぱいには藤棚が張りめぐら
され、毎年五月上旬から中旬にかけ、
甘い薫りとともに、平均一・五
メートルの長さの優雅な花房をつ
け、近郷からの見物客でにぎわう。
このフジは、酒を好み、酒をこし
たあとに残る酒糟を根近くに与える
ことよって、より幻想的な花をつ
けるといわれている。



名和滝護摩供養

西伯郡名和町加茂

旧奈和地区には不動滝と呼ばれる滝があり、不動明王を祀る堂宇がある。この堂は明治二十九年（一八九六）に当地に疫病が流行ったときに勧請されたものといわれ、地元の大峯行者に管理されており、八月十八日（戦前は七夕）に、無病息災を祈願する夏の祭礼として火渡護摩が行われていた。

祭礼では、堂の前に注連縄が張られ、東西南北と正面に五大明王を勧請する。この神域には杉の葉と松の割木が敷き詰めてあり、行者が短刀を使って加持祈祷し点火する。行者はその火の上を歩いて渡り、その後、参拝者・信者も渡る。

住吉神社祭

西伯郡名和町御来屋

船曳き

JR名和・御来屋駅より徒歩一〇分

住吉神社は底筒之男命、中筒之男命などを祀る。この神社には「お船曳きの神事」という祭礼行列が、隔年の十一月三日に行われる。

「お船」は長さ三メートルあまりの千石船の模型で、これを前の台車に一艘、後ろの台車に二艘載せて引

つ張るものである。「お船」にはそれぞれ御神紋三つ巴を描いた白帆が立っており、前の台車の先端には神を一本立て、そこに五色の御幣、麻績、宝剣、鏡などをぶら下げる。

また、この神のそばに男が一人立ち「お船曳き」の口説を歌う。この船曳きは、朝住吉神社を出て午後帰ってくる。その途中の要所では、大幣を持った男たちが歌に合わせて踊りを披露する。

オオサンショウウオ

オオサンショウウオは溪流にすむ動物である。動物学上からはイモリと同じ両生類で一名ハンザギ、またはハンザケと呼ぶ。全体は魚形であるが、四肢があり泳ぐことも歩くこともできる。体の前の方は扁平で尾は縦になっている。色は褐色で黒斑のあるものもある。サンショウウオは前肢は四指、後肢は五指あるが指先は丸く爪はない。体には疣状突起が多数あつて、外敵に対して山椒臭の白汁を放出し、また粘液を出して防ぐ。

口は一般両生類と同様にとても大きく開く。顎の前方周辺には細菌が

並んでいて、上顎には両鼻孔のあいだに外の歯の列と並行した歯が二重に並んでいる。噛み付かれたら雷が鳴らないと離さないという言い伝えがある。

水中から先端の鼻孔をちよつと水面に出して呼吸する。息が長く二十分から数時間におよび、特に冬季には長く呼吸しない。鼻孔を外に出してときどき「ギエ、ギエ」と鳴く。産卵は一般の両生類と異なり、八月下旬から九月である。雄は産卵の一、二カ月前に溪流を上って居屋と称する安全な産卵場所をつくる。産卵期になると雌はこの居屋をさがし求めて雄のあとを追う。卵は大きく直径が五ミリで、寒天質に包まれている。外方も入れると一センチ半もある。これらは紐状の寒天質でつながり、長さは一〇メートルにも及ぶ。一つに五百個くらいの卵がついている。卵は二十日余で孵化し、外鰓時代が三年、体調が五十五センチになると親になる。サワガニやカエル、魚、昆虫など生きた物なら何でも食べる。体長六〇センチ内外のものが多く、ときに一メートルを超えるものもある。寿命は長く、百年以上に及ぶものもいる。

岡山県真庭郡湯原温泉にはハンザキ大明神があり、西伯郡名和町にはハンザキ屋の屋号のある家がある。これはみな大きなサンショウウオから出たものである。

この類のもので現世に生き残っているのは、アメリカ「オオサンショウウオ」と日本のオオサンショウウオだけである。日本では南は九州の大分県馬館川上流から中国地方、近畿地方、岐阜県和良川上流までに限られ、四国には産しない。鳥取県では大山・蒜山の南北で南は岡山県旭川上流、北はこれを分水嶺とする日野川、天神川上流である。西から日野川の支流西伯郡法勝寺川、西伯町八金・東上・会見町松谷川・日野郡溝口町田代川・懸橋川・江府町俣野川、生山付近では上菅・板井原の小原川、日南町松本・神福・飛時原の井原川、新屋の野租川、さらに東に大山から流れる阿弥陀川また西伯郡名和川・東谷川付近、天神川では関金町の矢送川の上流、竹田川上流穴鴨の余川、大体三〇メートル以上の急流で花崗岩地帯が多いが名和川のような安山岩の地帯もまれにある。鳥取県はこのように世界に比類のないオオサンショウウオの生息地

である。

昭和二十七年（一九五二）三月、特別天然記念物に指定された。また東長田オオサンショウウオ生息地は昭和二十六年（一九五一）六月、天然記念物に指定されたが、自然環境破壊のため生息しなくなったので昭和五十一年（一九七六）、指定解除された。

茶畑山道遺跡

西伯郡名和町茶畑
JR名和駅より車で五分

水田下にある弥生時代の集落遺跡。平成九年（一九九七）のほ場整備にもなつて遺跡の存在が明らかとなり、平成九年から同十年（一九九八）まで本調査が行われた。

遺跡の立地する丘陵の標高は五〇〜五五メートルで、微高地である。遺物から、この地に人々が生活したのは、縄文時代早期から、平安時代に及ぶと考えられるが、中心となるのは弥生時代中期である。掘立柱建物や、周囲より一段高い所に祭殿と推定される「大型高床建物」などがまつまつて確認された。当時の首長の居館や祭殿の実態を知る貴重な遺跡である。

しかし、この遺跡は調査終了後、水田の下に眠っている。

夕陽の丘神田

西伯郡名和町加茂
JR御来屋駅より車で十五分

大山の麓の丘陵地帯に位置する。日本海や島根半島を望む。神田はリングの産地としても知られ、リング狩りを楽しめるリング園、遊技施設、宿泊施設などもある。

峰地光重

西伯郡名和町加茂
JR御来屋駅より車で十五分

峰地光重は、「自分の経験を見つめることによつて作文を書く」という生活綴り方運動を呼びかけ、実践した教育者である。

明治二十三年（一八九〇）、汗入郡光徳村豊成（現在の西伯郡名和町）に生まれた。鳥取県師範学校を卒業し、西伯郡内の小学校を歴任した。大正九年（一九二〇）、学級文集『芽ばえ』をつくり綴り方教育を始めた。大正十一年（一九二二）『文化中心綴り方新教授法』を出版し、この中で「綴り方は児童の人生科」であるとして生活指導が大切であることを説いている。

文部省、鳥取県教育委員会から教育功労賞、広島大学教育学部からペ

スタロッチ賞を贈られた。昭和四十三年（一九六八）に七十八歳で死去。

中山町

中山町八マナス 自生南限地帯

西伯郡中山町松河原
JR下市駅より車で六分



下市川河口の両岸に生育する八マナスは南限であるばかりか、海岸帯に堆積した転石のなかに生えている点で、生態学的にも地史的にも極めて珍しい。地質時代末期の氷河時代には、砂浜だった所に北方寒地植物が南下し分布した。その後、大山から出た転石で六五センチ覆われたが、八マナスが強く残ったものと考えられる。

鳥取市白兔には既指定地がある。昭和四十年（一九六五）、県の天然記念物に指定された。

温泉
中山温泉ゆーゆー倶楽部NASPAL
西伯郡中山町赤坂 JR下市駅より車で約五分

ホールなどからなる生活想像館と温泉館からなる。中山温泉の泉質は、アルカリ性単純温泉で触った感じがツルツルすることから「美肌の湯」とも言われている。大浴槽のほか、水風呂、サウナが設けられている。

開館時間

午前一〇時三〇分～午後九時

休館日 月曜日（祝日の場合はその翌日）

問合せ先

☎0858・49・3330

中山神社

西伯郡中山町東積 JR山口駅より車で約七分

大己貴命ほか八神を祭神とする。神社が創られた年代はわからない。

近世までは大森大明神といわれ、多くの人々の信仰を集めた。昔は社域が広く、かつては県の天然記念物であった大犬槨（枯死）もあり、大森大明神の名にふさわしい社であった。しかし、水田開発によって神域は狭められた。

境内摂社に、伯耆の白兔伝説を伝える疱瘡除けの神・鷲神社があり、近世には厚い信仰を受けていた。願をかける時には当社の竹笠を借りて帰って、病人のお守りとし、無事治癒すればお礼に新しい笠を一つ添えて倍にして返したものとされる。

明治六年（一八七三）に束積神社と改称され、同三十八年（一九〇五）に中山神社となった。

退休寺

西伯郡中山町退休寺 山陰線下市駅より車で五分

曹洞宗に属す。寺伝によると正平九年（一三五四）、石井垣城主・笹津敦忠が、亡妻の供養のため、玄翁（源翁とも）和尚に開かせ、建立したといわれる。玄翁は、至徳三年（一二八六）、衆人に害をなしたという那須の殺生石を破摧済度した。その功により、後小松天皇の勅旨により国家鎮護の道場、勅願所となった。

慶長十二年（一六〇七）三月、野火のため全焼し、寛永十年（一六三三）、因伯国主・池田光仲によって再興された。

昭和十六年（一九四二）四月に、隣村部落の大火に類焼し、勅使門を除いて全焼し、古書宝物も全て灰と

なった。なお、後小松天皇下賜の「金龍山」という勅額が火を逃れ現在も保存されている。



逢坂八幡神社 御神幸行列

西伯郡中山町松河原 JR下市駅より車で五分

逢坂八幡神社は、誉田別尊などを祭神とする。貞観七年（八六五）年大分県の宇佐八幡宮を勧請し、逢坂八幡宮としたのがはじまりである。

逢坂八幡神社の例祭日は、五月四日、国民の休日である。もとは、八幡神社の放生会式が行われた十月十五日であった。この日は、盛大な御神幸行列が催される。神・社旗・

傘・鎧武者・鉄砲・たんぼ・弓・鳥毛・白毛・笛・太鼓・御輿（三柱）が行列をなし、御幸場に渡る。

史跡 岩屋平ル古墳

西伯郡中山町八重 JR山口駅より車で十五分

古墳時代後期（六世紀）の古墳。墳丘はよく整った円墳で、直径一八メートル、高さ約三・三メートルある。この一帯には古墳が密集し、所在地名をとって「八重二号墳」とも呼ばれる。石室は、出雲地方に多い「石棺式石室」である。この石室は出雲、伯耆、因幡に分布し、伯耆では淀江町の岩屋古墳も同様の石室を持つ。

本古墳の石室は、安山岩の切石を用い、玄室は一枚岩を用いているが、天井石のみ切石と割石の二枚からなっている。石室の規模は、玄室の奥行三・三メートル、幅二・一メートル、高さ一・九メートルである。

本石室は、出雲地方の「石棺式石室」の影響を強く受けながら、両側壁で奥壁及び前壁をはさみ、玄室が長方形をとる点で西伯着地方の横穴式石室の特徴をよく示している。

この「石室」の状態から、古墳時代の西伯耆の政治社会的關係を考える上で重要とされ、平成三年（一九九一）三月、県の史跡に指定された。古墳は、現在、公開されている。

木ノ根神社

西伯郡中山町松河原
JRR下市駅より徒歩十五分

山陰地方は多くの古代の民俗が残存している。これについてとくに著しいのは原始信仰である生殖器崇拜である。

木ノ根神社は、愛知県田原神社と同様、男根崇拜で知られている。木ノ根神社は「木の根さん」「への子マツ」ともいわれ、近くはもとより遠くは九州・北海道からも参拝者があつて、昔から信仰を集めていたが、神社法の制定当時、淫祠として廃棄を勧められた。現在はこのマツの根の傍らに小祠や堂が建てられている。またこの地区一帯にはサクラの植栽もほどこされ、展望のすぐれていることなどから近年訪れる人も多い。

文芸の小径

西伯郡中山町羽田井
JRR中山口駅より車で十五分

大山へ通じる西伯郡中山町の報恩峠に七百本の桜並木が三キロメートル

ルにわたって続いている。

これは俳人として著名だった末次雨城町長が昭和三十七年（一九六二）に植えたもので、この桜並木の中に文学碑が立ち並び、「文芸の小径」と呼ばれている。

昭和六十一年（一九八六）、桜並木を生かした町の文芸振興をめざし文学碑設置を進める実行委員会が町内の老人クラブや文芸愛好家を中心に組織された。町の内外から文学碑建立の申し込みが相次いだ。短歌・俳句・川柳など作品のジャンルは問わない、碑の形や材質は自由、というのが魅力だったのだろう、翌年春の完成式には、五十八基の碑が並んだ。

以来、毎年春と秋には碑を囲んで「文芸のつどい」が開かれ、句作や野点を楽しんでいる。

平成九年（一九九七）、住民参加による景観づくりが高く評価され、鳥取県景観大賞を受賞した。

一息坂峠

西伯郡中山町萩原
JRR中山口駅より車で二〇分

主要地方道赤崎大山線が大山に向かつて中山町から大山町香取へ越える峠道である。大山隠岐国立公園に

位置し、標高は五二〇メートルと比較的低いが、見通しの広い景観は絶景である。南に大山、さらに尾根続きの矢筈ヶ山、甲ヶ山、勝田ヶ山の三山を望み、北に日本海を見る。国道九号から峠への道は、一つに赤崎町から主要地方道を尾張川沿いにするコース、他に中山町から県道二二九号を甲川沿いにのぼるコースがあり、この二つの道は中山町羽田井で合流し萩原へ至る。峠を越えようと、香取開拓団の入植地に入る。畜舎と牧草地の向こうに大山が迫る雄大な景観が広がる。

元来、峠道は古くから大山寺を目指して参詣人や牛馬が通つた道である。羽田井から萩原の沿道には参道を示す松並木が残る。

なお、江戸時代から続く行事として、毎年五月二十四日に大山寺の春祭り（会式）に合わせ、この峠で茶事の接待が催される。

道路はそのまま川床溪谷を抜け、大山国際スキー場、上の原スキー場、中の原スキー場、豪円山スキー場を通り、大山寺に至る。また、萩原では船上山から山周りに来る県道とながっており、船上山と大山を結ぶドライブコースともなっている。春

の山桜、新緑、夏の夕涼み、秋の紅葉、白雪の大山と季節の変化に感じ華やかな風景が繰り広げられる。沿線各地に展望駐車場が整備されており、車を止めてゆっくり楽しみたい。

日南町

奥日野県立公園

日野郡日南町・日野町

日野川上流にあつて、山と渓谷と花に彩られ、野外レクリエーションの場に恵まれた県立自然公園である。公園へのアクセスは、国道一八〇号、一八一号、一八三号とつながる道によって、簡単にたどることができる。

眼下に日野川が広がるハイキングコースの古峠山（標高七六七メートル）や日野川と板井原川の合流点にあるサクラとツツジの塔ノ峰、根雨の町並み、オシドリが飛来する鵜ノ池、ダイセンミツバツツジと竜王滝で名高い滝山公園、白いキシツツジが映える日野川渓谷、奇岩とツツジの石霞溪、県下のダム湖を持つ菅沢ダム、スキー場と麓にフラワーパークがある花見山（標高一八八メートル）と多彩な見所にあふれている。

公園の面積は、日野町と日南町にまたがる四、八二三ヘクタールで、そのなかに特別地域が八七一ヘクタ

ール含まれる。花見山は岡山県との県境に位置し、近くには大倉山、鬼林山、船通山、道後山と一、〇〇〇メートルを超す名山が控える。

中国山地は一般的に、山麓では急峻な地形と渓谷が発達し、山腹を登りきると一転して盆地や平原が広がる。公園内には、山上の別天地と思える山村や高原が少なくない。しかも、あちこちにたたら製鉄の砂鉄を採取したカンナ流しの跡がある。

日野町根雨の近藤家は、日本でも最も遅くまで和鉄生産を行っていたことで知られる。日野川筋は、東の千代川上流の智頭と並ぶ林業地でもあり、山を歩くと木を切るチェーンソーの音を聞いたり、木を植える人の姿を見たりする。四季折々、山里の生活と歴史に触れることができる。

日南町美術館

日野郡日南町
JR生山駅よりバス一〇分、日南中学校前下車、徒歩五分

日南町総合文化センターに隣接し、平成八年（一九九六）六月に開設された。

サクラクレパス創立者であり、日南町出身の佐竹林蔵氏が収集した近代芸術家の絵画や彫刻など約三十点が寄託されているほか、同町出身で

ある足羽俊夫氏の洋画・版画・デッサンなどを約一〇〇点収蔵、展示している。このほかにも梅原龍三郎、川合玉堂などが展示されている。

開館時間 午前一〇時～午後六時
入館は午後五時三〇分まで

休館日 月曜日、祝日、年末年始、展示替期間

問合せ先 ☎ 0859・77・1113

石霞溪

日野郡日南町生山
JR生山駅より徒歩一〇分

日野川とその支流が花崗岩を浸食した渓谷。奥日野県立自然公園に含まれる。花崗岩は、白亜期末から古第三紀にかけて貫入した根雨花崗岩



と呼ばれる粗粒な黒雲母花崗岩で、互いに直交する三つの面に平行する方状節理が発達する。

石霞溪にはもともと北石霞溪、中石霞溪、南石霞溪の三つがあったが、日野川との合流点から遡る印賀川沿いの北石霞溪は、菅沢ダムにより水没したり水量が減ったりして、往事の面影はほとんど残っていない。日野川と生山の町並みが平行するあたりが、中石霞溪である。ここは日野川が穿入蛇行をして大きく屈曲するところで、川岸に面して花崗岩の絶壁が切り立ち、河床には崩落した巨岩が点在している。南石霞溪は、中石霞溪から南に分かれる石見川沿いの渓谷である。日野川との合流点に近いこの付近は、石見川の流れが急になる地点にあたり、そのため流れが速く、川底が深く刻まれ、谷幅の狭い深いV字渓谷になっている。

谷壁の急崖をつくる花崗岩は、間隔の広い方状節理に沿って割れ目が開き、巨大な箱形ブロックを積み重ねたように見える。谷底にはこの巨大ブロックが転落し、滝や淵ができ、またおう穴も随所に見られ、花崗岩地帯特有の渓谷美をつくりだしている。現在では、石霞溪といえばこの

南石霞溪を指すことが多い。

日南町総合文化センター

日野郡日南町
JR生山駅よりバス五分、
中学校前下車、徒歩二分

日南町は、昭和の文豪井上靖、松本清張と関わりがあり、作品に描かれたことも少なくない。町内には幾つかのゆかりの施設もある。

平成八年（一九九六）六月に日野川沿に開館した日南町総合文化センターには、井上靖が長野県軽井沢に所有した別荘の書斎を模した「井上文学展示室」と東京都杉並区にある松本清張の居宅の応接間を模した「松本清張文学展示室」が設置され、さまざまな作品を生み出した二人の作家の世界に浸ることができる。

また、ホール内の図書館には井上靖・松本清張のコーナーが設けられているほか、屋外には二人の作家の愛用品や作品などをモチーフにした彫刻などが配置されている。

開館時間 午前一〇時～午後六時

休館日 月曜日（図書館水曜日）、祝日
問合せ先 ☎0859・77・1111

楽楽福神社

日野郡日南町宮内
JR生山駅よりバス十五分
社前下車すぐ

日野川をはさんで西社・東社に両

社がある。伝説によれば孝霊天皇の皇子・大吉備津彦命の弟・若建吉備津彦命がこの国に軍を進めて鬼林山の賊を平けたが、その後ここで死去したので二柱を祭ったというのである。ただし正史にはみえない。西社は特に社殿が壮麗で彫刻やそのほかにも美術的価値がある。これから北方約二〇〇メートルのところに崩御山がある。これは大吉備津彦命の墓と伝えられているもので、頂上には墨々として石が群がっている。自然か、人工の積石塚の類であるかはよくわからない。また、東社の境内には一箇の古墳があつて、石室が開口している。西社の南方約一〇〇メートルのところに神宮寺があり、古棟札等を所蔵している。

江戸時代には日野郡の大社として崇められ奥日野の総産土神でもあつた。

楽楽福神社社叢

日野郡日南町印賀
JR生山駅よりバス二〇分
学校前下車、徒歩一分

社叢は印賀川上流の左岸にある標高四五〇メートルに位置し、コナラ、モミ、亜高木にはアオハダ、ミズナラの高木や、アセビ、ソヨゴなどが見られる。自然林の少ない日野郡内で、照葉樹林帯からブナ帯へと移行

する中間林帯における典型林とみなされる貴重なモミ林として、昭和六十年（一九八五）二月に県の天然記念物として指定された。

松本清張

「幼き日

夜ごと父の手枕で聞きし

その郷里 矢戸

いまわが目の前に在り」

日野郡日南町矢戸にある松本清張の文学碑には、清張自筆の文字で記されている。この碑は、昭和五十九年（一九八四）に建立された。

松本清張（一九〇八～一九九二）の父、峯太郎は矢戸で生まれた。清張はこの父を小説『父系の指』（昭和三十年）に書いている。

「私の父は伯耆の山村に生れた。中国山脈の脊梁に近い山奥である」「父は十九の時に故郷を出てから、ついで帰ることがなかった。汽車賃さえ工面できない生活のためである。それだけよけいに故郷に愛着をもち、帰郷することが父の一生抱いていた夢であった」

清張が『父系の指』について、「自伝的なものももっとも濃い小説

である」と述べているように、清張にとっても矢戸は心のふるさとであったのかもしれない。



同じ中国山脈に連なる山里、島根県仁多町亀嵩には、「小説砂の器舞台の地」と書かれた清張の記念碑も建っている。名作『砂の器』（昭和三十五～三十六年）の重要な舞台は、この亀嵩であった。映画化にもなつて、この地で撮影が行われた。

解脱寺

日野郡日南町下阿尾
JR生山駅よりバス四〇分
高祖前下車すぐ

日蓮宗の大本寺で、通称「高祖さん」と呼ばれ親しまれていた。しかし、昭和二十六年（一九五二）六月頃の

失火により、鐘堂をのこして類焼してしまった。

寺伝によると、足利尊氏の一族・日野中将が、山陰征服のため出発するとき、京都本国寺の日静上人に頼み、日蓮直作の尊像一体を受け、ここに堂を建て肖像を安置して祭ったのがはじまりといわれている。

後に、慶安元年（一六四八）十一月米子本数寺の住僧・日要上人が霊夢を感じ、ここにやってきて堂守をおこし、さらに身延山久遠寺の日感上人を招いて開山したともいわれる。山門の花崗岩の大鳥居をくぐって石段を登ると約四メートルの馬場があり、これに沿って高い石垣が組まれている。さながら一大城廓のようである。この馬場には、昭和三十六年（一九六一）六月、県の天然記念物に指定されたみことなモミの並木がある。寺庭にはかつて、本堂、恵日講舎、庫裡、七面神御堂等もあったが、これも焼失した。また、日蓮上人親筆断片、藤原定家書、池田光政、光仲書や、本尊も消失し、当寺第一の本尊・宗祖日蓮直作の木像と日蓮上人一代絵巻を残すのみとなった。

見逃してはならないものに、これから下の宇馬の背に日臨本妙律師が

建てた法塔がある。日臨は不受不施派という日蓮宗の一派を強調し身延山に反対し、一時解脱寺に仮り住まわされたこともあった。死後二十三年の弘化二年（一八四五）、その直筆によつてこの法塔を建てた。高さが約二メートルある。

解脱寺の縁日はもと四月十二日、八月十二日であったが、陽暦では五月十二日、九月十二日となった。

ゆきんこ村

日野郡日南町下
阿毘縁 J R 生山駅からバス約
二〇分、高祖前下車

鳥根県との県境に近い、自然豊かな場所に平成六年（一九九四）四月に開館した。

宿泊・会議施設やレストランを備えた「四季彩」やログハウスが整備されている。また、昔の民家を復元



したかやぶぎの家では、地元の素材をふんだんに使った料理を味わうことができる。このほかに、天文台、乗馬施設、運動広場、ハーブ園などがあり、夏はキャンプやハイキング、冬はスキーと四季を通して遊び楽しめる。

開館時間 午前10時～午後5時（レストランの場合）

休館日 毎週火曜日

問合せ先 ☎ 0859・87・0431

菅沢ダム

日野郡日南町菅沢
J R 生山駅よりバス二〇分、菅沢ダ
ム前下車すぐ

鳥取県下最大の多目的ダムであり、ダム湖も広い。奥日野県立公園の一角を形成している。日野川に沿って国道一八一号を走り、日野町根雨で分かれて国道一八〇号に入る。これを進むと国道一八〇号は日野川と別れて山登りにかかり、ヘアピーンカーブを抜けると眼前に湖面が見えてくる。

日南湖と名付けられたダム湖の面積一〇〇ヘクタール、総貯水量一、九八〇万立方メートル、集水域は八五平方キロメートルに及ぶ。ダム本体は重力式コンクリートダムで、ダム高は七三メートル、堤長は二一〇

メートル。コンクリート製のダム自体の重さで水圧に耐えている。旧建設省の直轄事業として日野川の支流、印賀川をせき止めて昭和四十三年（一九六八）に完成した。ダム湖に流れ込む水の八割を貯水し、洪水調整の機能を果たしている。ダム工事と並行して日野川第一発電所が建設され、最大出力四千三百キロワットの水力発電を可能とした。また、工業用水として、下流の米子市、境港市、日吉津村へ送られている。さらに、日野川流域の農業用水としても利用されている。

日南湖には、平成五年（一九九三）にリニューアルされたアーチ式の本山橋がある。これは景観に配慮し紅葉の季節に合わせた架橋が試みられている。対岸には、サイクリングロードがあり釣り場も多い。毎年五月には日南湖一周十キロメートルを中心に「にちなん湖畔マラソン大会」が催される。七月にはダム湖遊覧ができるダム見学会があり人気を集めている。

下阿毘縁神社の大シダレザクラ

日野郡日南町阿毘縁
J R 生山駅よりバス四
〇分、高祖前下車すぐ

下阿毘縁神社境内の入口にあるシ



ダレザクラの老木である。シダレザクラは県内に自生するエドヒガン（ヒガンザクラの一種で、葉の開出に先立って花が咲く）から改良された栽培種で、枝がしだれていることから名付けられた。

花期は毎年四月下旬で、鮮やかな紫色がかったピンクの八重咲きの小花が開く。ソメイヨシノやエドヒガンに比べて花持ちが長い。

近郷に希な神社の名木として住民に親しまれ、昭和三十三年（一九五七）十二月に県の天然記念物に指定された。

指定以後、周囲の樹木の成長に伴い日照不足や老木のためか、折損などが起こり、現在では樹勢にかなりの衰えが見られる。

ふるさと日南邑

日野郡日南町神戸上
JR生山駅からバス二〇分、砂田下車

文豪井上靖が「天体の植民地」と絶賛した標高六〇〇メートルの高原に昭和六十一年（一九八六）七月に開設された。

テニスなどのスポーツが楽しめるほか、農作物を収穫する喜びを味わうことのできる「体験農園」、きのこやくり、果物などを自分で収穫できる「収穫の森」などがあり、自然をさまざまな角度から体験できる。

このほか、ホールやキャンプ場やログハウス、バーベキューハウスも設置され、多目的に利用できる施設である。また、平成九年（一九九七）八月には広さ三ヘクタールのフラワースタターも整備された。

開館時間 施設によって異なります。
休館日 年末年始

問合せ先 ☎0859・83・1188

池田亀鑑

池田亀鑑は、昭和期の国文学界に「池田時代」ともいべき一時代を築いた。

明治二十九年（一八九六）、日野

郡福成村神戸上（現在の日野郡日南町神戸上）に生まれた。鳥取師範学校を卒業し、溝口小学校に教師として勤めた。わずか二年間だったが大江賢次・下村章雄らに大きな影響を与えた。

東京高等師範学校、さらに東京帝国大学に進み、平安朝の女流文学を研究した。多才豊かな亀鑑は七種類のペンネームを使い分け、少年少女小説や婦人小説を書き研究費や生活費に充てたという。

平安朝文学、特に『源氏物語』研究の権威であり、源氏物語研究の貴重な基礎資料である『源氏物語大成』八巻のほか、著書は百冊を超える。

昭和三十一年（一九五六）、六十歳で亡くなった。日野郡の溝口町役場前と日南町石見東小学校に記念碑が建てられている。

井上靖

「ここ中国山脈の陵線 天体の植民地……」

日野郡日南町の福栄峠に建つ井上靖の文学碑に刻まれている。

昭和二十年（一九四五）六月、第二次大戦の戦火を避け、海拔六〇〇

メートルのこの高原の地へ、家族六人を疎開させた。当時、井上は新聞記者であった。同二十四年（一九四九）『闘牛』で芥川賞を受賞し、多忙な毎日を送ることになるが、しばしばこの地を訪れている。作品『通夜の客』『高原』は奥日野が舞台となっている。

昭和五十三年（一九七八）、文学碑が建立され、また、近くには記念館「野分の館」もあり、井上ファンに人気が高い。

平成元年（一九八九）、町制三十周年を迎えた日南町の名誉町民に選ばれた。米子市大篠津にある「井上靖記念館」には、肉筆原稿や蔵書約二千冊を収めた書斎や居間が再現されている。井上文学が生み出されたその側面を見る思いがする。

井上靖記念館「野分の館」

日野郡日南町神福
JR生山駅よりバス二〇分
太田分かれ下車、徒歩一〇分

昭和の文豪・井上靖は、終戦間近の昭和二十年（一九四五）に日南町神福に家族を疎開させていたこともあり、後の井上作品には、ここでの生活や自然などが記されている。

井上靖が再びこの地を訪れたことを機会に始まった町とのふれあいを



後世にも残したいという願いから、小説『通夜の客』に記された「F村が一望できるらくだこぶの峠」に昭和六十年（一九八五）三月に建設された。

なお、「野分の館」という名前は井上靖による。展示室には、原稿や著書、写真などが展示され、作品とともに町との関わりがよくわかる。

また、近くには井上靖直筆による文学碑や井上靖が作った詩を夫人が記した石碑も設置されている。

開館時間 午前七時～午後五時

休館日 無休

問合せ先 ☎ 0859・82・1111

かめやま 亀山公園

日野郡日南町下石見
JR生山駅よりバス五分 道原下
車、徒歩三分

鳥取県西部の日野川筋で最も奥に位置するツツジの名所である。日南町生山から国道一八三号と別れ、奇岩・巨石で有名な石霞溪を脇に見て石見川をさかのぼると下石見地区に入る。脇道に沿って上がると公園入口に到達する。小山に盛り上がった斜面に二千本近くのツツジが植え込まれ、開花期には全山赤く染まる。満開の時期は少し遅く、五月のことが多く、県東部や中部のツツジの開花が終わる頃に見頃を迎える。

かみいわみ 上石見のオハツキ・ タイコイチヨウ

日野郡日南町
上石見
JR上石見駅
より徒歩七分

上石見神社の社叢はイチヨウ、ケヤキ、カヤ、ヤブツバキなどで構成されている。オハツキ・タイコイチヨウは、社殿の前に植えられた二本のイチヨウのうちの東側の巨樹で、胸高直径は約一・三メートルある。幹には多数のコブ状の乳柱ができ、大きい幹のつけ根から乳房状に垂れ下がっている。

オハツキ・タイコイチヨウの意味は、葉の先に種子が付いたもの、ま

た一本の柄の先に着いた二個の胚珠が受精しないまま生長し、実が太鼓形になったものがあることから名付けられた。大変珍しい異型のイチヨウとして、昭和四十五年（一九七〇）二月に県の天然記念物に指定された。

なお、年によって増減はあるが、正常な種子のほつが一般に多く付く。「とつとりの名木一〇〇選」に選ばれている。

たりの 多里の クロム鉱山

日野郡日南町多里
JR生山駅より車で四分

日南町の南西地域にあるクロム鉱山。クロム鉱床は非変成古生層に貫入した蛇紋岩中に形成される。かつては日野上鉱山、広瀬鉱山、若松鉱山と三つの鉱山があり、最盛期にはわが国が産するクロム鉱石のほとんどを出荷していた（昭和三十八年、全国の七十四パーセント）。しかし、現在運営されているのは若松鉱山のみで、すでに採掘し貯鉱していた鉱石を出荷している。（平成七年二月に採掘休止）。これらのクロム鉱石は主に耐火レンガ用に利用されている。

はな み 花見山

日野郡日南町、岡山県新見市
JR生山駅より車で二〇分

日野郡日南町と岡山県との境界にある一、一八メートルの非火山性の孤立峰で、中国山地の連峰の一つである。別名を小栗ヶ山という。地質は中生代に貫入した花崗閃緑岩からなり、周辺の花崗岩と比較すると堅く、浸食に耐えて突出したものである。近くの大倉山（一、一一二メートル）も同じ様にしてきた。

山麓の六〇〇メートル～八〇〇メートルの緩斜面は、道後山面と呼ばれる面に続くものであると考えられる。花見山、大倉山、鬼林山、稻積山とともに、準平原上に形成された残丘状の孤立峰である。風化した花崗岩からなり、ここでは砂鉄採取のためにカンナ流しが盛んであった。その結果、カンナの残丘やカンナ流しでできた「カンナ地形」が発達している。

南の斜面には花見山スキー場があり、山麓の緩斜面には日南邑の自然体験、農作業体験、スポーツ、創作活動の諸施設がある。奥日野県立自然公園に含まれる。

花見山の シャクナゲ

日野郡日南町神戸上
J R 上石見駅より車で二〇分

花見山は、岡山県との県境の山で、標高は一、一一八メートルで、岡山県倉敷市を経て瀬戸内海に注ぐ高梁川の源流である。別名を小粟ヶ山と呼び、地質は中生代に貫入した花崗閃緑岩よりなる。

西麓にはスキー場ができ、また神戸上から岡山県側の千屋花見へ抜ける県道ができ、登頂が便利になった。登山路に沿った夏緑広葉樹林内の低木層にはホンシャクナゲが自生し、四月下旬の開花期には登山者の目を楽しませている。

ホンシャクナゲはシャクナゲの仲間の代表的な種で、県内をはじめ中国地方や四国北部に分布し、花崗岩地質を好んで群生する。

紅紫色の花は直径五センチもあり、花冠は広い漏斗状で七裂して平らに開き、多数つけて美しい。

道後山

日野郡日南町多里

広島県東城町との境界に位置する高さ一、二六八・九メートルの山。西に連なる岩樋山（一、二七一メー

トル）とともに中国山地の山並みの一つである。一般には両者を含めてこの山塊を道後山と呼ぶことが多い。

道後山を水源とする水系は、一つは北流し日野川に合流して日本海に注ぎ、南流する二つのうち一つは江川水系に、もう一つは高梁川水系に合して瀬戸内海に流れる。道後山の山頂は円丘状で、一等三角点がある。千メートル付近に広がる前座野呂、月見が丘などの緩斜面は高位浸食面で、中国山地に広く伸びていることから道後山面と名付けられている。一方、五〇〇メートル付近に広がる平坦面は吉備高原面と呼ぶ。このように浸食を受けて削剥されてきた小起伏の浸食面のことを準平原と呼ぶ。

道後山面から突出する道後山や岩樋山は浸食されずに残った残丘（モナドノック）である。道後山の山体は、斑糲岩や黒雲母花崗閃緑岩からなり、広島県側の山体は古生層や斑糲岩、蛇紋岩などでできている。花崗閃緑岩の風化したものからは砂鉄が採取され、斑糲岩はクローム鉱を伴う。

草原が広く牧場が見られる。また、

高山植物が自生し、レンゲツツジやハンカイソウ、タニウツギの群落が有名である。広島県側にはスキー場や宿泊施設があり、山頂からの眺望もすばらしいので、比婆道後帝釈国定公園に指定されている。

船通山

日野郡日南町上萩山
J R 生山駅よりバス三〇分、終点下車 頂上まで九〇分

標高一、一四二メートルの島根県仁多郡との県境の山で、八俣のおろちで有名な、神剣出現の伝説がある。昔、製鉄がさかんであった地方であったことから、滑鉄山所などもあった。

船通山に登る道は多里から上萩山への道が一番よく、また高宮方面から登る道もある。上萩山からは島根県仁多郡横田町に通じている。山頂には「天叢雲剣の出現」の碑もあり、近年登山者の多い観光地の一つとなっている。

昭和三十八年（一九六三）七月に比婆道後帝釈国定公園として指定された。面積は三四五ヘクタール（本県地域のみ）である。

船通山の鳥取県側九合目の斜面に一本のイチイの巨木がある。直幹で樹高五・四メートル、高さは低い

根回り八・三メートルある。下部がすこぶる太く、上が細いピラミッド形をしている。枝は三十本ばかり張り出し、上方のものは短い、下方のものは最長一九メートル以上もある。このような木が六、七本ある。枝張りの全周は七七・五メートル、その総面積は実に一九一平方メートルに及ぶ。生育推定は二千年、日本最大級のイチイの巨木であり、神木である。イチイは雌雄別株で、この木は雌株で実をつける。

このイチイには、須佐之男命が稲田姫と結婚し、ここに宮居を構えたとき、大蛇の霊を慰めるために植えられたという伝説がある。



昭和三十二年（一九五七）七月、国の天然記念物に指定された。イチイはイチイ科で一位とも書く。これはこの木から神官が用いる笏（しゃく）を作ることから正一位・従一位にちなんでこの名がつけられたという。

ブッポウソウ

日本に住む有名な鳥の一つにブッポウソウがある。声のブッポウソウと姿のブッポウソウとを区別する場合があり、前者はコノハズクをさす。ブッポウソウは南方熱帯で越冬し、五月に日本に飛来して産卵する。そして八月の終りに南国へ帰る夏鳥である。大きさはハトとツグミのあいだくらいで大きな黄色のくちばしを持ち、全身は瑠璃色で美しく、熱帯鳥を思わせる。翼を上げるとその中央に白い円斑があるので日野郡ではモンツキともいい、ギヤアギヤアと鳴き、カラスに似ていることから、日野郡ではコッテイカラス・チョウセンカラス等とも呼ばれる。

日本では本州各地に飛来するが、本県は他府県に例を見ない大繁殖地であった。その中心は伯備線の日南、

日野、江府、溝口町である。また、八頭郡八東町で繁殖していることが確認されている。日野地方では、木製の電柱の穴を利用して営巣していたが、コンクリート製に取り替えられたため減少した。現在、巣箱を掛け、かつての生息状況を取り戻そうとする試みがなされている。

日野町

根雨の町並み

日野郡根雨町根雨
JR根雨駅より徒歩三分

根雨は日野川とその支流板井原川の合流点に位置し、上方に上る出雲往来と、備後に通じる日野往来とが交差する交通の要衝で、物産の集散地として開けた町である。特に出雲往来の主要な宿駅で、寛永十四年（一六三七）にはすでに当宿の名が見え、寛文年間には渡船場・御茶屋の整備も図られた。

宿場町の面影を残す町並みは南北に長く、出雲往来は通りを南進し、日野往来は町並みを右折して板井原川を渡り、根雨神社の前を通る。

松江藩主の御茶屋は、町並みの中央部にあつたが、梅林家の前に残る「本陣の門」（町指定保護文化財）は、移築されたものである。梅林家は代々根雨神社宮司職を勤めており、家構えも古い。敷地の南側にある祠は旧根雨神社本殿を移築したもので、形式から見て寛文年間に造られたものと見える。

また、日野川流域は、昔から奥出

雲地方と並んで「たたら製鉄」の産地として知られており、江戸時代から明治・大正・昭和にかけては近藤家が地域産業・経済の中心となっていた。

近藤家住宅は町並みのやや上手にあるが、江戸時代末期の建築で、土蔵と一体となった店構えは、根雨の町並みの中でも、ひととき豪華で精緻な造りである。向かいには同様の造りの出店近藤（現日野町公舎）がある。

板井原川に架かる祇園橋（昭和八年、RC造）は高欄にぎぼしを載せた風情のある橋である。祇園橋の反対側、町並みを見下ろす山の中腹に



は、近藤家が町に寄贈した町家風のモダン建築・旧根雨公会堂（現日野町歴史民俗資料館・国指定登録文化財）や、梅林家の下手には洋風の山陰合同銀行根雨支店（昭和初期、旧松江銀行根雨支店）があり、町並みに彩りを添えている。根雨は歴史と文化の薫る町である。

根雨神社社叢

日野郡日野町根雨
J R 根雨駅から徒歩七分

根雨神社社叢は、板井原川が日野川に合流する地点、国道一八一号の新旧道路に挟まれる位置にある。根雨中心地東方に位置する旧社殿域と西方にある現社殿社叢からなる。ともに昭和五十九年（一九八四）二月に日野川流域に残る貴重な照葉樹林として、県の天然記念物に指定された。

旧社殿域は標高二一〇～二七〇メートルの尾根の末端にある。社叢は手厚く保護されたシラカシ、ウラジロガシ林で、樹高約二〇メートルの巨木も多く樹勢もよい。主要樹林の胸高直径はシラカシ一メートル、ウラジロガシ一・二メートル、アラカシ〇・七メートルなどである。

現社殿は標高一九〇メートルで、

道路建設によって細長く縮小されたが、シラカシ巨木林の面影を残している。そして近郷に見ないカゴノキやオキヨスミシダが生育する。

日野町歴史民俗資料館

日野郡日野町根雨
J R 根雨駅より徒歩一〇分

宿場町根雨の東の高台、根雨神社と相對する山の中腹、旧八幡神社の社地に建つ木造二階建、切妻造妻入りの建物である。

鉄山経営で財をなした近藤家七代当主寿一郎が建設費の大部分を寄付し、根雨公会堂として昭和十五年（一九四〇）三月に竣工した。

根雨公会堂は、戦前の多くの公民館と同じく、映画・演劇・講演など各種の催し物会場として使われ、日野往來の文化の発信地となった。戦後も長らく町の公民館として親しまれていたが、他の公共施設の充足にともない公会堂としての利用は年々減少した。昭和六十一年（一九八六）からは日野町歴史民俗資料館に衣替えし現在に至っている。屋根が平成七年（一九九五）に葺き替えられているが、そのほかは改造されておらず内外装とも当初の状況をよく伝えている。



眼下に広がる町並みと調和する民家調のデザインは寄贈者・近藤寿一郎の希望でもあり、屋根は赤い石州瓦で葺かれ、外壁は大壁造りモルタル粗面仕上げ・ポツ窓の組み合わせとなっている。大正末期から関西の住宅建築で多用されたものである。これは建築家・武田五一ただいちが和洋折衷の住宅に最適としたデザインで、和風にスパニッシュ趣味が取り入れていて、武田自身「新日本式」と称したものである。一階正面や側面にみられる円柱を立てたコロネード風のデザインにもその影響がつかえる。

町並みを表現したデザインからは派手さが見えないが、劇場としての

価値は今も高く、その機能も失われていない。正面入り口上部の妻壁には、当初から、モザイクタイルで根雨のネと文化の文を重ねたシンボルマークがあり、文化の殿堂としての容姿も変わらない。

入館を希望する場合は要予約

開館時間 午前九時～午後四時

問合せ先 ☎ 0859・72・2107

オシドリ

鳥取県の南西部に位置する日野町日野川には毎年秋から春にかけて多くのオシドリが飛来する。

数年前、住民によってオシドリを観察するための小屋が設けられ、オシドリを見ようと町内外から多くの人が訪れる。

また、町内には、オシドリの餌となるドングリ集めや、川の清掃、オシドリの情報提供等の活動に取組むグループがある。このような地道な活動が実を結び、現在、日野川では多いときで七〇〇羽以上のオシドリを見ることができている。

オシドリは日野町のシンボルであり、その愛らしい姿は菓子や木工芸品等のグッズにもなっている。

生田長江

生田長江は、大正期を中心に、評論、小説、戯曲、翻訳と多彩な文芸活動を展開した。

明治十五年（一八八二）日野町に生まれた。本名は弘治。東京大学在学中に『小栗風葉論』を発表して注目され、以降、昭和十一年（一九三六）に亡くなるまで、評論や小説、戯曲など幅広く活躍している。特に、文芸評論ではしばしば厳しい見解を示したことから、文壇から孤立する側面もあったが、その実力と発言は無視されなかった。また、『ニイチ全集』の翻訳にも力を入れている。

日野町根雨の延暦寺境内には、生田長江の二段の碑がある。上の段には彫刻家・辻菅堂が描いた似顔絵が彫られている。下の礎石には弟子であった佐藤春夫の文章が刻まれている。この碑は地元「長江顕彰会」が昭和三十三年（一九五八）に建てた。

黒坂城跡

日野郡日野町黒坂
J R黒坂駅より徒歩一〇分

日野川の上流部に近い黒坂の住宅地の周辺に、中世と近世と時代の異なる二つの古城跡がある。

なる二つの古城跡がある。

住宅地の北方にある要害山は、文字どおりに天然の地形に守られた中の山城跡で、日野郡の豪族・日野氏代々の居城跡である。元弘三年（一二三三）、名和長年が後醍醐天皇を奉じて船上山に挙兵したとき、この地の日野三郎義行は一族とともにせせ参じた。

一方、近世の古城跡は、住宅地の西方、現在県立日野高校黒坂校舎のある所である。ここには慶長十五年（一六一〇）に、五万石の領主として伊勢の亀山から転任してきた関一政が城を築いた。鏡山城とも呼ばれた。元和四年までの短年ではあったが、日野郡の行政の中心地として栄えた。

今も日野川に平行して約八〇メートルにもおよぶ直線道路が南北につき、五万石の城下町の面影をしのばせている。

黒坂のキシツツジ

日野郡日野町黒坂
J R黒坂駅より徒歩一〇分

キシツツジは、ツツジ科に属し、紅紫色で美しく、中国地方の西部および四国に分布する。日本固有種である。

日野町上菅・日南町生山の日野川の沿岸近くに限って、白い花崗岩の上にキシツツジが生育し、五月中旬の開花期に旅行者の眼を驚かせる。その中心地点が黒坂である。特に日野川の藪津橋付近の約一キロメートルの間は、キシツツジの大群落地帯である。

泉竜寺

日野郡日野町黒坂
J R黒坂駅より徒歩一〇分

曹洞宗の寺である。寺伝によると、慶長二年（一五九七）に関一政が、伊勢（三重県）から日野会見五万六千石に転封されて来たとき、泉竜寺を上菅から現地域の二〇〇メートル奥に位置する杉ガ谷に移し、祈願所としたことに始まるといわれる。その後、洪水により大破し、安永五年（一七七六）に現地に移建された。

観音堂は同年に建てられたもので、本堂は天明三年（一七八三）の建立である。幕末の因幡二十士の流諦幽閉の寺として名高く、その遺品として剣術具、机、本箱、碁盤なども所蔵されている。寄せ書のような遺墨は、二十士の感懐をうかがわせる。また、大西正虎の血書の歌は特に名高い。二十士の幽閉の室、馬小

屋、槍つきのマツなども残っている。なお、二十士が分宿していた光明寺、正法寺、光徳寺も町内にある。

因幡二十士とは次のとおり。鳥取藩主・池田慶徳は、水戸烈公の第五子であった関係もあり、天下に率先して尊王攘夷を唱えた。しかし、藩内では佐幕派と討幕派の対立が激しく、因幡の青年勤王派は、君側の重臣の態度を疑い、「佐幕派と目し藩主の明をおおい天下に誤解を生ぜしめた」と憤激し、文久三年（一八六三）八月十七日、君側の奸を除くとして、京都本國寺を襲い、黒部権之介、早川卓之丞、高沢省己を斬殺した。なお、二十士は正しくは二十士である。

長楽寺

日野郡日野町下樓
J R根雨駅よりバス一〇分 安原入
口下車、徒歩三〇分

日野川畔から約二〇分の行程の山峡にあって、紅葉の頃が最もよい。かつて寺は現寺域の上方にあたる鵜ノ池畔に近い所にあった。

現在は曹洞宗に属すが、寺伝によるともとは天台宗に属した。僧坊は十二院が建ち並び、平宗盛の尊敬が厚かったが、平家の滅亡時に大山寺とことをかまえたため焼き滅ぼされ

たと伝わる。

寺は小庵であるが、多数の旧国宝仏を有している。本尊薬師如来、両脇侍の日光、月光の両菩薩はいずれも木彫で、平安朝後期の優秀な古仏である。毘沙門天は、時代を少しさかのぼって藤原時代の作とみられる。鋭利にして精緻な彫刻である。

これらは大正九年（一九二〇）四月に国の重要文化財に指定された。不動明王は平安後期の作とみられる。昭和十七年（一九四二）十二月に国の重要文化財に指定された。左右に揃う十二神将像は、足利時代までの作と思われる。ほかに寺内から出た平安朝の唐草古鐘、もとの寺跡から出た宋銭二枚が所蔵されており逸品である。

寺の建築は新しいが、格天井の花鳥は、精密極彩色でなかなか巧みである。これは備後（広島県）の狩野派の画家・法橋索準の手によるもの



である。

金持神社

日野町金持
JR根雨駅よりバス一〇分

天常立尊・八束水臣津奴命などを祭神とし、近世までは「三体妙見宮」といわれていた。

社伝によると、出雲国園妙見宮から勧請されたという。勧請された年代は不明である。維新後に、現社名に改称された。「金持」という景気の良い地名は、タタラが鍛冶に係わる力又チ・カナジの語から出た地名だろうといわれる。また、『太平記』に登場する金持景藤をはじめ、『吾妻鏡』『愚管抄』『大山寺縁起』などに名が出る金持氏の本拠地であったと思われる。

この「金持」という縁起の良い名前前から、昭和後期から注目され始めた。「当社に祈願してから宝くじを買ったら大当たりした」とか、その真偽は別として、噂が噂を呼んで今様流行神となりつつある。

鵜ノ池

日野郡日野町下黒坂・下榎
JR根雨駅から車で十五分

標高四〇五メートルの所に位置する。日野川左岸に位置し、河床から

の比高が約一八〇メートルで、標高四〇〇〜四七〇メートルに広がる鵜の池高原とよばれる緩起伏の河岸段丘状の台地上にある。

周囲四キロメートル、水深一二メートル、面積〇・一九平方キロメートルの池。もとは自然にできた池であったが、文化年間（一八〇四〜一八一八）と昭和十四年（一九三九）に堤防がかさ上げされ、現在、灌漑用発電用と多目的に利用されている。

周辺の山々にはコナラやクヌギが茂り紅葉の名所としても知られるほか、ウグイス、シジュウカラ、マガモなど留鳥、夏鳥、冬鳥が生息し、四季を通じて野鳥の楽園となっている。



る。県の鳥であるオシドリ自生地として知られ、多いときには二百五十羽が飛来した。鳥獣保護区に指定され、奥日野県立自然公園に所属する。

近くに長楽寺があり、かつては鵜の池の形成にまつわる伝説の一つ、卵野左内にちなみ「卵の池」と呼ばれたが、現在は池に多い鵜にちなんで「鵜の池」と呼ぶようになったといわれる。

滝山公園

日野郡日野町中書
JR黒坂駅より徒歩二〇分

平安時代、承平七年（九三七）の創建二伝えられる滝山神社と全山燃えるように咲くダイセンミツバツツジで有名な公園である。奥日野県立公園に指定されている。国道一八〇号を日野町黒坂まで行き、黒坂橋の前から日野川と別れ一本道を行くと、滝山公園前の広い駐車場に到着する。ここには、自然石を使った親水護岸の工法で整備された河川公園がある。橋を渡り、大径のスギ並木が続く参道を登ると、本殿の奥に落差五〇メートル程の竜王滝がある。竜王滝は小泉八雲の小説『骨董』の中で、幽霊滝として紹介されている。



滝の上に出ると、春先には高山植物のイワカガミが咲く。さらに、公園の上方にある茗荷峠（標高八八八メートル）に続く。峠の近くには不動ヶ嶽と呼ばれる岩屋があり、不動尊を祀っている。この辺りが戦国期の尾子合戦の古戦場である。夫婦桜と呼ばれるヒガンザクラの巨樹も一見に値する。なお、ツツジの見頃で

もある四月二十九日が滝山神社の祭日であり、花見を兼ねた参詣人でにぎわう。

竜王滝

日野郡日野町中菅
JR黒坂駅より徒歩二〇分

竜王滝は日野町黒坂の滝山神社の裏山にかかる滝である。滝山神社は滝山竜王権現と不動明王を祀り、病氣平癒を主とする滝行が行われた信仰の山と滝である。小泉八雲が『怪談』のなかで「幽霊滝」として紹介したように、この地には天狗が棲むという伝説がある。

伝説

日野町中菅の女性たちが集まって夜なべ仕事をしていると、肝試しをすることになった。大工の若嫁が発見し、肝試しの証拠に賽銭箱を抱えて帰る途中、天狗が笑っているのを見た。恐ろしくなった嫁が神社から駆け降りてくると、背中の子どもの頭がなかったという。

この伝説により、滝山神社には二歳になる子を連れて行ってはいけないと言われ続けている。

また、同じように天狗が棲むと信じられた大山では、一歳の時に詣り、それから十歳までは詣ることができないという。この禁を犯すと、背負った子どもの頭が失われたり、歩ける子どもは行方不明になるといいます。

久住滝

日野郡日野町久住
JR黒坂駅より車で七分

黒坂から北西にいたる天郷川支流沿いの標高四五メートルから五三〇メートルにある多段滝である。花崗岩に形成された断層や節理のある部分にできた滝で、道路からは二段の滝に見えるが、その上にも滝がある。滝の幅は六〜九メートルで、滝つぼの水深は〇・五メートル〜メートルである。

平成三年（一九九一）、周囲の樹木が伐採されてから、多くの人に知られるようになり、募集してこの名が付けられた。

宝仏山

日野郡日野町・江府町
JR根雨駅より車で二〇分

県西部、日野郡江府町と日野町の境界にある標高一、〇〇二メートルの山。南側を日野川支流の板井原川、西へ北側を日野川本流と支流の俣野川に区切られ、東は岡山県との県境稜線の毛無山（一、二二八メートル）、白馬山（一、〇六〇メートル）、金ヶ谷山（一、一六四メートル）、朝鍋鷲ヶ山（一、〇七四メートル）へと続く山塊の西端に位置する。この

山塊は開析がかなり進み、壮年山地の山容を見せている。

宝仏山を構成する岩石は、三郡変成岩の泥質片岩、砂質片岩、苦鉄質片岩と、これらを貫く花崗岩類である。花崗岩類には黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、ハンレイ岩があり、白亜紀末期から古第三紀にかけて貫入した。山頂の南西山腹にある後谷鉱山は、苦鉄質片岩分布域に位置し、銅・鉛・亜鉛などを産出したが現在は廃鉱になっている。

宝仏山へ朝鍋鷲ヶ山の一帯は良好な自然が保たれており、平成十四年（二〇〇二）三月、大山隠岐国立公園へ編入された。

江府町

江美城跡

日野郡江府町江尾
J R 伯備線江尾駅より徒歩一〇分

まちを見おろす高台に位置する城跡。城跡上部は平坦で田地となり、所々わずかに石垣を残している。戦国時代には、尼子氏の臣・蜂塚氏の居城であった。日野方面の押さえの城であったが、永禄七年（一五六四）（一説には永禄八年）八月、毛利方である尾高城主・杉原盛重の軍勢に攻められ落城した。

日本各地に「えび」を地名とする所は数多い。地名の由来も「えび」の背のように美しく湾曲する地形にちなむ所が多い。日野川の岸が見事にカーブする景観の美が、ここの江尾の地名の由来ともいわれている。昭和五十四年（一九七九）に、城跡への入口に歴史民俗資料館「八幡丸」が建ち、豊かな地元の郷土資料を展示している。

また、例年八月十七日の「江尾十七夜」には、戦国の昔をしのび「江尾のこだいぢ踊」（県指定無形文化財）が踊られる。

江尾のこだいぢ踊

毎年八月十七日に開催される「江尾十七夜」で踊られる盆踊り。編み笠に浴衣姿の多数の踊り子が太鼓と音頭に合わせて優雅に踊る。

「こだいぢ踊」という名称の「こだいぢ」とは、古代の地おどりという言葉に由来する説と新潟県の新保「広大寺」のことで、江戸時代後期に流行した歌に由来するという説がある。その口説きを真似て盆踊りに唄い踊られてきたものである。昭和四十九年（一九七四）、県の無形民俗文化財に指定された。



江美神社

日野郡江府町江尾
J R 江尾駅より徒歩五分

饒速日命などを祭神とする。社伝によると、天曆年間（九四七〜九五七）に当地方を治めた豪族・進氏が、大和国石上神宮（現奈良県天理市）の分霊を、天の磐船に模した神輿に安置して勧請したことから、かつては磐船神社と称したという。その後、厩戸豊聡耳命を合祀し、王子権現と神社名を改めた。

天文五年（一五三六）には、江尾城主・蜂塚右衛門が本社を造営し、社領六十三石寄進した。しかし、永禄八年（一五六五）、毛利・尼子の戦で神社は古文書・什宝と共に焼失したという。天正元年（一五七三）銘の棟札には、吉川元春が社殿を再興したとある。慶長六年（一六〇一）、米子城主・中村一忠は社領六石と家屋敷を寄進した。

明治六年（一八七三）に江尾神社と改称され、大正十一年（一九二二）に近隣の小祠を合祀し、現在地に移され、社名も江美神社に改めた。

東祥寺

日野郡江府町江尾
J R 江尾駅より徒歩五分

東祥寺は、山号を仏日山といい、日野郡内唯一の黄檗宗寺院である。本尊は釈迦牟尼仏である。

『江尾宿東祥寺縁起』によると、この寺が開かれたのは寛文七年（一六六七）のことという。それ以前は、江尾城主・蜂塚氏に関わる天台宗の大森山清洞寺という寺院があったといわれる。城主滅亡と共に衰退していった清洞寺は、杉谷（同町内）の大林寺、貝田（同町内）の常楽寺、宮市（同町内）の宝勝寺の三寺と合して東祥寺とした。

承応三年（一六五四）黄檗宗布教のために明（現中国）より渡来した三十六人の僧の一人、独吼和尚が開いた。和尚はまず米子了着寺を開いて教化し、次いで東祥寺を興したと伝えられている。

下蚊屋明神のサクラ

日野郡江府町下蚊屋
J R 江尾駅よりバス十五分、終点下車、徒歩三分

明神のサクラは、岡山県境に近い標高六〇〇メートルに位置する下蚊屋明神の境内にそびえる巨木である。サクラは、本州から九州に自生

するエドヒガンで山桜の中でも花期が早く、学術上貴重であることから昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

幹は地上三〜七メートルの所で六本に別れ、広い傘形の樹冠をつくり、社叢の他の木より抜き出ていて、遠くから眺めても見分けがつく。花は小形でうすい紅色、花弁は五枚で、満開期は四月中、下旬である。

なお、大型の樹木で樹齢も長く、社寺林によく植えられているシダレザクラは本種の栽培品種である。

下蚊屋の荒神神楽

鳥取県の南西部に位置する日野郡日野町、日南町、江府町では、備中神楽を伝承する集落がある。なかでも、江府町下蚊屋の荒神神楽は、集落の青年団が大正末期に美作から来た神楽を習い、昭和初期から長年の間、伝え継いできた民俗芸能である。演目には、スサノオノミコトが大蛇を退治する「八重垣」、オオクニヌシノミコトの国譲り神話を扱った「国譲り」などがある。

本来、岡山で行われていた荒神に奉納される神事・備中神楽を導入し

たものであるが、現在では鳥取県西部地方を代表する民俗芸能として受け継がれている。

昭和四十九年（一九七四）に県の無形民俗文化財に指定されている。



毛無山のカタクリ

日野郡江府町侯野
JR江尾駅よりサイジタンクまで車で二十五分、徒歩四〇分

毛無山は、江府町の南東、岡山県との県境である標高一、二一八メートルの山。古い登山路は岡山県側から延びていたが、近年、江府町侯野川下発電所に付設された巨大サイジタンク（標高七〇〇メートル）から山頂に向かう登山道路が開かれ、鳥取側からも容易に登山できるように

なった。

侯野からの登山路を登り、標高一、一六〇メートルで毛無山と白馬山の稜線が合流するあたりのブナ林の林床がカタクリの生育地として知られる。カタクリはユリ科の多年草で、地下茎に良質のデンプンが含まれ、かつては粉を精製したが、近年では乱獲を防ぐため保護の対象になっている。

早春の花の代表として知られ、毛無山での花期は四月下旬から五月上旬である。一本の花茎の先に、紅紫色の大きな花被片が反り返り群生して咲き乱れる様はみごとである。

熊野神社社叢

日野郡江府町侯野
JR江尾駅よりバス十五分、農協支所前下車すぐ

熊野神社社叢は、標高約三五〇メートルに位置し、日野川の支流である侯野川下流に沿って、侯野小学校に隣接している。

社殿付近には植栽されたイチイ、スギ、ヒノキ、ヒメコマツなどの巨木もあるが、天然のウラジロガシ、ケヤキ、ヤブツバキが多く昭和四十八年（一九七三）三月に県の天然記念物に指定された。

特にウラジロガシの巨木が多く、

胸高直径が一・三メートルに達するものがあり、その他ケヤキの胸高直径一・三メートル、イチイ〇・八メートルなどの巨木を見る。

かまこしき深谷

日野郡江府町
JR江尾駅よりバス二〇分

侯野川中流部に位置する深谷で、約六〇メートルにわたって花崗岩の特異な浸食地形が見られる。花崗岩は白亜紀末〜古第三紀の黒雲母花崗岩で、互いに直交する水平と垂直の三方向の節理面が発達する。深谷の流路はこの節理に規制されて、直角に方向を変えながら屈折し、切り立った壁の間を廊下状に流れ、階段



状の小瀑布や瀬・淵が続いている。

渓谷の最下流部には低い二段の滝があり、ここに名称の由来である「かま(釜)とこしき(甑)」とよばれる地形が見られる。釜は下段の滝壺に円形にひろがる淵で、甑は上段の幅狭い滝壺に形成された深い穴で、甑穴(ポットホール)と考えられる。この甑穴の口径は約三メートル、深さは七メートルあるいは九メートルとも言われ、口径に比べてかなり深い。

こうした特徴的な花崗岩の浸食地形から、平成十一年(一九九九)に「かまこしき渓谷の浸食地形」として県の天然記念物に指定された。

渓谷の上流には、流路に沿って下る遊歩道が整備されている。また、渓谷の八〇メートルほど上流の助沢地区には下蚊屋ダムが建設された。

俣野川ダム

日野郡江府町武庫
JR武庫駅より車で二〇分

中国電力株式会社俣野川発電所の発電用ダムで、珍しい揚水式であり、見学することができる。米子市から国道一八一号で日野川をさかのぼる。俣野川が日野川に注ぐ合流点に

ある。

俣野川ダムには駐車場や案内ホルの建物があり、猿飛湖と名付けられたダム湖や上流の発電所を一望できる。昭和五十九年(一九八四)に完成したもので、ダム高は六九メートル、堤長一八五メートル、総貯水容量七九四万立方メートルである。

南に位置する岡山県新庄村の土用川に「上池」となるダム湖が造られている。この俣野川ダムを「下池」として、両者を三・四キロメートルの導水路で結んでいる。二つのダムの落差五〇メートルを利用して百二十万キロワットの発電が可能である。ここでは、電力消費の少ない夜間に、他の発電所で発電された電気を使って「下池」の水を「上池」へ汲み上げ、一方、電力消費の多い昼間に「上池」の水を「下池」に落として発電している。汲み上げる時に、俣野川発電所はちょうどポンプの役割を果たしていることになる。

なお、俣野川の本流では、さらに上流で農業用の下蚊屋ダムがある。ダム湖の横を走る県道上徳山俣野江府線を行くと、途中で俣野川と分かれて大山広域農道を上り、内海峠に至る。右に行けば岡山県川上村の蒜

山高原で、左をとれば御机を経て大山方面に通じている。新緑や紅葉の時には、ドライブに最適なよいコースである。

武庫の七色ガシ

日野郡江府町武庫
JR武庫駅よりすぐ

小学校の後方にある雑木林のふもとに樹齢三〇〇年、樹高一八メートルの一本カシの巨木がある。伝説によると、現在ある武庫一帯の水田は昔は淵で、ここに大蛇が住んでいた。ところがこの淵が水田になってしまったので、大蛇のいるところがなくなり、ついにこのカシに巻きついたというのである。したがって、蛇槿(ジャガシ)とも呼ばれ、木に傷をつけると血が出るといわれている。

七色カシという名は、一年中いろいろな葉芽の色を変えることからつけられた。四月ごろは紫、五月ごろは黄、六月は白、七月は赤、八月は緑、九月下旬から翌年三月ごろまでは青黒色と順次変色する。変色の原因は、日光に対する保護作用によるものと思われる。この七色ガシは環境による個体変異であって、この木のタネを取って蒔いても七色ガシにはならない珍種である。当地方の

名木になっている。

州河崎のカツラ

日野郡江府町州河崎
JR江尾駅より徒歩六〇分

州河崎のカツラは、江尾駅から日野川を渡り、大谷林道を約二キロメートル上がった熊ヶ山(四三六メートル)の山麓で、標高三二〇メートルの溪流沿いの西向き斜面に生育する。カツラは鉄山の守護神とされるカツラ科の落葉高木で、その頃からこのカツラは金屋子神が宿る神木として祀られ、大切に保護されてきた樹である。

巨樹は根元近くから分岐しており、それを一本の材として測定すると、目通り一メートル、樹高二八メートル、枝は三〇メートルに達する。

その形状から大きさを比較することは難しいが、河原町落河内のカツラとともに日本有数の巨樹と考えられている。「とつとりの名木一〇〇選」に選定されている。

エバーランド

日野郡江府町御机
JR江府駅よりバス
二〇分、太平洋下車

奥大山のふもと、大山環状道路沿いに平成十一年(一九九九)十二月

に開設した。レストランからは奥大山の雄姿を望むことができ、「奥大山スキー場」もすぐそばという絶好の場所に位置する。館内にはビールを仕込む「ブルワリー」があり、奥大山の名水を利用して、地ビール『ブナの森から』が造られている。

江府町は自然保護憲章発祥の地でもあり、この地ビールの売上金の一部は自然保護のために役立てられている。施設内の物産コーナーでは、地元の特産品や地ビールが販売されている。

開館時間 午前10時～午後8時

休館日 火曜日（祝日の場合は翌日）

夏休み等は無休

詳しくはお問い合わせください。

問合せ先 ☎0859・77・2828

溝口町

伯耆鬼ミュージアム

日野郡溝口町
宇代
J R 溝口駅より徒歩二〇分

日本最古といわれる鬼伝説がある溝口町に、平成八年（一九九六）四月に開設した。山の中腹から町を見下ろす高さ三二メートルの鬼のプロンズ像が目印。施設には、国内外の鬼伝説や地元の鬼伝説「鬼住山物語」を紹介する3Dシアターやアニメーションシアターが設置されている。展望台からは、鬼伝説の舞台となった山々や町の守護神として配置されたいろいろな鬼たちを見ることが出来る。

平成九年（一九九七）四月には、周辺に多目的グラウンド、大型遊具、野外ステージを備えた「おにつ子ランド」が隣接して整備された。



開館時間 午前九時三〇分～午後五時
休館日 毎週火曜日、一月一日
問合せ先 ☎0859・62・0202

伯耆国山岳美術館

日野郡溝口町金屋
谷
J R 伯耆溝口駅より車で七分

大山の南側の裾野に平成五年十二月に開設された私立美術館。大山を中心とする国内外の山岳と自然をモチーフにした作品や、地元で活躍中の作家の作品を展示している。展示品には、山岳画家として知られる足立源一郎氏の作品など、社団法人日本山岳会から寄託されているものが含まれる。

また、併設されたサブホールは、貸しギャラリー（無料）として小品展や趣味の会展などに利用されている。

開館時間 午前10時～午後5時

休館日 月曜日・祝日の翌日

問合せ先 ☎0859・63・0396

楽楽福神社

日野郡溝口町宮原
J R 伯耆溝口駅より車で五分

近世までは楽々福大明神といわれ、孝霊天皇と皇妃細姫を主祭神とする。

孝霊天皇が伯耆国巡幸の際、笹をもって行宮を葺いたので楽々福宮と

称し、和銅二年（七〇九）に天皇・妃を祀って楽々福大明神としたといわれる。境内にある古墳は同天皇のものといえられる。孝霊天皇伝説は西伯耆各地で語られている。神社近くの鬼住山には「悪鬼が住み、人々を苦しめていた。隣の笹包山は、その悪鬼を退治された同天皇に笹に包んだきびだんごを献上した所」という伝説がある。

かつて村内には神宮寺である三帝山孝霊院があったが、元禄年中（一六八八～一七〇四）の大火で焼失した（『伯耆志』）。藩政期には日野郡の大社であり、口日野の総産土神であった。近代まで当社の祭日に催される奉納相撲は、郷土力士の出世相撲の場所であった。

明治元年（一八六八）に現社名となり、大正五年（一九一六）に近郷小社を合祀した。

当社では、伝承に基づく「悪鬼降伏祭」や氏子の無病息災を祈る「福笹授け」などが行われる。また、歯痛止めの神としても信仰された。

福岡神社の 蛸舞神事

日野郡溝口町福岡
J R 伯耆溝口駅より車で二〇分

福岡神社は鎌倉時代に熊野神社を

勧請かんじゆしたと伝え、速玉男命を祭まつっている。もとは上代かみだい神社といい、「蛸さん」といわれ親しまれている。創立年代は不明であるが、古くは若一王権現といわれた。

社伝によると若一王子権現は熊野三社内のの速玉男神であり、大昔、紀伊国熊野浦より大蛸たかに乗り、吉備国へ上陸しこの地に到来されたという。

当神社には毎年十月十九日の例祭で行われる蛸舞神事という奇祭がある。これは、藁わらで造った蛸を奏楽の拍子に合わせて舞わせるもので、昔、当社の祭神速玉男命が海中で蛸に助けられたことを記念しそれをかたどったものという。蛸舞が終了すると人が棟木に抱きつく。奏楽に合わせてながら、下にいる人々によって棟木を回される。なお、この行事は氏子が裸で参加する。昭和六十一年（一九八六）に県の無形民俗文化財に指定されている。



辻 晉堂つじ しん どう

辻晉堂は現代彫刻の異才である。

明治四十三年（一九一〇）、日野郡二部村（現在の日野郡溝口町）に生まれた。本名は為吉。大工に弟子入りし彫刻の才能を發揮、評判になる。昭和六年（一九三一）に上京し、洋画を学びながら彫刻を独学した。昭和八年（一九三三）の日本美術院展に『千家元磨氏像』が初入選し、彫刻家としての第一歩を踏み出した。

このころ晉堂は、写実的な木彫の作品を多くつくっている。また、禅の思想にひかれて僧籍に入り、晉堂と号した。

昭和二十四年（一九四九）、京都市立美術専門学校（現在の京都市立美術大学）の教授になる。写実的な作風から離れ抽象的な作品を（自分の精神の内面を）作るようになる。その後、「陶彫」という粘土を焼いて制作する彫刻作品で、独自の世界を拓いた。

昭和三十二年（一九五七）サンパウロ・ビエンナーレ展、翌年のベニス・ビエンナーレ展に出品、東洋的

な作品として高く評価されている。

昭和五十六年（一九八一）、七十歳で死去。昭和五十一年（一九七六）に京都市文化功労者に選ばれた。

主要作品に『寒山』『拾得』をはじめ、『下田光造氏像』や『佐々木惣一氏像』などがある。

二部小学校の『拓土の像』は故郷への記念碑的な作品である。